
SORRW and BOND - 運命-とき-の守り神 -

霧 一天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S O R R W a n d B O N D - 運命 - と き - の 守 り 神 -

【Nコード】

N 0 9 6 0 C

【作者名】

霧 一 天

【あらすじ】

復讐のため、仲間と共に旅に出た。旅の途中には数多の事があり、失っていた記憶さえ呼び戻す。そして、守護神と言う不老不死の守り神。最後の敵は――

悲しき旅立ちと果てしない目標

「ルフィア！ 起きろ！」

「んゝ、後ちよつと寝かせて下さいゝ」

小さな動物が青髪の少女を起こそうとしているが、少女に起きる気配は感じられない。寧ろまだ寝続ける気らしい。また毛布に包まった。

「……………ったく。ルフィア！ 学校に遅れちまうぞ！」

たった一言だったが、飛び起きるには十分だった。

「遅れちゃうっ！？」

ルフィアと呼ばれた少女は飛び起き、慌てた様子で名を呼んだ。

「レキっ！ 服を取って下さい！」

レキと呼ばれた動物はクローゼットを開け、器用に爪の先だけを使い、服をルフィアに放り投げるように渡した。

「ほらよ」

受け取ると、ありがとうございます、と言って素早く着替えた後、

青色の長い髪を高く結い上げた。

「外でライムとティアが待つてんど。早く行つてやれ」

「は、はい！ それじゃあ行つてきますね！」

近くに用意されていた鞆を手に取り、レキに挨拶をした。

「へいへい。分かったからさっさと行け」

適当に扱われ、ルフィアは少し不満そうだったが、時間も無かったので走って向かった。

家を出てすぐの所で、二人の人影が見えた。
更に急いでそちらへと向かう。

「ルフィア！ 遅れちゃうよっ！ 早く！ 早く！」

「早くしろ！ 置いてくぜ！」

手招きをして、二人してルフィアを急かす。

「ま、待つて下さいよっ！ ライム、ティア！」

ライムと呼ばれた、明るい緑色の無造作に伸ばされた髪を腰より

少し上の位置にまで伸ばしている少年と、ティアと呼ばれた、茶色のセミロングで、右に小さな三つ編みの髪の少女が、ルフィアを急かし続ける。

二人はいつも、ルフィアの家から少し出た場所でルフィアの事を待っている。その所為で遅刻をする事が非常に良くあり、その度にルフィア達は一緒に、先生に怒られている。

原因は言うまでもなく、ルフィアの寝坊によるものだ。低血圧なのか、昔から非常に寝起きが悪い。

ライムはルフィアの密かな想い人だ。見た目よりもうんとしっかりしていて、少し頭が悪いのが欠点。しかし回転は速く、何事にも素早く対応できる。ルフィアとそんなに年齢が変わらないのに、ライムは自分で狩りをして生計を立てている。

村より少し離れた位置にある小屋のような家に一人で暮らしている。

両親はライムが幼い頃、旅に出てしまい、それ以来一度もこの村に帰って来てないらしい。ライムは途中まで、村長にお世話になっていたが、暫くするとすぐに自分の力で暮らし始めた。

弓の腕は若いながらも、この村で一番だ。狙った獲物は逃さず、百発百中と言っても過言ではない命中率で仕留める。

ティアはルフィアの一番の女友達だ。自分の意志をしっかり持っていて面倒見が良い、明るい少女だ。何事もはきはきとしているが、友達想いの優しいところもある。多少飽きっぽいのがたまに傷。

両親はこの村で医師をしており、ティアもまた、そんな両親の様に法術師なりたく、今法術を勉強中だ。

法術と言うのは、別名、癒しの力とも言われており、己の魔力を用いて傷や病気などを癒す力の事だ。その為、法術師になるのは非常に難しい事だ。もし、この力を悪用する事があれば、大変な事になってしまうかららしい。法術を得たものは、それを反対の意味で使えるようにもなるからだ。つまりは、法術で命を救えるとすれば、命をも奪う事が出来る。

今のところ、簡単な法術と薬の配合を主として勉強している。ティアの両親の話によると、才能はあるらしいが、やはり、飽きっぽいのが難点だと言っている。

学校に着いた三人はその景色を見て愕然とした。

学校があつた筈の場所には瓦礫の山しか在らず、その所々から灰色の煙が上がっている。瓦礫の中からは火がまだちらほらと窺えた。地面は血まみれで、誰かの肉体が転がっていた。誰のかは判別出来ない程、形が崩れていてどこの部分かも分からない位だった。

「・・・・・・・・何これ・・・・・・・・！」

「・・・・・・・・皆は何処だ！？」

三人が周りを見回していた時、ルフィアはとある物を見つけ、ライム達にそれを見せた。

「・・・・・・・・ライム、ティア、これを見て下さいっ」

差し出した手の平の上には、紅い布が乗っていた。

よく見ると、紅い龍の額から剣が突き付けられている刺繍があつた。その龍の顔をよく見ると、紅い涙を流している。

「この紋章は・・・・・・・・！」

「ガイルの紋章！ くそっ！」

ガイルの紋章とは、ガイルという一人の男が率いる軍隊のような組織を象徴しているものだ。

殺戮、破壊を遊びと思っている、人として最低の男だと、ルフィアは思っている。

今まで、ガイルが殺した人、村や町は数知れないという。国を一人で滅ぼしたという説もあり、人々は密かに恐れている人物だ。

そんなガイルの下に居る者達は、大抵ガイルに弱みを握られ無理矢理仲間にされた人達だ。

ある者は家族を。ある者は村を。ある者は一族を、守る為にガイルに力を貸しているらしい。

抵抗したくても、その力は絶対的だった。

たった一人相手が相手だとしても、誰も勝てない。だから、人々はただその影に怯えて生きるしかない。

ガイル紋章を、地面に叩き付ける様に投げつけた。

紋章はひらりひらりとルフィア達を嘲笑う様に地面に落ちた。

「……………二人共、村へ行こう!」

「分かったわ!」

「急ぎましょう!」

三人は村の皆の無事を祈りながら、急いで向かった。

村に着いた三人は、壊された学校を見た時のように、村を見て愕然とした。

家は一軒残らず全て焼かれており、地面には昨日まで一緒に笑い

あつていた村人の顔が紅い血を流して転がっていた。地には血がそこら辺にたくさん付いていて、たくさん種類の武器が散乱している。

落ちている武器はとても良い物とは言えない代物ばかりで、きつとこれは村の皆が急いで集めた武器なのだと、悟れた。

それを考えると、いつものように寝坊をしてしまった自分を恨みたくなつた。

助けられなかった。

その気持ちで一杯になる。

たった一人で国を滅ぼす者に、この村の者全員が武器を持っても勝てる筈がない。けど、もしかしたら、ルフィア達が居ただけで少しは状況が変わっていたかもしれない。そう思うと、悔しさだけが残る。

「酷いです．．．．．つ。酷すぎます！ これも、ガイルの仕業何ですか！？ 許せません．．．．．っ！」

涙を流しながら嘆いた。今のルフィアに、涙を止める事が出来なかった。ガイルへの恨みが一気に湧き出てきた。

「．．．．．お父さん、お母さん．．．．．？ ．．．．．
っお父さん、お母さんっ！」

ティアは泣き叫びながら焼け焦げた我が家へと向かおうとした。しかし、そこにはもう人が居ると思えない程焼け崩れている。

我を忘れて家に向かおうとするティアの腕を、ライムが掴んだ。

「ティア、行くな！ まだ奴等が居るかしんねえんだぞ！」

自分が泣きそうになりながらも、必死にティアを止めた。今止め

ないと、きつと大変な事になってしまうからだ。

「だって……お父さんとお母さんがっ………！
みんなが………！」

「………ティア………今の私達は殺されるのが落ちでしょう。一先ず私の家に行きましょう？ 朝来る時点で何もなかったですから、まだ大丈夫な筈です。それに、レキも居ますし」

「………でもっ！」

焼けた家々から目を離さない。必死に見詰め続けている。そんなティアは、迷子の子供のような不安げな表情で、いつものティアらしくない。いつもは自信たっぷりで、でもそれが嫌味でない、そんな表情だ。あの明るい表情は、かけらも見えない。

「………ティア………お願いです………」

ただじつと、泣き叫ぶティアを見詰めた。

本当は、ルフィアも生きている村人が居ないか探したかった。けれど、もしかしたらまだガイルの達が居るかも知れないと思うと、早く此处を離れるのが良いと判断したから。だから、その事を分かってもらいたくて、ただティアを見詰め続けた。

想いが通じたのか、ルフィアを見た後、村の方を一目見て、唇を噛み締め耐えるように静かに言った。

「………分かった、わ………っ」

「………ティア、ありがとう………」

くるりとルフィアの家の方向を向き、早歩きで歩き始めた。

理解してくれた事に安心して、ルフィアはそっと胸を撫で下ろした。ティアに聞こえないような声で、そっと呟いた。

三人はルフィアの家に着いた後、全ての事をレキに話した。ガイルの紋章、焼け焦げた村と、血まみれだった大地の事、全てを詳しく説明した。

「・・・・・・・・そんな事が、遭ったのか・・・・・・・・」

全ての話を聞いた後、悲しそうに呟くように言った。

「・・・・・・・・レキ。私達はこれから一体どうすれば良いんですか・・・・・・・・？」

不安を感じ、レキに尋ねた。

あまりにも、突然過ぎた。昨日までの平和は、本当は幻だったのではないかと疑いたくなる程、ルフィア達のショックは大きかった。先程から、ずきずきと頭が痛んで仕方ない。まるで、脳がもう考えるなど言っているようだ。

「・・・・・・・・旅に出る。今は生きる事が優先だ」

はつきりとした言葉に、ルフィアは青の瞳を揺らした。

「・・・・・・・・でも、此处等辺は魔物が多いんですよ！　いくら弱いとは言え、私達だけでは危険です！」

此処等一帯の魔物は決して強くはないが、数が多い。魔物に集団で襲われたりすると、多勢に無勢。いくら弱いとは言え、ルフィア達が不利な状態になる。

まだ経験もさほど無いルフィア達にとって、危険な行為に変わらない。

「じゃあ何か？ お前は黙って此处に居てガイルの連中に殺されたのか？」

その言葉が、深く胸へと突き刺さる。

「・・・・・・・・っ！」

黙って殺されるなんて、絶対に嫌だ。死にたくなどないに決まっている。どんなに足掻いてでも生きたいと思う。だから、言い返す事が出来ない。

何も言えなくなり、黙りこくってしまった。

「・・・・・・・・」

暫く続いた長い沈黙を、ティアの力強い、はっきりとした声が破った。

「・・・・・・・・ルフィアには悪いけど、私は行くわ。お父さんとお母さん、それに村の皆の仇を取ってみせる！」

その瞳には、強い意志が籠もっていた。それと一緒に、深い悲しみと、切なそうな想いがあった。

きつともう、分かっているのだ。両親は、きつともうこの世にはいなくなっている事を。だから、そんなにも悲しく切ないのだ。や

り切れない想いを、ガイルにぶつけると、決めたのだ。

「・・・・・・・・ティア・・・・・・・・」

「ルフィアにや悪いが、オレも行かせてもらうぜ！ 此処ですつと悲しんでる訳にもいかないし、だいちティアだけじゃ心配だしな！
・・・・・・・・ルフィアはどうする？」

ルフィアはライムの瞳を見詰めた。

瞳には迷いがなく、真っ直ぐルフィアだけを見ている。

一人でずつと生きているライムは、自分で判断する事がしつかりと出来る。何事も自分で決めなければいけない環境で育ったからかもしれないが、その判断は殆どが正しいものばかりだった。

意志を変えるつもりは無い、村のみんなの仇を取る。瞳は、そう語っている。

「・・・・・・・・私は・・・・・・・・いいえ、私も行かせていただきま
す！」

迷いの無い、力強い笑みを浮かべて言った。

二人が行くからではなく、ルフィアの意志でそう決めたのだ。

此処に居ても仕方が無い。先に進まなければ、此処に居るだけでは、ただ死を待つ者になってしまふ。そんなの嫌だった。それに、ライム達同様、村のみんなの仇をとりたい。

だから、進む事に決めたのだ。

「よし、決まったぜ！」

三人はお互いに笑い、頷きあつた。

「取り敢えず、少し遠いがシルアに行くぞ」

港町シルア。

たくさん船が行き交う、有名な港町だ。此処の村からはさほど離れてはいない場所だ。

昔、一度だけレキと一緒にシルアに行った事があった。

人がたくさん居て、明るい、そんな事を良く覚えていた。

「それぞれ準備をしましょう。なるべく早く。ガイルの人達に見つかるといけないので………」

話し終わるとすぐにライムは立ち上がった。その後に続いてティアも立ち上がる。

「分かったぜ。じゃあ此処で集合な」

「私、っ少っしだけ町の様子見てくる。じゃーね」

「気を付けて」

手を振りながら、二人は外へと出て行った。

「……みんな行ってしまいましたね、レキ。私はこの剣だけで良いですから、少し、寝ておきます。レキ、ライム達が集まったら、私の事を起こして下さいね。後、ガイルの人達が来たら………」

悲しそうに笑って言った。

きっと村の様子を思い出したんだな、と思い、この会話を早々に

打ち切った。

「分かったから寝ろ」

微かに微笑みながら、ルフィアは静かに眠りに付いた。

「……………ついにガイルが、此处を嗅ぎつけちゃったな」

レキの呟きは、寝つきの良いルフィアには聞こえていなかった。

(……………此处は……………?)

目を覚ますと見覚えのある、建物の残骸の中に立っていた。

周りには無数の死体と、血と、炎。紅い色と真っ暗な闇。

身体を動かそうとしても、金縛りがあっている様に、びくともしない。

なんとか首だけ動かし、自分の姿を見ると血まみれだった。

(……………嫌……………。……………嫌、嫌っ！ 助けて……………！ 誰か助けて！)

その時は、何故だかルフィアは自分が死んでしまうかもしれないと思った。

必死に思った。死にたくない、助けて、と。それでも誰も助けには来なかった。

耳元で声がする。

「……ア……！……きろ、起きろルフィア！」
「……レ、キ……？」

ゆっくり体を起こすと、レキが心配そうに顔を覗き込んでくる。

「大丈夫か？ 大分魔されてたぞ？」
「……そうですか……もう、大丈夫です……」
「」

心配掛けまいと無理に笑った。

その無理をしていそうな笑顔は毎度の事なので、あえてレキも指摘はしなかった。

「……またあの夢を見たのか？」
「……はい……」

あの夢とは、最近ルフィアが見始めた、血まみれの地面に立っているという夢だ。

実はルフィアは記憶喪失と言うもので、この村に来た時から記憶が無かった。唯一の記憶の手がかりは、村に来た時に一緒に居たレキだけだったが、レキは記憶について話そうとはしなかった。先ほど見た夢は、過去に繋がっているかもしれないものだった。

頭の痛みが増していた。

二人に長い沈黙が続いていたその時、ライムとティアが帰って来た。

「準備、終わったぜ」

「・・・・・・・・・ライム、ティア。お帰りなさい」

二人を笑顔で出迎えた。

「ただいま、ルフィア。どうしたの？ 汗びつしよりだよ？ 大丈夫？」

帰って来てすぐに、ルフィアの様子に気付き駆け寄って来た。

先ほどの夢を見ていた所為か、いつの間にか汗だくになっていた。

「・・・・・・・・・大丈夫ですよ。少し夢をみただけですから。それより、もう出発しても大丈夫ですか？」

二人はゆっくりと頷いた。ルフィアとレキも頷き、ティアが家の玄関の扉を開け、勢い良く地面を蹴って歩き出した。

空は今のルフィア達の想いを励ますかの様に、青く澄み渡っていた。

「それじゃあ、出発〜！」

不安な気持ちを吹き飛ばすかのよう、明るい声でルフィア達に向かって言った。

「・・・・・・・・・遠足じゃないんだがな」

レキは呆れたように言った。その後、暫くレキはぐったりと寝ていたとか・・・・・・・・。

悲しみを背負い、三人と一匹は旅に出た。いつ終わるか分からぬ、
復讐への旅へ――

蟹擬どきと泡攻撃

「水よ、汝の力で全てを呑み込め！」

巨大な身体を持つ魔物達が、ルフィアが唱えた水属性呪文の水に包み込まれもがき苦しむ。その隙をつき、ライムが矢を放った。

「豪烈！　こごつれっ！」

弓からは勢いがある矢が放たれた。見事に魔物には矢が突き刺さり、傷口から青い血が吹きだす。二人の攻撃を受けた魔物達は叫び声を上げたが、すぐに態勢を整え、ライムの方へと突進してきた。いきなりの事で、尚且つあまりライムと魔物の間が無かった為、避けるのは無理だった。

「ちっ！」

舌打ちをしてから、両腕を前に出し、臨時の守りを作った。後少しでぶつかる、という時、凜とした声が響いた。

「護れ、光の盾よ！　バリアー！」

すかさずティアが魔物達の攻撃からライムを、魔法で作った光の盾で防いだのだ。

盾に弾かれた魔物達は、無様にもひっくり返った。

起き上がるうと、じたばたと手足を動かし暴れている。

「水の小精霊達よ、鋭く尖る刃となりて、敵を切り刻め！ 水剣！ - すいけん -」

暴れる魔物達の上に、ルフィアが魔法で水で創り出した剣を雨のように降らせ、その巨大な身体を貫いた。

魔物達は水の剣を雨のようにいくつも浴び、青い血を噴出しながら唸り声を上げ、次々に倒れていった。

息絶えた魔物の身体は、黒い灰となり、風によってその灰までも消えていった。

ルフィア達は見事な連携で、魔物に勝利した。

何度目か分からない魔物との戦闘に、慣れてきた反面疲れが溜まっていた。

遠くから先程の戦いを見ていたレキが、三人に近づいてきた。

毎回レキは危ないから、と言って、自分だけ安全なところへ逃げる。魔物が完全に周りに居なくなってから、ルフィア達のところへと来るのだ。

「二人共、大丈夫？」

一息ついてから、ティアが駆け寄ってきた。

二人の身体をそれぞれ見て、怪我がないか確認する。

この確認は、戦闘後必ず行う事で、怪我しているところなどがあればすぐにティアは治療をしてくれた。流星は、法術師の卵だけあって、そういうところには抜け目ない。

「あつ！ ルフィア怪我してるじゃない！」

そう言ってティアは、ルフィアの右腕を指した。

肘を折り曲げ指された部分を見ると、確かに切り傷のような

細長い赤い線が出来ていた。うつすらと血が滲んでいる程度で、決して大きな傷ではない。

「待っててね。 汝に癒しを与え給え」

ティアは普段から愛用している杖を空に掲げ祈り始めた。すると、ルフィアの傷口に光が集まり、それ全体を包み込んだ。一瞬青白く光ったと思ったら、光が弾け、傷は綺麗に消えていた。

「ティア、ありがとうございます」

「はい、どういたしまして！」

お礼を言つと、ティアは嬉しそうに笑い、軽く傷があつた場所を叩いた。

「………たくつ、あんま無茶すんじゃねえよな」

いつの間にか隣に来ていたライムが、溜め息混じりで言った。
この三人の中で一番怪我をしているのは今のところは断トツ、ルフィアだった。

前線で戦っているので仕方が無いのだが、怪我をする度にライムに注意をされるのだ。勿論ティアにもレキにもされるが、ライムは本当に毎回だ。

心配しすぎだとは思うが、想いを寄せている人に心配されるの。密かに、少し嬉しく感じている。けど、心配させてしまっている罪悪感もある。

「う、ごめんなさい……………」

少し俯き、ライムの顔を上目で見た後、済まない気持ちで一杯に

なりながら謝った。

横目でルフィアを見たライムは、顔を少し赤らめた。

「こ、今度からは気を付けろよ!」

不自然なくらいの声の大きさに、普通ならそこで何か変だと気がつくだろう。しかしルフィアは特にそれに気がついてはいなかった。

「はいっ!」

顔をぱつと上げ、ライムに微笑みかけた。

それに対し、ライムも照れたように微笑み返した。

既に存在を忘れられているレキとティアは、地面に座り込み二人だけの世界にいつている人達に気付かれないよう、小声で話していた。

「ねえねえ、レキ。あれどう思う?」

「どうって……どう見ても両想いにしか見えないな……」

視線を遠くして答えてレキのように、ティアも二人から視線を遠くへと移した。

「……………私も……………」

「二人共、鈍すぎ……………」

最後の言葉は、二人して見事なまで揃った。

魔物に見つかるまで、三人と一匹はそこに留まっていた。

港町・シルア

人の声が絶え間なく溢れている。どれも声も楽しそうで明るいものばかりで、活気溢れていた。建物もたくさんあり、港にはいくつもの大小異なる船が留められていた。一目でこの町がどんなに平和かが分かる。

「うわぁ、広いねっ！」

喜びのあまり、ティアは飛び跳ねていた。隣では、静かに喜んでいるルフィアが瞳を輝かせていた。

それもその筈だ。

村を出た事がなかったティアにとって、ルシアは初めて訪れる町だ。興奮して喜ぶのも当然だ。ライムは極たまに狩りで捕まえた獲物を此处へ売りに出かけているらしく、このような場所には慣れていた。ルフィアはただこういう活気溢れる場所が好きなだけだ。

「あんまりはしゃぐなよ」

いつまでもはしゃいでいるティアを見かねたレキは、ぴしゃりと叱るが、ティアは無視して辺りを見渡している。流石にルフィアはもう落ち着いたが、まだ少しそわそわとした。

たくさんの人とすれ違い、迷子にでもなってしまうそうだ。村にはルシアのようにたくさんの人が行き交う場所はない。物珍しくて

仕方が無いのだ。

「・・・・・・・・・・此処でヒルド大陸行きの船に乗る。で、大都市カルディアで武器や道具を整える。分かったか？」

もうティアを放っておく事にしたレキは、ルフィアとライムの方だけを向いて言った。それでもティアは、行き交う人々を楽しそうに見ていた。ルフィアもちらりとそちらの方を見たが、なんだか様子がおかしい人も居た。

「分かり――」

取り敢えずは返事を返そうと途中まで言いかけたが、それは男性の大声にさえぎられた。

「魔物だ！ 魔物が侵入してきたぞーッ！ 逃げるんだ！ 速く逃げるんだ！」

先程からの様子のおかしい人達は、みんな逃げ惑っていた人達だった。

大声の警告を聞いた人々が北門の方から急いで逃げ回っている。北門から逃げているという事で、そこに魔物が居るとすぐに分かった。

「二人共、倒しにいきましょう！」

二人が頷くのを確認し、ルフィアは人の波を掻き分け進んで行った。

三人は魔物の居る北門へ着いた時、驚きで目を大きく見開いた。

そこに居た魔物は悠に四メートルの高さを軽く越しており、首が痛くなる程見上げる必要があった。重さも、かなりのものであると思える。間違えて下敷きになったら、確実に命はないだろう。

けれども、さらに驚かされたのは魔物が蟹のような姿をしていたからだ。身体の色は紫色と、なんとも毒々しい色だ。巨大な鋏がついており、あれに挟まれたら一溜まりも無い。

この蟹のような巨大な魔物を、今まで一度も見た事がない。多分、他の旅人達ですら、見たものは滅多に居ないだろう。

「……………ティア！ 調べて下さい！」

全く未知なる魔物と戦うのは、不利なだけだ。ただでさえ、巨大だ。此処は魔物の弱手を攻めるべきだろう。

そう考えたルフィアは、ティアの法術を使い、魔物について調べてもらう事にした。法術は人の身体の状態を調べるものもあり、それを魔物に使えば魔物のステータスが分かるのだ。

無言でティアは頷き、杖を掲げ呪文を唱え始めた。

「汝の全て、我に教えよ！ ……弱点は雷属性よ！ どうでも良いんだけどそいつ 蟹じゃなくて海老の分類に入るらしいわ！ それに海の奴でも特大！」

それを聞き、ルフィアはすぐに動いた。

「どうでも良すぎ……………」

レキの呟きに、ルフィアは心の中で少し賛成をした。しかし、口に出す程勇敢ではない。戦いの最中だが、ティアとレキは一旦姿を消した。だがすぐにティアだけが戻ってきた。レキはどうなったか分からない。

蟹擬きの魔物の隙をつき、その間に雷属性の魔法を唱えた。

「雷よ、敵の自由を奪え！」

唱え終わるといきなり空が曇り、蟹擬きに雷が落ちた。

その雷は見事なまでに当たり、すぐに体力と身体の自由を奪った。

身体が痺れて動かない蟹擬きの海老の魔物は悔しそうな唸り声のようなものをあげる。けれど、動けはしない。

まだ魔物が動けぬうちに、ライムが矢を放った。

「はああっ！ 雷撃——らいげき——」

矢を受けると同時に、魔物は口から勢い良く泡を吹き出した。その泡はルフィアの方へ真っ直ぐに向かった。

「つきゃああ!？」

思ってもいなかった攻撃をともに喰らったルフィアは、短い悲鳴を上げ、泡の勢いに押され後ろに倒れた。

「ッ！ 刹那——せつな——」

その光景を見たライムは、渾身の一撃を喰らわすが、蟹擬きの魔物にはあまり効果が無かった。甲羅が硬く、あまりライムの矢が利かないのだ。

今すぐルフィアのもとへ向かいたいが、魔物を足止めさせる必要もあり、ティアに任せるしかなかった。

「クソッ！」

「手伝ってやる！」

苦戦していると、他の黒髪赤眼の剣士が一人現れた。どうやら加戦してくれるらしく、ライムは心の底から感謝した。

もう一人居たようで、金髪の少女はティアの手伝いへと回ってくれた。

ライムは一呼吸置いて、目の前の敵にだけ集中した。

「ルフィアッ！」

魔物の攻撃を受けたルフィアの身体が後ろへ倒れた。それだけならまだ良かったのだが、その際に頭を強く打ち付けていた。

急いで駆け寄ってみると、頭から多少の出血があつた。もしかしたら、内部にも損傷があるかもしれない。もしその場合、まだ未熟のティアだけではどうしようも出来ない。まだ外部の傷しか治す事が出来ないのだ。

「大丈夫っ！？」

そこへ一人の少女が現れた。金髪青眼の少女はティア達と同じくらいに見える。目の端で捕らえたが、ライムの方にも助っ人が居るようだった。

「頭から血が出るの！ 倒れる際に頭を強く打ちつけて、もしかしたら脳の方にも怪我してるかもしれないわ！」

口早にティアが説明をすると、少女は返事をせずに、ルフィアの出血している部分に手を添えた。

ゆっくりと目を閉じ、深呼吸をした。すると、手から光が漏れていた。法術とはまた異なったものらしく、呪文無しで出来るようだ。ティアは初めて見る光景と、ルフィアの傷が治るようにと祈りながら、少女の光が出ている手をじっと見詰めた。

加戦してくれた、少年にも見える青年は相当の手練で、一気に形勢逆転していた。

すぐに魔物にはたくさん切り傷が出来、右の挟みも青年は斬り落としてしまった。ライムの矢も、今まで効かなかったのが嘘のように、面白いくらい甲羅に刺さった。

「てえいつ！」

最後に男が蟹擬きを真ん中からぶった斬った。左右に分かれ、魔物は倒れた。ぴくりとも動かず、死んだようだった。

「たくつ、硬い奴だったぜ……」

魔物の血で汚れた剣を、取り出した布で拭き取りながら青年が言った。

さくさくと音が出てきても良かったくらい青年はあっさりと魔物を斬っていた為、ライムにとってそれが嘘のようにも思える。

「お前、仲間倒れてんだろ？ さっさと行ってやれ」
「あ、ああ……！！」

実は先程から、ずっとルフィアの事が気になって仕方がなかったけど、無断で行くのも失礼と思い、行くに行けなく困っていたのだ。礼を言った後、ライムはルフィアのもとまで走った。

「これできつと大丈夫だよ。でも、色々な疲れもあるだろうから、すぐには目覚めないと思う。ゆっくり休ませてあげてね」

「あ、ありがとう！」
「助かった」

少女がルフィアの治療をしている最中に、遅れてレキが血相を変えてきた。けど、今のルフィアの顔色を見て安心していて、最初は慌てていたが今は落ち着いている。

先程少女はルフィアの傷を治してくれた以外に、疲れが早く抜けるようにと持っていたらしい薬をルフィアに飲ませてくれた。

「随分と長旅をして疲れているようだね。貴方もしっかり休んでね」

微笑まれながら少女に言われ、それからどつと疲れが出てきたようにも思えた。

そういえばどうして長い旅をしていると、少女は分かったのだろう。

そう思い、ティアは自分の身体を見てみた。

靴が、たくさんの泥で汚れていて、服もあちこち汚れている。そ

れで気づいたようだ。

「あ、友達が来たみたいだよ」

そう少女に言われて、少女が向いてる方向を見ると、ライムが必死な形相で此方に走っていた。その後ろで、青年が歩いてくるのが見えた。

立ち上がった少女が、青年のもとへ駆けていった。

「ルフィアッ！ ティア、ルフィアは大丈夫なのか！？」

あまりにも必死な表情で、思わずティアは吹き出した。

「だいじょーぶ！ 今は寝てるだけよ」

そう言ってやると、本当に安心したように、気の抜けた顔で笑い、ルフィアの隣に座り込んだ。

「あの人達にお礼を言わないとね」

「そうだな」

二人は、青年達の方を向いた。

嬉しそうに少女が青年に話しかけ、笑っていた。ティア達の視線に気づいた少女は、青年の腕を引き近づいてきた。

「ルフィアを助けてくれてありがとう。それに、助太刀までしてくれて」

「ほんとに助かったぜ」

「俺からも感謝する」

それぞれでお礼をいうと、少女は嬉しそうに笑った。青年は表情を変えずに、レキを不思議そうに見ていた。喋る動物を見て、興味を持っているのだろう。

「私はルカっていうの。こっちはグル。ルカとグルって呼んでね！
貴方達は？」

にこにこ笑いながら自己紹介をした少女はルカといい、青年はグルというらしい。

「私はティアよ。倒れてる子はルフィア。で、弓使いがライムで、喋るへんてこなルフィアのペットはレキ」
「ペットじゃない！」

ティアの説明に対し、レキがすかさず訂正を入れる。そんな一人と一匹の会話を聞いて、ルカは吹き出した。

「仲が良いだね。羨ましい。グルは無愛想だからね。あ、でも本当はとってもやさしいんだよ！ 痛っ！」

幸せそうにグルの説明をするルカの足を、グルが思い切り踏みつけた。恐ろしい形相でルカを睨んでいる。

あれは相当痛い。ルカは踏まれた足を押さえて痛みを堪えていた。

「酷いよ、グル……。うっ、痛い……。」「
「煩え。自業自得だ馬鹿」

そんな二人の会話を見て、今度はティア達が吹き出した。ルカはそれに気がつき恥ずかしそうにし、グルは苦虫を噛んだように、なんとも言えない表情をした。

「・・・・・・・・もう行くぞ」

「あ、待ってよグル！・・・・・・・・じゃあね！」

歩き出したグルを慌てて追いながら、ルカはティア達に手を振り、姿を消した。

まるで嵐のような二人だった。

二人と一匹は呆然としたが、暫くするとルフィアを休ませる為に宿屋に向かった。

「・・・・・・・・此処は・・・・・・・・？」

目を覚ますと、すぐに茶色い木の天井が目に入った。身体が筋肉痛の様になっていて、動かそうとすると少しだけ痛い。

「あ！ ルフィア！ やつと目を覚ましたの？ 良かったあゝ！」

まるでルフィアが起きたタイミングを見計らっていたかのように、ドアが開く音がした後、ティアの声がして、駆け寄ってくるのが分かった。

上半身だけ起き上がらせ、周りを見てみると、宿屋のような場所で、ベッドに寝かされていた。

「ティア・・・・・・・・？ どうしたんです？ 魔物と戦っていたのでは？ それに此処は？」

分からないところを一気に質問をした。するといつの間にかレキがきて、呆れ顔でルフィアに教えてくれた。

「おいおい、覚えてないのかよ……。お前はモンスターの攻撃を受けて倒れたんだ。それに此処は宿屋。礼は、助っ人になってくれた二人に言うんだな」

溜め息をつきながら、レキは言った。

あの二人とは？ と聞く前に、慌てたようなティアの声が先に発せられた。

「そついえばライムが居ないわ！ ちょっと探して来るね！」

そう言つとティアはライムを探しに何処かに行ってしまった。

「レキ、私はどのくらい寝ていたんですか？」

ティアが立ち去つた後、あの二人以外の、もう一つ気になっていた事をレキに尋ねた。

するとレキはまたため息をついた。

「……………丸々三日だ」

「ほへッ！ ……そ、そんなに……………です、か……………」

自分でもその事が信じられなくて、暫くの間、放心状態になった……………。そのルフィアの姿を見て、レキは必死に笑いを堪えたとか……………。

「ルフィア！ もう大丈夫なのか！？」

ノックもせず、飛び込むようにライムが部屋に入ってきた。

その後 ゆっくりとティアが入ってきて、その時やっと放心状態は終わった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぐっすり、たっぷり寝たので大丈夫ですよ」

ルフィアは、自嘲気味な笑みを浮かべながらもライムに微笑んだ。すると、そんな二人を見たティアが茶化するように、にやけた表情になって言ってきた。

「ライムったら、ルフィアが起きないけど大丈夫か、大丈夫かって何度も聞いてきたのよね。それに、一番ルフィアの傍にいて、なかなか離れてくれなかったのよね」

「んなッ！」

その言葉を聞いて、ルフィアとライム、二人して顔を一気に赤く染めた。

改めて、といった感じでライムに向き直ったルフィアは、まだ顔を少し赤くしながらも、軽く頭を下げた。

「ライム、心配かけてしまつてごめんなさい・・・・・・・・。それとあ、ありがとうございます・・・・・・・・。」

「べっ、別に構わないぜっ！」

両手を振り、何度も構わないと連発するライムは、先程よりもうんと顔が赤い。

そんな二人の様子を見聞きしながら、一人と一匹は心の中で呟いた。

（早く告れ・・・・・・・・・・ライム）

その想いが通じたか分からないが、二人は、まだ顔を染め続けた。

目を覚ましてからも、念の為にと三日程休まされたルフィアは、久しぶりに日の光を浴びて大きく背伸びをした。

先にレキとライムは船のチケットを買いに行き、後からルフィアとティアがそちらに向かい合流する約束をしていて、だからこの場には少女二人しか居なかった。

「んっ！ やつとカルディアに向かえるんですね！」

「そうだね！ それにルフィアが元気になってよかった」

背伸びしたルフィアを真似るかのようにティアも背伸びをして、につとしたような笑顔をルフィアに向けた。

ただそれに言葉を付けずに、ルフィアは微笑み返した。

その後、ルカとグルと言う二人組みの存在を詳しく知らされたルフィアは、今すぐにでもお礼を言いたかったが、もう何処かへ行ってしまったと聞かされた時には、どうしようかと迷った。助けてもらった本人がまだお礼を言っていないのだ。ちゃんとお礼がしたい。考えている事に気がついたのか、ティアがルフィアの肩を軽く叩いた。

「きつとまた会えるよ!」

「……………そうですよね!」

二人の少女は仲良く手を繋ぎ、他の仲間の待つ港へと向かった。

三人と一匹は船に乗り、大都市カルディアを目指した。

揺れる船に乗りながら、前日あれ程寝ていたルフィアは、今もぐっすり寝ている。どうすればそんなに寝られるのかと、不思議に思う。

寝顔は幼く、酷く儂げだ。疑う事など知らない、子供のような。とても繊細で、すぐ壊れてしまいそうな。

今までは何も知らずに来れた。けど、これからは違う。旅をしている。ガイルを倒すという決意までをもした。今まで通り平和で。なんて、とつくに崩れてしまった。村が滅んだ日から。否、もっと前から――

(……………此処まで来ちまった。ルフィアに、思い出させちゃうかもしれない……………。すまない、ルフィア……………。せめて、もう少しの間でも良いから、良い夢を見てくれ……………。……………)

もう、後戻りなんて出来ないだろう。

ルフィアの寝顔を見ながら、その傍らで深い眠りについた――

謎の少女と似ている女性

シルアとは比ものにならない程の大小連なる建物に、たくさんの人々。此処は大都市カルディア。

此処には魔術研究所という建物があり、そこにはルフィア達の友達であるザックと言う少年が働いている。

彼は十一歳にしてこの都市にきて、先に働きに出ていた両親の手伝いをしているそうだ。昔からとても賢く、普通の大人ならば、そのザックの知恵には勝てなかった。それ程頭が良く、俗に言う天才なのだ。

「噂には聞いてたけど、本当におつきー！」

「本当ですね！」

ティアとルフィアはきよきよと辺りを見渡し、思い思いの歡喜の声をそれぞれ上げている。

人とぶつかりそうになっても、構わず辺りを見渡し続けるティアは、傍から田舎者とすぐに分かってしまうだろう。

「おいお前等！ 遊びに来たんじゃないんだぞ！」

いつまでもはしゃいでいるルフィア達に対し、保護者役でもあるレキが注意をするが、ティアはあまり聞いていない。皆にそっぽを向き、何か遠くの方を見詰めていた。

「まあまあ。レキ、怒らないで下さい」

今にでもティアに怒鳴りつけるような勢いで齒を剥き出しにして

怒り出したレキを宥めた。

宥めるのに骨を折っているその時、ティアが何かを見つけたらしく、目を輝かせてルフィアに話し掛けてきた。

「ねえねえルフィア！ あつちに大きい噴水があるよ！ 行ってみよう」

指差された方を見ると、確かに見た事もないような、巨大で立派な噴水があった。思わずルフィアも、それに興味を示してしまった。

静かに瞳を輝かせていると、ティアに腕を引っ張られ、ずるずると人を掻き分けそちらに向かった。

「あつ！ 待てティア！」

慌ててレキがティアを留めるが、その声に耳を傾けるようなティアではなかった。

「ちゃんと戻ってくるから大丈夫よー！」

レキに大きく手を振り、そのまま人に紛れて姿が見えなくなってしまった。

「いやそうじゃねえよ！ って、もう見えねえし……」

レキがツツコミをいれているうちに、ティアはルフィアを引きずりながら完全に姿を消していた。

当然、噴水に向かったのだろう。

「まあまあ、落ち着こうぜ？ ンなにカリカリすんなよ」

「・・・・・・・・・・してねえよ」

「・・・・・・・・・・十分してんじゃん」

一人と一匹は、それぞれ別の意味で溜め息を吐いた。

噴水の前に来ていたルフィアとティアは、驚きのあまり固まってしまっていた。周りに居る人々も例外でなく、同じように固まっている。

何故ならば、ルフィア達より一、二歳くらい年下に見える、黒髪のツインテールの少女が噴水の流れ出る水の上に立っていたからだ。服装は独特なもので、服の袖が妙に長かったりしている。

勿論、少女が立っている間にも水は止めど無く流れ続けている。

「そこの青い髪の者！」

噴水の上に立っている少女が、ルフィアの方をじっと黒い瞳で睨みつけ言った。

一瞬ルフィアは辺りを見渡し、自分以外に青い髪の人居ないか確認にする。しかし、青髪の人ルフィア以外一人も居ない。つまりは、ルフィアを指名されているのだ。

「・・・・・・・・・・ひょっとして、私ですか？」

自分だと分かっている、念の為、自分で自分の事を指差し、少女に尋ねる。すると少女の眉間に皺が一気に寄った。

「貴様しか居ないだろう！　ところで貴様がルフィ——」
「よおっと待ったああー！」

いきなりティアが少女の言いかけた言葉を遮りながら叫び、少女の方を睨むように向く。その声に、少女とルフィアと、いつの間にか集まって、一定の距離を置いていた野次馬達と一緒に驚いた。

「人に名前を聞く時はまず、自分から名乗るのがお約束でしょう！」
何がお約束なんだ、普通常識だろう。そう思ったものは少なからず居たに違いないセリフだった。

「ティ、ティア………？」

その言葉にルフィアは、驚き、少女はどうしようかと迷っている様子だった。けども、すぐ口を開いた。

「………っ分かった！　あたしの名は八神煉だ！　さあ、貴様の名を名乗れ！」

思い切ったように名乗られた名は、あまり聞いた事の無い珍しい名前だ。もしかしたらこの少女は、何か特別な文化を持つ一族なのかもしれない。この世界には、そういった存在は珍しくはないのだ。煉と名乗った少女は再びルフィアの事を指差し、睨んだ。

「あ、はい！　私の名前は確かにルフィアです。ルフィア・ミッシェルです」

名を聞いた途端、一瞬だが煉は、とても悲しげな顔をした。しかしすぐにルフィアを睨んできた。

さっきの表情はなんだったんだ、と悩んでいるうちに、いつの間にか煉は背中に背負っていた巨大な扇のようなものを広げて構えていた。

「やはり貴様がルフィアか！ その命、頂戴させてもらうぞ！

毒霧——どくきり——」

「荒風！——あらかぜ——」

大きな扇を扇いだ。すると紫色をした霧みたいなものがルフィアを覆おうとした瞬間、ルフィアのすぐ隣すれすれから矢が飛んできた。矢に巻き込まれていた風が紫色をした霧を散らした。

驚きのあまり、ルフィアはぺたりとその場にしゃがみ込んでしまった。呆然と、空を見て気を落ち着かせようと努力する。

「大丈夫か？」

「ラ、ライム………」

駆け足でルフィアのもとへやって来たのはライムで、ゆつくりとルフィアを助け起こしてくれた。まだ驚きを隠せていないルフィアは、ひくついている笑みを浮かべながら、助けを借りて何とか立ち上がった。

「あ、ありがとうございます………」

お礼をすると、漸く気分が落ち着いてきた。くるりと辺りを見渡してみると、煉が技を放った後なのからか、少し薬品のような匂いがした。周りの野次馬達は、とっとと逃げてしまっていて、ルフィア達以外、誰も居なかった。居たとしてもすぐ近くの周りではなく

大分遠くの位置だ。

「おいお前！ 危ねえ……ってもう居ねえし！」

煉に文句を言おうとして、煉が居た場所を見るが、もうそこに煉の姿はなかった。ライムはクソッ、と小さく舌打ちをした。

「すごい………何時の間に逃げたのかしら？」

ティアが辺りを見渡すが、やはり姿はなかった。

「ところで、さっきの小娘は誰なんだ？」

いつの間にかルフィアの隣に来ていたレキが、怒った様な口調で煉の事を尋ねてきた。

軽くレキに説明をすると、さらにレキの怒りは膨れ上がってしまったらしい。今日はもう宿屋に行くぞ、という言葉が、やけにとげとげしい。

歩きながら、ルフィアは先程の煉と名乗る少女について考えた。

（本当に私を殺したかったのでしょうか？）

あんなに、ルフィアの名前が分かった時の煉の顔は、悲しげだった。すぐに戻ってしまったが、本当はルフィアを殺したくないのではないだろうか。

仕方なく。そんな感じがする。

考え事をして歩いていると、一人の女性がルフィアの横を通り過ぎた。

紅の長い髪に、力強い、髪と同じ紅の瞳。ルフィアと少し似ている顔立ちをしていた。髪は右肩の方に一つにまとめられている。

女性はルフィアの横を通り過ぎる瞬間、ルフィアにしか聞こえない様な小さな声で囁いた。

「復讐は何も生まない。ただ新たな悲しみを生むだけ——」
「え……？」

反射的に後ろを振り返ったが、そこにあの紅髪の女性は居なかった。気配すら、残っていない。

不意に、ルフィアはあの女性を知っているような気がした。とても懐かしくて、でも、とても悲しい。切ない気持ちでルフィアを襲った。けれど、女性の事を考えれば考える程、激しい頭痛がルフィアを襲った。

「おーいルフィア！ おいてくぜ！」
「ま、待って下さい！」

何時の間にか立ち止まり、下を向いて考えていたルフィアは、名前を呼ばれ顔を上げると、ライム達が遠くで呼んでいた。後ろ髪を惹かれるような思いをしながらも、待たせる訳にはいかないと、ライム達のもとへと行った。

ルフィアから隠れるように、女性は物陰に隠れていた。
ぎゅっと、胸に手を当てて、痛みに耐える。背中が、燃えるように熱くて仕方が無い。

“復讐は何も生まない。ただ新たな悲しみを生むだけ——ルシフ

ア、もうあんな悲しみを繰り返してはダメ。思い出すの、記憶を――”

女性は、ただただ涙を堪えて祈り続けた。

強く閉ざされた瞳には、幼い少女の顔が浮かび、幸せそうに微笑んでいる。けどその表情はだんだんと切なげになっていき、涙目になり、最終的には泣いていた。

下を向いていた顔を上に上げ、青く澄み渡った空を真っ直ぐ見詰めた。

“もう誰にもあんな苦しみを味あわせては、絶対にダメなの。お願い、早く、早く思い出して――”

女性はもう一度心の中で名を呼んだ。ルシファ、と――

取り戻した記憶と本当の名前

(・・・此処は・・・？)

周りには建物らしきものの残骸。至る所に血がべつとりと付いている。

周りは炎と、人間として判断して良いか分らない肉体が転がっている。そして目の前には血の付いた大きな剣を持った男が立っていた。男は無残にも、転がっている肉体を足で踏み潰しながらルフィアに近づいてきた。

(・・・嫌。来ないで！ 来ないでえっ！)

ルフィアの思いも虚しく、男はどんどん近づいてくる。ルフィア逃げ出したかったが、体が動いてくれない。

男は右手に持っていたあの太剣をゆっくりと上げ、勢い良く振り落とした。

(いやああああ！)

「させない！」

ルフィアはもうダメだと思った瞬間、剣と剣がぶつかり合う音がした。

ルフィアが恐る恐る瞼を開けると、そこには一人の少女が居た。10歳くらいで、紅い髪が印象的な少女だ。昼間、ルフィアの隣を

横切った女性と同じような紅色だった。顔は後ろを向いているので見えない。

少女は男の剣を二本の剣で必死に受けとめている。男は不吉に笑い、剣を又振り上げ、下ろした。少女はそれなんとか受けとめながらルフィアに言った。

「速く逃げて！ 生き延びるの！ 貴方は此处で死んではいけないの！」

少女は男の攻撃を必死で受け流しながら言う。

（誰？ ……いいえ、知ってるはず ……思い出せない ……でも、とても大切な人 ……頭が ……痛い ……っ）

ルフィアは思わず頭を抱えてしゃがみ込みたくなった。しかし、身体が言う事を聞いてくれない。頭は、ずきずきと痛み続ける。

「何を迷ってるの！？ 速く、速く逃げなさい！ 遠く、平和な地へ！ お願い、お願いだから貴方だけでも生き延びて ……っ！ 貴方は此处で死なないで ……っ、ルシファ！」

誰かの名前を叫んでいる途中、少女は後ろを振り向返った。

（ルシファ ……？ ……私の ……名前 ……！ ……思い出しましたよ ……）
「ソシファ 姉様！」

ルフィアがソシファの名を叫んだ瞬間、ソシファは男 ……・ガイルに斬られた。ガイルは倒れたソシファを一蹴りし、ルフィ

アに剣を振り下ろした。

「いやああああ!」

「・・・・・・・・・・ファイア! ルファイア!」

「ラ、イム・・・・・・・・・・? つライム!」

恐る恐る目を開けると、心配そうにルファイアを見つめるライムの姿があった。此方を見て心配そうにしているライムの姿を見ると、ルファイアの瞳から自然に涙が溢れ出た。

「ルファイア! 一体どうしたんだよ!」

いきなり泣きだしたルファイアに、慌てながらも名前を呼んでみる。

「だい、じょぶです・・・・・・・・・・少し、怖い夢を見ただけですから・・・・・・・・・・っ」

ルファイアはそう言って、ぎゅっとライムの服を握り締める。服を握り締める手は、強く握り締めすぎて、真っ白になるくらいだった。

「少しじゃねーだろ!? こんなに震えて!」

「本当に大丈夫ですからっ! ・・・・・・・・・・少し・・・・・・・・・・少し昔を思い出しただけですからっ」

ルファイアはそう言って、また震え涙を流す。

「・・・・・・・・・・昔を?」

「・・・・・・・・・・ルファイア、思い出したか」

いつから居たかは分からないが、ドアの近くでレキが静かにルフ

イアを見つめていた。

レキの問い掛けに、ルフィアは泣きながら小さく頷いた。

「レキ！ 何か知ってんのか！？」

「……………ティア呼んで来い。今は市で買い物をしている」

ライムは何か言いたげな表情をしたが、すぐにルフィアの部屋を出た。

部屋に残ったレキは、静かに口を開いた。

「今まで黙ってて悪かったな……………ルシファ」

「……………今まで通り、ルフィアって呼んで下さい。それに、黙ってくれていてありがとうございました。理由は……………必要ないですよ、シーガ」

ルフィアの瞳には涙は消えていて、力強い光が籠もっていた。

「俺もレキって名の方が気に入ってた。それに、その名はあんまり好きじゃねえ」

「ふふつ、分かりましたよ、レキ」

今度は二人で笑った。

「全員揃ったな」

「レキ！ 早くあんた達の事を教えなさいっ！」

噛み付きそうな勢いでティアが聞いてくる。

「取り合えず落ち着け。ちゃんと話すから。その前に、俺の本当の名は、シーガ・トゥーゼス。ルフィアは、ルシファ・ゲルドンだ」
「それが……ルフィア達の本当の名前なの？　じゃ、これからルシファとシーガって呼ばなきゃね」

ティアが淋しそうに言うと、ルフィアは微笑みながら言った。

「いいえ。今まで通りの名前で呼んで下さい。その方が、私達は嬉しいですから」

「分かったわ」

「お前等の本当の名前は分かったけど、何で名前を先に教えたんだ？」

ライムがレキに不思議そうに尋ねる。レキは少し呆れた表情になり言った。

「……お前等、ルシファ姫って聞いた事ないか？　今でもまだ有名だぞ」

「あ、私聞いた事あるよ！　ある国のお話なんだけど、その国には姉妹がいて、妹の方のお姫様の名前がルシファって言うんだけど。……あっ！」

ティアが瞳を輝かせた。

「そうだ。その妹姫がルフィアだ」

「！……ルフィアは姫様だったのか……」

ライムの言葉に対し、ルフィアは静かに言った。

「私は確かに姫でしたが、もう姫ではありません」

「何で!？」

「今から言う話を聞けば分かるから、黙って聞け」

レキは簡潔にティアに言うと、静かに、物語を語る様に話し始めた。

今から約十二年前、ルーシャ国と言う国に一つの宝石が届けられた。それは美しい宝石だったので、国の宝と言う程の大切な姉妹二人の姫に分けて渡された。

しかし、宝石はあまりにも美しすぎた。宝石の美しさを欲した多くの者が国に攻め込んだ。しかし国は、十三人の守り神に守られた。

「……一体、どのくらいの人が攻め込んだの？」

ティアがレキの話を遮り尋ねた。

「俺が知る限り、五千くらいじゃないか？」

レキは平然とした顔でさざりと言った。それを聞いたライムとティアが驚いて固まっている。レキはそれを一目見、再び話し始めた。

しかし国は、ガイルと言う名のたった一人の男に滅ぼされた。二

人の姫の姿はそれ以来、誰も見てはいない。十三人の守り神も姿を暗ました。宝石も盗まれたか、誰も知りはない。

「ねえレキ、そのガイルってまさか……………」

ティアは恐ろしげにレキに尋ねた。レキはそれに対し、静かに言い放った。

「……………そうだ。今のガイル軍のボス、ガイル・グレルだ」
「……………じゃあ、ガイルは五千人に勝った国をたった一人で倒したってのか……………!?」

ライムは不安げに聞いてきた。ルフィアは声を震わせ答えた。

「……………本当、なんです……………」

「……………嘘、だろ……………」

ライムはガイルとの力の差に我が耳を疑い、もう一度ルフィアに問い掛けたが、ルフィアは首を横に振った。

「……………じゃあ……………じゃあ宝石はどうなったの？」

ルフィアは此処に居るのに！」

「……………ガイルに、奪われてしまいました……………」
私は、殺されそうになった時、レキと、ソシファ姉様に助けてもらったんです……………」

ルフィアは今にも消え入りそうな小さな声で言った。

「ソシファさんってあの有名な『紅の華』？」

ティアは大分昔に聞いた事があった。幼いながらも炎の精霊王、イフリートを召喚出来る、炎属性魔法に優れた少女の話を。勿論、他の属性魔法も得意だが、炎属性魔法が一番得意らしい。

「ソシファ姉様をご存じでしたか。確かに、ソシファ姉様は『紅の華』と呼ばれていました」

「あれ？ オレが聞いたのは、『水の舞姫』だぜ？」

ライムが不思議そうに尋ねた。

ライムが昔聞いた事があるのは、『水の舞姫』の方だった。ルーシャ国の姫のどちらかがそう呼ばれていた。話によると、水属性魔法が得意で、踊っている時に水を使って、美しく舞っている姿から『水の舞姫』と名付けられたらしい。

「ん？ それはルフィアの事じゃねえか」

「レ、レキ！」

ルフィアが止める前にレキは全て言い終えてしまった。

「ルフィアすごいな！ 踊ってるとこ見てみてえな……………」

「ね、ルフィア。今踊れる？」

「え……………でも……………」

ルフィアは踊るか踊らぬか迷っていたが、踊る様に決めたらしい。レキが場所を変えるか訪ねたが、幸い、この部屋は広かったので場所を変える必要はなかった。

「少し、離れて下さいね」

ルフィアは、ライム達に離れるよう言い、ゆっくりとしたリズムで踊りだした。

最初はゆったりと回転をしたりしていて、回るとき、水属性魔法を巧く使い、ルフィアの周りを美しく輝かせた。窓から差し込む光が、より一層美しさを引き立てる。

「・・・・・・・・綺麗・・・・・・・・」

ティアは無意識のうちに喋っていた。だが、それほどルフィアの舞が美しかった。

ルフィアは、最後に祈りを捧げる様な態勢で終えた。最後にも小さな雫達が、ルフィアの周りを美しく飾った。

「すみません。久しぶりだったので、あまり上手く出来ませんでした・・・・・・・・」

ルフィアは恥ずかしそうに俯きながら言った。

辺りには、水が飛び散っているかと思っただが、そのような様子はなかった。

「また上手くなったな」

「ルフィア、すごく綺麗だったよ！　なんか感動した！　ね、ライムもそう思うよね？」

ティアはライムに意見の賛成を聞いたが、ライムは、はっとした様になってから、慌てて頷いた。

「ありがとうございます・・・・・・・・」

ルフィアは顔を真っ赤にしながらも、誉めてくれたレキ達にお礼を言った。

「……えゝつとさ、話をかなゝり変えるんだけどさ、ガイルにルフィアが殺されそうになった時、レキとお姉さんが助けてくれたのよね？」

ティアはかなり言いづらそうにルフィアに訪ねた。

「はい。レキとソシファ姉様が助けてくれました。それが何か？」

ルフィアは首を右にちょこんと傾けた。

「お姉さんは人間だから分るけど、どうやってレキがルフィアの事助けたのか気になってね……」

「ああ、そういえばまだレキの本当の姿を見ていませんでしたね。いきますよ、レキ。」

我が身を守る神よ、偽りの姿を捨て、我の前に真の姿を現し給え……火神、シーガ！」

ルフィアは納得した様に頷き、何かを唱えた。すると、レキの体に変化が起きた。

レキの体が空中に浮き上がり、赤白い光に包まれた。光はどんどん膨らみ、光が弾け飛んだと思ったら一人の男が現れた。

その男は背が高く、髪は透き通るオレンジ色で、肩に少し掛かるくらいに無造作に髪を伸ばしている。

『この姿になるのは何年振りだろうな？』

オレンジ頭の男は目を細め、嬉しそうに言った。

「約六年ぶりですよ、レキ」

『そんなに経っていたのか』

そう言つて男は手を開いたり握ったりした。

「……それがレキの本当の姿つてなの？」

ティアが恐る恐ると言つた感じで問い掛ける。男……レキは嬉しそうに頷いた。

『ああ。そういえば言い忘れていたな。俺はルフィアの守護神だ』

レキは誇らしげに言つた。その話がよく分つていないティアとライムの為に、ルフィアは説明を付け足した。

「レキはルーシャ国の守り神十一人の一人なんです。守護神は、レキの他に十人居ます。『火』『水』『風』『雷』の属性に二人づつ、『光』『闇』『無』の属性に一人づついます。守護神達がいつからかルーシャ国に来て、それ以来ずっと国を守ってくれていたからその名が付いたんでしょうね。それに、どんな事をしても死なず、もし急所を突かれて死んでしまつても、また必ず生き返ります。歳を取らない、不老不死だから守護者じゃなく、守護神になつたのでしよう。守護神は、未だに深い謎に包まれている部分もたくさんあります」

「レキは不老不死なの!？」

『ああ。二千六百八十九歳だ。実際はもつといっているがな。今の俺が知る限りその年齢だ。兎に角、詳しい事は後で教えてやる』

そう言つてレキは笑つた。

「実際じゃありえねえ話だな．．．．．けど、本物が目の前に居るしな．．．．．」

『信じがたいのは当然だ。ルフィアそろそろ戻してくれ』

レキはルフィアに一言言つと目を閉じた。

「分かりました。 真の姿から偽りの姿になれ。レキ！」

またレキは赤白い光に包まれ、光が弾け飛んだら、もとの兎の様な姿に戻った。

「あ、戻った」

「それはいいから、本題に戻るぞ」

レキが真剣な表情になり、ルフィアも真剣な表情になった。

「私達はガイルを倒しに行きます。．．．．．なので、ライムとティアとは此処でお別れです。これからの私達の旅には、これまで以上の危険が付きまとります。ですから．．．．．」

「ルフィア！」

「は、はい！？」

ルフィアは大声でティアに名前を呼ばれ、思わず返事をしてしまった。

「．．．．．ティア？」

「ねえルフィア。私達の旅の目的覚えてる？ ガイルを倒す事よ？それに私、ルフィアと離れたくないわ！ 大切な仲間であり、親友なんだからなんだから！」

ティアは真つすぐルフィアの方を見た。今度はライムが話し始めた。

「オレ達はティアの言う通り、村の皆の敵討ちのために旅に出たんぜ。相手はガイルだ。オレ達はそのくらいの覚悟はして来てるんだ。それに……オレもルフィアと離れたくないしな！」

ライムはルフィアに明るく笑いかけた。

「……ティア、ライム……。でも、死ぬかもしれないんですよ!? 私は……。ライム達が死ぬのは嫌なんです！」

そう言つてルフィアは声を震わせた。

「もう、誰かが死ぬのを見たくはないんです! お父様もお母様もソシファ姉様も、皆、皆私の前で死んだんです! それに村の皆も死んでしまいました……。っ。これ以上、誰も私の中から消えないでほしいんです……。っ」

ルフィアは、手で顔を覆った。手の中には、どんどんと耐え切れなくなった涙の雫が落ちていく。

「……。ルフィア、私達は死んだりしないよ! ルフィアの中から消えなんてしない」

「ティアの言う通りだ。オレ達はガイルをぶっ倒して、またオレ達は笑うんだ!」

ティアとライムがルフィアの傍に寄り、ルフィア言った。

「そうだよ、ルフィア。またみんなで笑い合うの！ ルフィアと、ライムと、レキと私で。皆が生きてガイルのところから生きて帰れば問題ないじゃない！・・・・・・そうだ！ みんながちゃんと帰れたら、村を作るう？ ガイルの性で傷付いた人達を集めて、村を作ろうよ。そしたら、私達の帰る場所が出来るし、また皆でそこで暮らせば良いんだよ！ 大変だと思うけど、きっと楽しいよ！」

「・・・・・・ティア・・・・・・」

ルフィアがゆっくりと顔を上げティアを見る。ティアはルフィアの頭をぼんぼんと優しく撫でた。

「・・・・・・ははっ、ほんとに面白い奴等だな。・・・・・・ルフィア、悪いが俺もこいつ等と同じ意見になっちまったみてーだ」

レキはそう言うところルフィアの右肩に飛び乗った。

「レキ・・・・・・そうですね・・・・・・皆で帰れば問題なんかありませんよね！ またみんなで笑い合えば平気ですよね！」

「そうだぜ！」

「そうそう！」

ライムとティアは笑いながら返事をした。

「じゃあ、改めてお願いしますね」

「此方こそね」

四人は顔を見合わせ、笑い合った。

「あ！ すっかり忘れてたけど、此処にザックが居るんだよね！
次ぎ行く前に会いに行かない？」

ティアが嬉しそうに聞いてきた。

ザックとはルフィア達の幼馴染だ。ザックが十一歳になると、この大都市カルディアに働きに出ていたのだ。ザックはとても賢く、明るい性格の持ち主だった。ザックの両親は、魔術研究所と言うところで働いていて、ザックもそこで働く事になって、ザックはとても喜んでいて。ザックがカルディアに働きに出て以来、ルフィア達は一度も会っていないかったので、すぐに四人は行く事に決めた。

「ザック、大きくなってるよね！ 楽しみっ！」

ティアが嬉しそうに微笑む。

「ホントだぜ！ きつと驚くよな、ザックの奴」

「そうですよね。私達だと分かってくれるでしょうか？」

ルフィアは少し心配しながらも嬉しそうに笑っている。

「きつと分からないわよ。ルフィアと私がこんな美人さんになっ
っちゃってね」

「ルフィアならともかく、ティアはありえねえな」

その後、レキの周りは血の生みと化した事は言うまでもないだろう……。

再会と新たな仲間

「・・・・・・・・・・でかつ」

思わずライムが呟いた。

「・・・・・・・・・・ほんとに此处が魔術研究所なのか・・・・・・・・・・？」

レキもまた、ライムと同じ様に呟いた。

今レキ達がいるのは魔術研究所。ザックが働いている場所だ。カルディアに住んでいる人達に場所は聞いて此处まで来た。・・・・・・・・・・それまではよかったのだが、今ルフィア達の目の前にある建物は、お城と間違えそうなほど大きな建物だった。

「・・・・・・・・・・ひとまず、中に入りましょうか。此处でじっとしていても、怪しい人物にしか見られないでしょうから」
「入ってみれば分かるって事よね」

ルフィア達は大きな門を開け、中へ入った。中は、綺麗な外側とは違い、薄暗く、不気味なところだった。

「なんか嫌な場所だぜ。ほんとに此处に居んのか？」

ライムがぶつぶつと独り言を言っていると、一人の髪の長い白衣を着た女性が現れた。ノンフレームの眼鏡をかけていて、肌は病人

と間違えそうなほど白い。

「・・・・・・・・・・此処に何か御用でも？」

女性は目を細めルフィア達に尋ねた。

「私達は友人に会いに来たんです。ザック・ミッシェルと言う人物は此処に居るでしょうか？」

女性は眉間に皺を寄せた。まるで、ザックの名を嫌っているような感じだった。

「・・・・・・・・・・確かに居ます。ただ、今は休暇をとっています。どうしても、と言うならそちらに向かって下さい。今、地図を持ってきましたしょう・・・・・・・・・・」

そう言っただけで女性は奥へと行ってしまった。

「・・・・・・・・・・何か変でしたね、先ほどの女性」

ルフィアは女性が去った後に言った。

「・・・・・・・・・・ルフィアもそう思う？　なんか、ザックの事嫌ってるみたいなの・・・・・・・・」

「ま、そういう事はザックに聞く事にしよう。そうだお前等、俺が喋れること言うんじゃないぞ」

そう言っただけでレキがルフィア達の顔をそれぞれ見る。

「なんでだ？」

「……………なんか此処は嫌な感じがするんだ。それにモンスターの気配もして、どうも好かねえんだよ」
「よく分かんねえけど分かった」

ライムが返事をし終わったら、女性がまた現れた。

「……………此処に行けば着きます。それでは私は此処で……………」

そう言っ て女性はまた奥へと姿を消した。

「それじゃ、行ってみようか」
「そうですね」

ルフィア達は此処からあまり遠くないザックの家へ向かった。

「此処が……………ザックの家、か……………」

ルフィア達の目の前に広がる景色は、さっきの魔術研究所まではいらないが、それでも広さはその半分はあるのかという感じだった。

「……………は、はは。取り敢えず、ノックしてみるか……………」

ライムが扉の前に行き、コンコン、とノックした。するとドア越しから、

「えー、只今、この屋敷には誰も居ません」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

男ののん気そうな声がした。ライムはもう一度ノックをした。

「えー、ですから、今この屋敷は無人です」

確実に中から男の音がするが、居ないと主張している。

「えー、今そこに居る男の方、今すぐ出てこないと、扉をぶち壊して殴りかからせていただきます」

ティアが黒い笑みを浮かべて、扉の後ろに立っているはずの男に言った。するとガチャリと音がして扉が開いた。

「・・・・・・・・誰だよ一体。俺に何の用だ？」

扉から出てきたのは・・・・・・・・白衣を着たひよろ長い男だった。髪は茶色で長く、腰辺りまであり、先の方だけ蒼い紐で結ばれていた。肌は雪の様に真っ白で、右目には海賊がしていそうな真っ黒の眼帯をしていた。

「・・・・・・・・えーと、貴方がザック・ミッシェルさんでしょうか？」

「そうだけど・・・・・・・・。お前等、研究所の人間じゃないな・・・・・・・・誰だ？」

ザックは怪訝そうにルフィア達を眺めた。どうやら、ルフィア達だと気付いていないらしい。

「ひでえな、ザック。オレ達の事忘れたのかよ？」

そう言つてライムが笑った。

「………もしかして………ライム？」
「当たり前だろ」

ザックはティアの方を、向き指差した。

「ティア？」

「正解！」

「それじゃあ………」

ザックはルフィアを指差した。

「ルフィアですよ」

「………俺も居るんだからな」

レキがルフィアの方に飛び乗り、ザックに言った。

「………！みんな、久しぶりだぜイっ！」

ザックは思いっきり声を上げると、ルフィア達を抱きしめた。

「ぐぐるじいッ」

レキは抱きしめられる際、ルフィアの肩から落ち、腕に挟まれ苦

しそくに呻いた。

「あ、レキ。悪い悪い。皆、よく来たな！ 歓迎するゼイ！」

ザックはそう言つとまた強くルフィア達を抱き締めた。するとまたレキは挟まった。

「うぐぐ、中のもん全部出す！ 全部出す！」

「あ、レキ、ごめんな。にしても、ホントに久しぶりだゼイ。此処で話すのもなんだから、中にはいると良いゼイ。遠慮なんかなくて良いからなア」

そう言つと、ザックは中へ入つていった。ルフィア達は置いていかれないよう急いで後に続いた。

屋敷の様な家の中は薄暗く、何かの資料や本などが山の様に積み立てられていた。お世辞にも綺麗とは言えない程だった。

「散らかつてて悪いなア」

そう言つてザックは苦笑いをし、あまり荷物が置かれていないソファアのところを軽く整理し、ルフィア達に座る様促した。ザックはその前に椅子を置き自分はそこへ腰掛けた。

「本当に懐かしいゼイ。村のみんな、元気にしてるかア？」

ザックは嬉しそくに聞いてきた。

ルフィア達はあの村の惨状を思い出し、ザック何も話せずにいた。そんなルフィア達の代わりにレキが喋り始めた。

「ザック、よく聞け。リース村は………もう無い」

「・・・・・・・・！？　なんでだよ！　レキ、冗談だろ？　質悪いぜイ」

ザックは不安げに瞳を揺らし、震える声でレキに尋ねた。

「・・・・・・・・こんな冗談付けれるはずないだろ。事実だ」

レキはあくまで冷静にザックに言い放った。

「・・・・・・・・何で、何で村が無くなっちゃったんだよ！？」

ザックは手が白くなるまで握り締め、レキに怒鳴る様な声で尋ねた。

「・・・・・・・・ガイルが来たんだよ」

「・・・・・・・・ガイル・・・・・・・・！」

ザックはガイルと名に酷く怯えた様な反応をした。

「もう村は全て焼き払われてる。生き残ったのは・・・・・・・・きつと俺達だけだ」

「そんな・・・・・・・・！」

ザックは苦しそうに、右目に付けている眼帯に手を添えた。

「だから俺達は旅に出て、ガイルを倒すと決めたんだ。たまたま此処を通ったから、お前に会いに来たんだ」

レキは静かに一度瞬きをすると、ルフィアを見た。

「ザック、もう俺とルフィアの正体、知ってるな？」

「・・・・・・・・え？」

何故レキがこのタイミングで聞いたかは分らないが、ザックは静かに答えた。

「・・・・・・・・知ってた。ニコラスじいちゃんからな、教えてもらった」

ニコラスとは、ザックのお爺さんで、リース村の村長だった。雷属性の魔法が得意な人で、明るく陽気な性格で皆から好かれていた。傷ついたルフィア達はニコラスによくしてもらい、家まで貰った程だ。その彼も、リース村が消えてからは、生きているかも分からない人となってしまうていた。

「本当の名前はルシファ。レキはシーガ。誰にも滅ばされない国、ルーシャ国の姫。レキは守護神で、今の姿は仮の姿なんだろう？」

ザックの言っている事は全て事実で、ルフィアは驚いた。

「そうだ。やはりニコラスは話してたんだな」

「いいや。俺が気付いて、俺が話してくれるよう頼んだ」

ルフィア達はいつもと話し方が違うザックに少し違和感を感じながらも、話題を変えようと必死に話し始めた。

「もー、こんな暗い話しは止めよ！ ていうより止め！ ところでさ、おばさんとおじさんは？ せっかく来たんだから、挨拶くらいしないかね」

ティアはザックの両親がいない事に気が付き、ザックに尋ねた。

ザックは一度体をびくりと震わせると、感情を押し殺した様な声で言った。

「・・・・・・・・父さんと母さんは死んだ。俺が此処にきてすぐ・・・・・・・・死んじまった」

「嘘だろ!？」

ライムは驚きのあまり、ソファーから達あがりザックに尋ねた。

「嘘なんかじゃない。・・・・・・・・病気で死んだ」

「そんな・・・・・・・・おじさん達まで・・・・・・・・。もしかして、だから村に来れなかったの？」

ティアはザックが忙しくて村に来れなかったと予測したらしい。

「・・・・・・・・まあ、それもある」

まだ理由があるらしいが、ザックのあまりにも悲しそうな顔に、誰も聞く事は出来なかった。

「・・・・・・・・その右目、どうしたんですか？」

暫く沈黙が続いていたが、ルフィアがザックに尋ね、その沈黙を破った。

「・・・・・・・・怪我・・・・・・・・しただけだ」

ルフィアはそれ以上、何も聞けなかった。ザックが、その事を拒絶した様な反応で言い返したからだ。

「……………さあて、そろそろ行くか」

「……………もう行くのかア？　もう少しゆっくりしていけよ。
おいらは気にしないぜイ？」

レキが立ちあがり、背伸びをした。ザックは少し寂しそうな表情をした。口調はいつもの様に戻っていた。

「あんまりのんびりできないんだ。もし、ガイル達に、リース村の生き残りがいると知られたら、俺らを殺しに来るかも知れねえんだ。ゆっくりは出来ない。それに、ガイルを倒しに行く為に俺達は旅に出てきたんだ」

「……………ガイルを……………倒しに……………?」

ザックはまたガイルの名に怯えた様になった。

「……………俺も……………一緒に行く」

ザックは、いきなり立ち上り、呟く様に言っと、どこかへ行ってしまった。

「ちょっと、研究所によってくれるか？　一応長期休暇届け出さないといけないんだ」

「……………ザック、ほんとに行く気かよ？　……………死ぬかもしれない旅なんだぜ？　そんな簡単に決めて言いのかよ」
「もともと行くつもりだった。それが、早くなっただけだ」

そう言っただけでザックは着ていた白衣を脱ぎ、投げ捨てると、近くにあった新しそうな白衣を荷物の中から引っ張り出して着た。

「じゃ、行くぜイ？」

「・・・・・・・・はい」

たまに変わるザックの口調を不思議に追いながらも、ルフィア達は外に出て行ったザックを急いで追いかけた。

「俺だ、出て来いジジイ。話がある」

ザックは魔術研究所にどこかと入り、大声で言い始めた。すると一人の初老の男が出てきた。

「・・・・・・・・ザック・ミッシェル、用がない時は此处に来るな」

老人はザックを睨み付けながら言い放った。

「用があるから来たんだ、ジジイ。そんな事もわからなくなったのか？」

「・・・・・・・・用とは、そんな事を言う為か？馬鹿馬鹿しい。ないのならとつと帰れ。私は今お前が居て気分が悪いのだ」

老人はあからさまにザックの事を嫌っていた。ザックもまた、その老人を嫌っていた。

ザックはどんなに嫌いな人でも決して嫌いな素振りを見せなかった。むしろ、その人を好きになろうと一生懸命になるくらいだ。けど、今のザックは、表にそれを出して、全力で老人を拒絶していた。もしかしたら、きっかけがなければ、お互い永遠に会いたくない人

物なのかもしれない。

「暫く休暇を貰う。それがいつまでかは決めていない。別にいいだろう？　今まで一度も休まなかったのだから」

「……ふん、好きにすればいい」

老人は吐き捨てる様に言い、闇の中へ消えていった。

「ザック、今の方は……」

「……此処の最高責任者補佐だよ。それよか、やっとおいらも旅に出れるぜイ！　みんな、これからよろしくなア！」

「……なんか展開早いけどよろしくね！」

「頑張つて、ガイルを倒そうな！」

「おう！」

ザックは笑って返事を返した。

「……あ、そう言えばさあ、私達、ガイルの居場所知らないよ？」

ティアはその事を思い出し、焦った様にレキに聞いた。

「その件なんだが、俺と同じ守護神がガイルの居場所分かるから、そいつに聞こうと思ってたんだ」

レキの方は慌てる事無く答えた。もう決まっていたみたいだ。

「さっすがレキっち！　頼りになるわねえ」

「だからっちは余計だ！」

レキの言葉に皆が笑った。レキは不服そうにしてティアを睨み付

けた。するとレキは突然歩きだした。

「・・・・・・・・ザック、ちょっとこっち来い」

レキはルフィア達から少し離れた場所でザックに手招きをした。

「・・・・・・・・ん？ どうしたんだア、レキ」

ザックは笑いながらレキのところに来た。

「ザック、いつか・・・・・・・・話せよ？」

ザックは笑みを消し、レキをじっと見つめた。

「・・・・・・・・さすが、レキだな」

ザックは感情の籠っていない声でレキに言った。レキは苦笑いをし、ザックに言った。

「俺は、そこまで凄くない。皆が、そう勘違いしているだけだ。それと、俺とお前だけの時は、無理して作り笑いなんかなくていい」
「・・・・・・・・やっぱ、レキは凄いや・・・・・・・・」

「おい、いつまで話してんのー？」

ザックはルフィア達の方に向きながらレキに言った。

「レキ、今の話、秘密な？ ・・・・・・・・今行くぜイ！」

そう言って、勢いよく駆け出した。その後を、レキが悲しそうな表情でついて行った。

守りの国と風の番人

「その冷たさは、時に炎の如き熱となろう」

ザックはカマキリを大きくしたモンスター二匹のうち一匹を指差した。するとモンスター氷に包まれた。近くにいたもう一匹がそのモンスターに近づいていったが、その氷りに触れた途端、モンスターの鎌が張りついた様に離れなくなった。

「今だ！ 烈火！―れっか―」

ライムの炎を纏った矢が、モンスターの頭を貫いた。

「がああああ！」

頭を貫らぬかれたモンスターは、叫び声をあげ崩れ倒れた。

「止めです！ 風剣！―ふうけん―」

凍り付けになっていたモンスターに、ルフィアの素早い早さの剣に貫かれた。

「ああああああ！」

モンスターの周りの氷は砕け、砕けたと同時に青い血を噴きなが

らモンスターは倒れた。

「ひゃゝはっはっ！ おいら達の大大勝利イ！ ざまーみろ、モンスター共オ！ ぎやはっはっはゝ！」

「此処ら辺は何かモンスターが多いわね」

戦闘が終わった後、ティアはザックを無視し疲れた様に言った。

「本当だぜ。これじゃ倒しても倒してもキリがねえな。何でこんなにモンスターが多いんだ？」

ライムもまた、疲れた様に言った。

ライム達がこの様に言ったのは当たり前だ。ルーシャ国に近づけば近づくほどモンスターと出会う回数も増え、強さも高くなっていた。

「……………此処ら一体には、昔、死体がたくさんありました。その所為じゃないでしょうか？」

ルフィアは弱く微笑んだ。その笑みは、ひどく切なそうに見えた。

「……………そうなのか。それより、ルフィア、どうかしたのか？」

ライムはルフィアに視線を向け、心配そうに眉間に皺を寄せた。

「……………え？ 何故ですか？」

「ルーシャ国行こうとしてから何か変だぜ？」

ライムはルフィアの事を、じっと見つめた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ルーシャ国つつうのは、ルフィアが住んでいた国だ」

いつまでも黙っているルフィアの代わりなのか、レキが話した。

「・・・・・・・・・・！ でもそこはもう廃墟なんじゃ！」

ティアが声を荒げ聞いてきた。

「ああ、そうだ。だがあいつは、ルーシャ国の番人だから、一緒にこなかったんだ」

「・・・・・・・・・・そうか。ルフィア、無理すんなよ。嫌なら待ってても良いんだぜ？」

レキの話を聞いたライムは、心配そうにルフィアに言った。

「・・・・・・・・・・大丈夫、です。私もちゃんと行きます」

ルフィアははっきりとした口調で言い、ライム達を心配させまいとした。

「そっか・・・・・・・・・・。無理ならちゃんと言えよ！」

ニツと笑ったライムに、ルフィアは顔を少し赤らめ、小さく、はい、と言った。

「……………すごい匂いだぜイ……………気分が悪くなるくらいだなア」

それもその筈。今ルフィア達が居る場所は、そこらじゅう固まった血だらけで、たくさんの身体が腐り、骨が剥き出しになった死体が転がっていた。

「……………早く用事を済ませましょう」

ルフィアは簡潔に言うと、一歩前へ進み出た。

「そうだな……………。確か此処等辺で呼べばくるはずだったな」

レキもまた、一歩前へ進み出た。

「ええ、確かにこの辺りです」

「じゃ、久々にいくか。来い、ルーガ！」

レキが空に向かい、誰かかの名か分からないが呼ぶと、どこからともなくつむじ風が起こり、つむじ風達が重なり合った。するとつむじ風は消え、一人の男が現れた。

目には赤い鉢巻きらしきものをつけており、額に薄緑色の宝玉が埋まっていた。髪はライムより少し濃い緑で、肩に掛かる程度だった。

『・・・・・・・・姫とシーガか』

男は静かに口を開いた。声は少し低めで、落ち着く感じだった。

「ええ。よく分りましたね、ルーガ」

『姫とシーガの発する気を間違える訳が無い・・・・・・・・ところでその者達は』

ルーガと呼ばれた男はライム達の方を向いた。

「三人は、私の友達です。右から、ライム、ザック、ティアです」
「よろしくね」

「よろしくなア！ あ、アンタの事ルーガって呼んでいいかア？」

『別になんと呼んでも構わん』

「よろしくな、ルーガ」

全員がルーガに挨拶終えてから、レキが重たしげに口を開いた。

「・・・・・・・・さっそくで悪いが、ルーガ、ガイルの居場所を教えてください」

『少し待て・・・・・・・・今居る大陸、のジーク村だ』

ルーガは暫らく口を閉ざしていたが、静かに口を開け言った

「ありがとよ、ルーガ。・・・・・・・・ところでルーガ、一緒に来ないか？」

レキはルーガに近付きこっそりと話し掛けた。

『・・・・・・・・私は、此処を守る者だ。だから、無理だ。2000年も一緒にいたんだ。他の理由も分かるだろう？ シーガ』

ルーガはレキを宥めるように言った。その声には、少し淋しさも含まれているような感じだった。

「・・・・・・・・そうだよな。分ったよ。ルフィア、俺をもとの姿に戻してくれ」

「あ、はい！ 我が身を守る神よ、偽りの姿を捨て、我の前に真の姿を現し給え。火神、シーガ！」

ルフィアは慌てて返事をする、急いで詠唱を唱えると、レキは赤白い光に包まれ、もとの人の姿に戻った。

『ルフィア、お前達は先に宿屋に行っている。俺はこいつと話してから行く。心配しなくて良い。ちゃんと次の朝にくらいは戻っている』

「分かりました。それじゃあ・・・・・・・・また会いましょうね、ルーガ」

『ああ・・・・・・・・姫』

ルフィア達がレキ達に背を向け歩き出そうとした時、ルーガがルフィアに声をかけた。

「どうかしたんですか？ ルーガ」

『王と、女王に挨拶しなくて良いのか？』

「・・・・・・・・」

ルーガは、黙ってしまったルフィアに対し、城の方を指差した。

『それと姫。“祈りの奇跡”を』
「・・・・・・・・・・分かりました」

ルフィアは一度下唇をかみ締めると、ゆっくりと城の方に歩き出した。その後を、ライム達が黙って追いかけた。

城の中に入ると、まず目に引いたのが肖像画だった。

入ってすぐ正面にある肖像画には、凛々しい顔をした茶髪の男性と、優しそうな雰囲気を持つ蒼髪の女性。その腕には、蒼い瞳をした赤子が抱かれている。女性と男性の間に嬉しそうに立っているのは、紅い髪をした少女だ。皆、嬉しその微笑んでいる。

ライム達はすぐ、この肖像画が誰を描いているのか分かった。男性はルフィアの父親。女性は母親。少女はルフィアの姉のソシファ。そして、蒼い瞳をした赤子がルフィアだ。

城の中は、あちらこちらが崩れて通れなくなっているところも少なくなく、死体もたくさんあった。どの死体も、白骨化、または腐っており、どんな顔だったのかも認知できない状態だった。

「・・・・・・・・ライム達は、先に宿の方に戻っても構いませんよ？
お世辞でも、此处はあまり良い所ではありませんし」

ルフィアは石で出来ている階段を登りながら、後ろに居るライム達に振り返らず言った。

「・・・・・・・・俺達はルフィアを一人に出来ねえただだよ」
「・・・・・・・・」

ライムの言葉に、ルフィアは何も言葉を返せなかった。

暫く歩くと、謁見の間らしき広い場所に出てきた。

奥には立派な椅子が二つ並んでおり、その二つともに立派な服を着込んだ骸骨が座っていた。

「…………お久しぶりです、お父様、お母様。ルシファです」

ルフィアは骸骨に向かって跪いた。ライム達もルフィアと同じ様跪く。

「この方達は私の友人でございます。ライム、ティア、ザックと申す者共です」

だんだんと、ルフィアの声が震えてきた。ライムは、きっと必死に涙を堪えているんだと思った。

「…………ごめんなさい、この国を守れず、私だけ生き残ってしまいました。ソシファ姉様も、生きているかは分かりませんが…………きっとガイルに……………」

ルフィアはぎゅっと拳を強く握り立ち上がった。ライム達も一緒に立ち上がる。

「今日は、剣を受け取りに来ました。私に受け取る資格があるのかは分かりませんが……………」

ルフィアは骸骨になった両親に話しかけながら、右の王座の後ろに回った。

王座の後ろの下には、一つだけはみ出た石があった。ルフィアはそれをゆつくりと押す。すると、謁見の間の中心の石が一つだけ、何もしてはいないのに勝手に取れた。

「…………穴が開いちゃったわね……………」

「そういう仕掛けになっているのです。この国に伝わる聖剣を守る

ために」

ルフィアはティアに説明しながら、謁見の間の中心に向かった。

「聖剣つてのはア、さつきルーガが言ってた“祈りの奇跡”ってやつかア？」

「はい。それが剣の名なんです。代々この国の王となる者に受け継がれていく剣なんです。本来なら、この剣はソシファ姉様が受け取るべきものだっただんですが……」

ルフィアは中心に出来た穴に手を入れた。手探りで剣を探し、何かに触れたのでそれを引き上げる。

「………すげえ………」

ルフィアの手に握られ暗闇から出てきた剣は、柄の部分が深い蒼色していた。中心に赤い宝玉が埋められている。鞘は塚より薄い蒼色だ。そこには青い宝玉が埋められている。

ルフィアは鞘を抜き取った。そこから現れた刀身はなんと、透明なガラスのようになっていた。

「凄く、綺麗な剣ね」

「………はい」

「………ん？ なあなあルフィア。なんか彫られてるゼイ？」

ザックが剣の柄に近いところを指した。透明なので分かりづらいが、確かにそこには何か彫られている。

「………“剣信じ祈り戦え。さすれば、奇跡起こらん”………」

「……………？　どういう意味だ？」

「これは……………この剣の名前の由来だと思います。この剣は、神からの贈りもとしてこの国に授けられた物だと、聞いています。この剣に祈りながら戦った時、その祈りが心のそこからのものだったら、神が現れ、剣を所持している者に奇跡を起こしてくれると言い伝えられています」

ルフィアはそっと、刀身に彫られた文字を指で撫でた。

「へえ。じゃあ、どんな絶望的な状況でも、祈ればどうにかなるって事か」

ライムが、本当に凄えな、と呟く。けれども、ルフィアは悲しそうにライム達に首を振った。

「この剣は聖なる剣。使う者は聖なる心を持っていなければ、剣の真の能力は発揮できません。確かに、絶望的な状況だとしても、この剣に祈ればどうにかなるかもしれません。しかし、この剣に悪しき心を持つ者が祈れば、その者はさらに絶望的状态に陥ってしまうでしょう」

「……………聖剣は使う人によって魔剣変わる。って事かア」

ザックが呟いた。

ルフィアは静かに頷く。

「……………じゃあ、その剣は使わない方がいいの？」

「いいえ。ただ、祈らなければ良い話です。祈らなければ、この剣は聖剣でも、魔剣でもありますから」

祈りの奇跡を、鞘に収めた。

ルフィアは剣を持ったまま、骸骨になってしまった両親のもとへ行き、剣を示しながら、跪いた。

「暫くの間、祈りの奇跡をお借りします。ガイルとの決着がつきましたら、必ず、この剣を再びこの場に封印します」

ルフィアは立ち上がると、ライム達の方に向き直った。

「ごめんなさい。もう終わりましたので、宿に行きましょう?」

ルフィアの無理をしている笑顔に、ライム達は何も言葉をかけられなかった。

城を出た後、ルフィア達は真つ先に宿屋に戻った。来た時よりも魔物に会う機会も少なく、大分楽に進んでいた。

「・・・・・・レキ、ルーガに会えて本当に嬉しかったんですね」

ルフィアが、宿屋に向かっていている途中にぼつりと呟いた。

「なんか知らないけど、喜んでたわね」

「やっぱり仲間に会えて嬉しいのかねエ?」

「きつと、そうだと思います。もう10年近く会えなかったんですから。それに今の私とレキが知るかぎり、守護神の居場所はずルーガ

でも分かりません。……ルーガは守護神の居場所は探せないのです」

ルフィアは悲しそうに微笑んだ。

ライム達は何も言えず、ただ黙る事しか出来なかった。

暫くみんなが黙りながら歩いていると、村が見えてきた。

「……なあ、久々に競争しようぜ」

ライムが村の方を見ながら楽しそうに言った。

「昔、よくやってたじゃんか。せつかく四人揃ってるんだしさ、久々にやるうぜ？」

「……おいらに勝ち目無くないかア？ ずっと部屋に籠ってて、やっと最近運動し始めたんだぜイ？ いつも戦闘後は息切れ多いしイ」

ザックは不服そうに言い、ライムを見た。瞳が完全に輝いていて、ザックは諦めるとにした。

「それでは、宿屋までという事で」

「いっくよー！ よーい、ドンッ！」

ティアの掛け声と共に、ルフィア達は一斉に走りだした。

「・・・・・・・・・・なんで勝ったオレが・・・・・・・・・・」

結局、競争の結果は、一位ライム。二位ルフィア。ティアとザックが同着で三位だった。四人は宿屋に着くなり、レキをそっきのけでさっさと寝てしまった。

朝になったらいつの間にかレキが居て、ルフィアを起こして来いと言ったので、ライムは昨日負けたティアとザックに頼もうとしたが、二人とも見事に筋肉痛になっていたので、やはり起こしに行くのはライムになってしまったのだ。

「ルフィア、入るぜ？」

ライムは部屋のドアをノックしてから入り、ベッドのそばまで行くと、ルフィア揺すって起こそうとした。が、

「・・・・・・・・・・んんうー？」

手を何故か蹴り飛ばされた。

「・・・・・・・・ルフィア？」

今度はもう少し強く揺すってみた。

「んー、枕・・・・・・・・・・」

「！」

ルフィアはライムに抱きつくとき、そのまま眠り続けてしまった。その時、ライムの悲鳴が聞こえたとか何とか・・・・・・・・・・。

少女の涙と流れ鳥の民

川のせせらぎ、鳥のさえずる声も聞こえるくらいの静かな村だ。たまに、子供達の楽しそうな声が聞こえてくる。

「静かな村ですね。とても落ち着けます」

「本当だぜ。こんな平和な場所なんか滅多にねえのにな」

今はどこもかしこもモンスターだらけだ。町など、人々がたくさん集う場ならまだしも、こういった小規模な村などは、モンスターにとっては恰好の餌場にしかすぎなくなってしまう。それほどにまで、この様うな静かな村は滅多にないのだ。

ルフィア達の住んでいた村は、もう町と言って良い程の規模にまでなっていたので、モンスターは入っては来なかったのだ。

「本当にこんな村の近くにガイルは居んのかア？」

ザックが言う様に、本当に此処は穏やかな村だ。争い事とは無縁に見える。しかし、ルーガが示した場所は、確かにこの村の近くにある洞窟だった。

「俺には分からないが、ルーガが言ったんだ。デマではないだろ」
「そうだよね。……！　ねえ、あの子って！」

いきなりティアがレキの耳を引っ張りながら、驚いた様に指差し

た。

ティアが指差す先には、カルディアでルフィアの事を殺そうとした、暗殺者の八神煉が居た。初めて会った時は、痛い程の殺気を放っていたが、今彼女は子供達と楽しそうに遊んでいた。顔には笑顔が浮かんでいる。

「れーんー！かくれんぼしよーよ！」

「煉姉。私達と縄跳びしよう！」

煉の周りを囲んでいる子供達は、煉の服の裾を掴んで自分達の方へ引っ張る。

「何言つてんだよー！煉はオレ達と遊ぶんだぞ！」

「違うよ！煉姉は私達と遊ぶの！」

オレ達、私達と言い争う子供達に、煉は苦笑いの表情を向けたまま言った。

「お前達、喧嘩はするな。交換ずつやれば良いだろう？」

「じゃあ、どっちが先にやんだよー？」

「そうだな、ジャックが先に言ったから、先にかくれんぼしよう。その後に縄跳びをすれば良い。それで良いか？」

「煉姉がそう言うならいいよー」

一人の少女がそう言うと、煉は安心した様に笑った。

「じゃあ、決まりだな。あたしが鬼をやるから、お前達は十秒以内に隠れるよ」

「はいー！」

子供達は元気よく返事をする、皆が思い思いの場所に駆けていった。

煉は数える場所を捜そうと、辺りを見回したとき、ルフィアと目が合った。

「貴様はッ！ 今日こそその命、頂戴する！ 楓陣——ふうじん——」

煉はルフィアの存在に気が付くと、音がするかと思うほどきつく睨み付け、技を放った。

枯葉らしき葉が、ルフィア目がけて大量に飛んできた。葉の一枚一枚は鋭く見えて、刃物の様に感じた。

（避けられない………ッ！）

「烈風——れっふう——」

ルフィアが強く目を瞑ると、物凄い強い風がルフィアの隣を駆けた。

「なっ、きゃあ！」

煉はライムの矢を寸で右にかわしたが、矢が横切った時の風圧で倒れてしまった。

「ルフィア、大丈夫かア？」

「え、ええ。大丈夫です。それより煉ちゃんは？」

ルフィアは起き上がり砂を払いながら尋ねた。

「向こうで気を失ってるわ」

「た、大変です！」

ティアが指差す方向には、仰向けで倒れている煉の姿があった。その姿を確認すると、ルフィアは慌てて煉に駆け寄っていった。

「おい、ルフィア！・・・・・・行っちゃた・・・・・・たたく、命狙われてんの分かってんのかよ？・・・・・・ルフィア！」

レキは一言呟くと、駆け足でルフィアのもとへ向かった。

その後、ルフィア達は煉を連れてこの村の宿屋に来了。煉と遊んでいた子供達はかくれんぼをしていた為、探すのに苦労しつつ、子供達を見つけると煉が倒れた事を伝え、大人しく帰ってもらった。借りた部屋のベッドに煉を降ろすと、ルフィアはティアに頼んで煉の体が大丈夫か調べでもらった。ティアは仕方ないような表情を顔に浮かべつつ、煉を診察してくれた。

「ティア、煉ちゃんは大丈夫ですか？」

心配そうに尋ねてくるルフィアに、ティアは笑顔を顔に浮かべ答えてくれた。

「全く、ルフィアはお人好しなんだから。だいじょぶよ。頭を少し強めに打ったみたいだけど、心配はいらないわ。もうすぐ目を覚ますと思うわ」

ティアの言葉に安心し、ルフィアはほっと胸を撫で下ろした。

「ルフィア、こいつが起きてまたルフィアの事また狙ってくる前に、此処から離れようぜ？」

ライムの提案に、他の皆も頷いた。しかしルフィアはとんでもないかの様に首を横に振った。

「そんな事駄目です！ 私の所為で怪我をさせてしまったんです。ライム、お願いですからこの子が起きるまでは居させて下さい」

ルフィアはライムの正面に行くと、頭を下げた。ライムは一瞬、固まっていたが、すぐに慌てた様子で言った。

「わ、分った！ 但しそいつが起きるまでだからな！」

「ありがとうございます、ライム！」

ルフィアは顔をあげ、ぱっと顔に笑顔を浮かべると、ライムの手を取り握り締めた。ライムは顔を真っ赤にしつつ、声にならない悲鳴を上げた。

「……っ！」

「………あっ！」

ルフィアは自分でした事に気が付き、慌てて手を離した。二人共、顔を茹でタコのように赤らめている。

「いつもこんな感じなのかア？」

ザックは呆れているのか、口をぽかんと開けたままティアに尋ね

た。ティアはすでにこの状況に慣れてしまっているのか、レキと他愛も無い話をしていた。

「そうよ」

「見てるこつちが恥ずかしくなるくらいのいちやつき具合なんだ」

レキもまた、慣れてしまっているのか呆れた様子も無く言った。ザックは二人を見習いつつ、ルフィアとライムをじっくりと観察する事に決めた。

「・・・・・・・・・・此処は・・・・・・・・」

もうすぐ日が沈むと言うところで煉が目を覚ました。眠りかけていたルフィアは煉が目を覚ました事に気が付き、安心して顔に笑顔を綻ばした。ルフィアの後ろには、ライム達が皆立っていた。レキはザックの右肩の上に乗ってる。

「目が覚めたんですね。・・・・・・・・良かったです」

「！ 貴様等はっ！・・・・・・・・っ！」

煉は慌てて起き上がった時、頭に鈍い痛みが走った。頭に手を添えてみた時に、初めて煉は自分の頭に包帯が巻かれている事に気が付いた。

「・・・・・・・・やはり、痛みますか？」

ルフィアは包帯の巻かれた煉の頭を見て、少し頭を頂垂れさせた。

「これは．．．．．アンタがしたのか？」

ルフィアが済まなそうに頂垂れていると、不思議そうに煉が尋ねた。

「はい．．．．．ごめんなさい、私の所為で怪我をさせてしまつて．．．．．」

ルフィアは本当に申し訳ない気持ちで一杯だった。自分の所為で誰かに怪我をさせる事は、城が滅んだ時から二度としないと心に決めていた。なのに、また怪我をさせてしまったのだ。

「．．．．．はっ！ 馬鹿かアンタ達は！？ あたしはアンタを殺そうとしたんだぞ？ なのに．．．．．なのに何故助けた！ そんな義理なんかアンタ達にはないのに！ 寧ろそのままにしとけば良かったものを！」

叫ぶ様な声で言つてきた煉に対し、ルフィアは微笑みながら煉に言つた。

「簡単な事ですよ。貴方が私を殺したいと思つていなかったからです。だから、私は貴方を助けたんです」

「馬鹿か貴様は！ あたしは貴様を殺したいと思つてるから殺そうとしたんだ！ なのにあたしが貴様を殺したくないと思つてるだど？ ふざけるなッ！」

煉は怒りに握り拳を震わした。

ライムが何が言おうとしたが、ルフィアが静かにそれを制しながら煉に言つた。

「ふざけてなどいません。私は、貴方が私の命を狙う理由があると思うんです。だいち、貴方は優しい子だと思っんです。そんな貴方が、好き好んで殺生などする筈無いと、私は思いますよ?」

「・・・・・・・・・・!・・・・・・・・・・あたしはっ、優しい子なんかじゃない!」

「おいらは、優しくない奴がガキから好かれるはずないと思っんだけどなア」

ザックが煉に不思議そうに尋ねた。煉は一瞬、瞳を大きく見開いたが、すぐに下を向いた。

「・・・・・・・・・・あたしは、子供から好かれてなどいない」

「私達、見たのよね。貴方が楽しそうに小さな子と遊んでるところ」

ティアもザックと同じように尋ねた。

煉は言葉が思い浮かばず、言い返さなくなった。

「・・・・・・・・・・悪いけど、一人にしてくれないか?・・・・・・・・・・考えたいんだ。あちらにつくか、アンタ達につくかを。安心しなよ。別に逃げ様なんて、思ってないさ」

煉は頭に手を添えると、苦笑いの表情を浮かべた。その笑顔は何故か、ルフィアを悲しくさせる様な悲しく寂しい笑顔だった。

「一体、なんの話だよ?」

「ライム、今は一人にしてあげましょう。・・・・・・・・・・煉ちゃん、明日の朝、また来ます。その時、その答えを聞かせて下さいね」

ルフィアはそう言うと、煉の返事も聞かずに部屋から立ち去った。

（やはり、何か理由があったのですね。．．．．．煉ちゃん、大丈夫でしょうか．．．．．？）

ルフィアが部屋から出る頃にはもう、億千の星と、猫が引つ掻いたような満月の光が静かに光り輝いていた。

朝になり、ルフィア達は早速煉の部屋に訪ねた。その後、ルフィアは煉の事が気になってなかなか寝付け無かった。その所為で少々寝不足になって、朝からレキに怒られてしまった。

「煉ちゃん、起きてますか？」

「鍵は開いてる。入ってきてくれ」

ルフィアはごく控えめにドアをノックした。すると奥から弱々しい煉の声が聞こえた。

失礼しますね、とルフィアは言い、部屋に足を踏み入れた。煉はベッドに上半身だけ起こし、ただ窓の外を見ていた。

「早速なのですか、昨日の言葉の意味を教えてくださいませんか？ どちらに付くかと言う意味を．．．．．」

「．．．．．あたしが、アンタを殺そうとした理由から話した方が早いから、そっちから先に説明するよ。あたしがアンタを殺そうとした理由．．．．．それは、アンタを殺せば、ガイルがみんなを解放してくれるって言ったからなんだ」

煉は窓の外を向いたままルフィアに言った。表情は見えないが、

ルフィアには微かに声が震えている気がした。

「ガイルが！？ それに解放って・・・・・・・・」

ティアはガイルの名前が出てきて、思わず叫んでしまった。ティア同様、ルフィア達も瞳を大きくして驚いていた。

「練ちゃん、もう少し詳しく教えて下さい」

「・・・・・・・・あたしは、『流鳥の民』って言う流浪の民なんだ。流れる鳥って書いて、るうと読む」

煉は窓の外を向いたまま言った。やはり、煉の表情は見えない。しかし声は震えている。もしかしたら、必死に涙を堪えているのかも知れないとルフィアは思った。

「『流鳥の民』？ レキ、何か知っていますか？」

ルフィアの問い掛けに、レキは腕組をして考えていた。暫らくして、レキは思い出したらしく、ぽん、と手を叩いた。

「思い出した。『流鳥の民』つつたら、情報屋の奴等だろ？」

そう言い、レキは煉を見た。レキの言った事は正しかったらしく、煉は小さく頷いた。

「でも『流鳥の民』は十年くらい前から姿を消しているぞ？ 消息は誰も知らないらしいし」

レキは不思議そうに煉に尋ねた。その途端、煉は怒りに耐えるかのように強く拳を握り震わせていた。

「…………それは、嘘だよ。『流鳥の民』は、ガイルに攻め込まれたんだ。その所為で、みんな…………みんな捕まった」
「全員!？」

ザックは目を大きく見開いた。煉は力なく頷く。

「その話が本当なら、大変だぞ。『流鳥の民』は皆強者だ。それを、全員捕まえるなんて、いくらガイルでもそうとう苦労する筈だ。あいつ等は強くて素早いから捕まえるなんて不可能に等しいんだ」

レキは悔しそうに眉間に皺を寄せた。

「みんな、ガイルに抵抗できなかったんだよ。…………あたしの所為で、みんなはっ、捕まったんだ!」

煉は左手で顔の半分を覆い、苦痛の表情を浮かべた。

「……………どういう意味ですか？」
「…………ガイルは、あたしが六歳になった次の月に、『流鳥の民』の皆の前に現われたんだ。奴は、あたしを見つけると、あたしを捕まえ、みんなの前に突き出した。あの頃は、今よりも修業不足で、皆の中では最も弱い存在だったんだ。…………ガイルは、知ってたんだ。あたしが一番弱い事を。しかもあたしは、長の孫だった。…………だから、奴はあたしをつかって皆を脅して…………!」

今にも泣きだしそうな煉に、ルフィアはそっと近付き、優しく煉の手を取った。

「もう、良いですよ。理由は分かりました。ガイルは、私を殺せれば『流鳥の民』の皆さんを解放してくれるともでも言ったんですね？」

煉は、黙ったまま小さく頷いた。煉は下を向いてしまっているの
で、その表情は見えない。

「だから煉ちゃんルフィアを殺す様に命じたのね！ 最低っ！ な
んて奴なの！？」

「みんな、煉ちゃんの事、許して下さいね？」
「当たり前でしょ！」

ティアは下を向いている煉に、力強く言った。

「ありがとうございます。．．．．．ところで、煉ちゃん。どちらに付くかというのは、ガイル側のまま、私を殺して『流鳥の民』の皆さんを助けるか、私達に付いて、ガイルを倒し、皆さんを助けますか。こういう事ですね？」

「．．．．．そうだよ。それであたしは．．．．．理不尽かも知れないけど、アンタ達と一緒に居たいんだ！ 流鳥の皆は、誰かを犠牲にしてまで助かりたいと思わないと思うんだ。．．．．．迷惑じゃなかったら、あたしも．．．．．ルフィアの仲間に入れてくれないかっ？」

煉は顔を上げ、ルフィアを見つめてきた。その瞳は、とてもルフィアよりも年下の少女が出来るはずがない、深い悲しみと怒り、それと、ほんの少しの希望が籠もっていた。

「そんな事、当たり前です！ それに、拒む理由なんてありませんよ。私は大賛成です！ 皆も、良いですよ。」

ルフィアはライム達に振り返り、嬉しそうな笑みを顔に浮かべながら尋ねた。

ライム達は当たり前かという様に深く頷いた。

「流鳥の文化は独特だ。良かったら教えてくれよ、煉」
「・・・・・・ああ、勿論さ・・・・・・！」

煉はありがとうと、小さく何度も言いながら泣きだしてしまった。

「今は、一人にして差し上げましょう」

ルフィアはそう言いつと、皆と一緒に静かに煉の部屋を出た。

翌朝、ルフィア達は煉の部屋にきて様々な話をしていた。

「あつ！ まだちゃんとした自己紹介がまだだったわね。私はティア・ルーベツトよ。ティアっ呼んで良いわよ」

ティアは右手に拳を作って軽く自分の胸を叩いた。

「おいらはザック・ミッシェルってんだア！ よろしくなア」
「オレはライム・グラッセだ。悪かったな、怪我させちまって」
「別に良いさ。それよりアンタの弓の腕、なかなかのもんだね」

煉の言葉に、ライムは照れた様に、ニカツつと笑った。

「俺はレキだ。ルフィアの守——」
「ルフィアのペットよ」

ティアはレキの言葉を遮り、さらりと笑顔で言った。

「なっ、だ、断じて違うぞ!? 俺はルフィアの守護神だからな!」
「守護神……?」
「そうだ! ルフィア!」

レキは叫ぶ様にルフィアの名を呼ぶと、煉の方をじつと見つめた。

「我が身を守る神よ、偽りの姿を捨て、我の前に真の姿を現し給え。火神、シーガ!」

人の姿になったレキは、誇らしげに煉にたいし笑った。

『どうだ、煉。かつこいいだろう?』

「……………前のフサフサの方が……………」

「……………!」

「……………ぷぷぷっ! レキっち、めちやくちゃ、かつこ悪いわよ! あははははっ! ひーっ、お腹痛ーい!」

煉の一言でレキは固まってしまい、ルフィア、ライム、ザツクの三人は必死に笑い堪えている。ティアは隠す事無く大笑いしており、レキを呼んではいけない呼び方で呼んだのに、レキはあまりのショックらしく、怒鳴る事すら忘れて固まっている。

「レキの事は放っておいて、自己紹介の続きをしましょう。改めて、

私はルフィア・ミツシエルです。あ、本当の名前はルシファ・ゲルドンと言います。けど、ルフィアって呼んで下さいね」

ルフィアはいつまでも固まったままのレキを無視して自己紹介の続きを始めた。

「あたしは、八神煉だ。好きな風に呼んで構わないよ」

皆が一通り自己紹介をし終わると、一人の人を除いて、五人は楽しそうに他愛もない話をし始めた。

『フサフサの方が……』

「あ、そうそう。皆に言い忘れたんだけど、あたしも守護神を従えているんだ」

『本当か！？』

突然の煉の一言に、レキは驚いた様に顔を上げた。さっきまでのショックはもう忘れてしまったみたいだ。

「待ってて、今出すからさ」

煉は何処からか、緑色と青色と赤色と黄色の長方形の紙を取り出した。紙には何やら不思議な文様が描かれていた。きっとこれは煉が言っていた苺だろう。

「我が声に応えよ。風花鳥、水氷鳥、火炎鳥、電雷鳥……」

「

煉が苺に囁き掛けるような声で言うと、その苺を煉は感覚を開けながら四か所に置いた。すると、その苺の上に、苺と同じ様な色の

煙が立ち上った。

『・・・・・・・・我が主人煉よ。我等に命が出来たか？』

緑色の煙のなかから出てきたのは、緑色の翼を持つ鳥だった。口調は物静かで、レキより少し低いくらいだ。

『久しぶりに出してもらえて嬉しいわ！　ありがとう、煉。それにしても本当に久しぶりだわ。最近風花鳥ばかりだったものね』

青色の煙の中から出てきたのは、青色の翼を持つ鳥だった。口調は明るく、歌う様で、声は高いので女性を思わせた。喋り方も女性のものだ。

『ぐーがー・・・・・・・・ぐーがー・・・・・・・・』

赤色の煙の中から出てきたのは、赤色の翼を持つ鳥だった。大きさは、一番大きい。何故か飛んでもいないのに空に浮かび廻りを欠きながら寝ている様だ。

『煩いから、そのまま永眠につくといいいんちゃう？　ワイ等は気にせんで？　むしろそのまま永眠しちまえ』

『・・・・・・・・ぐがつ！？　さ、殺氣が・・・・』

黄色い煙から出てきたのは、黄色の翼を持つ鳥だった。何故か眼鏡をかけている。口調は独特で、ルフィア達は聞いた事の無いものだった。

黄色い鳥は、赤色の鳥に近づき言葉を述べるとまたすぐにもとの位置に戻った。赤い鳥は一度起きたが、またすぐに大きな鼾を欠きながら眠ってしまった。

『……まあ、姫様！ お久しぶりね。こんな姿になってしまいましたけど、私の事分かりますか？』

きよろきよろと辺りを見回していた青色の鳥は、ルフィアの姿をみるなり、目を輝かせ声を張り上げた。

「その声、口調……まさか水生ですか！？」

「すいしゅう……？この青い鳥さんの名前なの？」

『そうよ。私の今の名前は水氷鳥だけど、本名は水鏡水生。でも今は水氷鳥と呼んでちょうだい。ちなみに、緑が風花鳥で、赤いのが火炎鳥、黄色いのが電雷鳥よ』

そう言つて、水氷鳥は目を閉じて少し飛び跳ねた。髯なので少しわかりづらいが笑っているようだった

「良かったね、水氷鳥……っ」

『煉……そろそろ我等を戻すと良い。体が持たぬ』

『そやな。ワイ等を同時に長い間出してくんは危険や。……いつまで寝てんのや。いい加減起きろや』
『ぐはア！？』

電雷鳥はまだ浮きながら寝ている火炎鳥の上にどかりと乗った。

「済まないね……」

『私達は大丈夫よ。久しぶりに外に出れて、しかも姫様に生きて会えるとは思ってなかったわ。ありがとうね、煉。さあ、倒れちやう前に早く戻しなさい』

「……戻れ、我を守護する者共よ。風花鳥、水氷鳥、火炎鳥、電雷鳥……」

煉がそれぞれの名を呼ぶと、風香鳥達は白い煙に包まれ姿を消した。

「・・・・・・・・っ」

「れ、煉ちゃん!？」

風香鳥達が消えた途端、煉が床に膝をついた。ルフィア達が慌てて傍に駆け寄る。

「・・・・・・・・大丈夫。少し、アイツ等を出しすぎただけだから。すぐ、治る」

「でも顔色が悪いわ。一応、横になって寝ると良いわよ」

「あ、あたしは大丈夫だから・・・・・・・・」

「いいわね？」

ティアは一言そう言うのと、につこりと煉に笑いかけた。その恐ろしいほどにこやかな笑みに、煉の顔が一気に引きつる。

「・・・・・・・・今はアンタの言う通りにしとくよ」

「それでよろしい」

ティアは満足気に頷くと、煉をベッドに無理矢理入れた。

『煉、あいつ等をあまり同時に出さない方が良い。まだ、お前の器にはあいつら四人分の魔力は大きすぎる』

「分かっているさ。風花鳥達にも、しつこく言われている」

そう言って煉は苦笑いをした。

「・・・・・・・・なあレキ。どっという意味だ？」

「そんな事も分かんないのかア？相変わらず馬鹿だなア。かつつか」

「うるせえ！」

ザックはライムを馬鹿にする様に笑った。その行動に、ライムが本気で弓を構える始末だ。

レキはため息を付くと、ライムでも分かる様に説明し始めた。

『俺達守護神と呼ばれる者は、一人だけでも相当な強さを持っている。だから魔力も、一般の魔法使いの魔力を十倍にしたくらいの量ある』

「かなり強いじゃない。そんな魔力、レキから全然感じないわよ？」

ティアはレキの身体を不思議そうに眺めた。

『……当たり前だ。俺は普段、魔力を制御してる。もし俺が魔力をなんも押さえずに流したら、お前等は立ってられなくなるのではないか？ まあ、ガキの頃から守護神達の魔力浴びてたルフィアは平気だろうが』

レキはルフィアの方を向き言った。

「初めてレキの魔力を浴びた時は大変でしたよ。半分も出されていなかったのに、立てませんでした。すごい重力で、体が押し潰されそうだったほです。幼かった所為もあるでしょうけど……」

「

ルフィアはその時の事を思い出し、つつい口がへの字にまがる。レキの魔力を浴びた後、暫く筋肉痛になり動けなかった時があった。あまりの重力に、右足首の骨を折ってしまった時もある。

『……まあ、それほど俺達守護神の魔力は強い。そんな、守護神を煉四人も従えている。ルフィアみたく、俺一人とは訳が違う。ルフィアが俺を元の姿に戻してる間、俺の魔力の五分の一がルフィアに流れ込まれてるんだ。俺が今の仮の姿でも十分の一の魔力がルフィアに流れる』

「ルフィアは昔からレキの魔力受けてるから、そんな大量の魔力を受けても平気で生活できるんだな？」

ライムがルフィアに尋ね、ルフィアはゆっくり頷いた。

『さっきみたいに等あいつ等が紙から出て来たのは、少しでも煉に負担が掛からない様にあの中に入っていたからだろう。普通に仮の姿の俺みたいな姿で居れば、一般の魔法使いの魔力の四人分の魔力を浴びるからな。あの紙にはなんか不思議な仕掛けがしてあるみたいだしな。紙からあいつ等を出した途端、四人分の五分の一の魔力が煉に流されたんだ。なんか知らないが、あいつ等は仮の姿でも、本来の姿に戻った時の魔力が煉に流れるみたいだ。ちなみに、一般の魔法使いの魔力の二十倍だ。しかも、一人出ただけで全員分の魔力が流れる仕組みになってやがる』

「その量は今の私でも立てないくらいすごい重力がのしかかります。かなり、辛い訓練をしたのでしょうかね」

ルフィアはいつのまにが眠ってしまった煉の方を向いた。

起きている時の鋭さは消え、初めて煉がルフィア達の前で無防備な顔をした様に、ルフィアには見えた。

『だから、俺はさっき煉にあいつ等を四人同時に出すのは止めた方が良かったのだ。もし長い間あいつ等を出しとくと、煉が魔力に押し殺される可能性があったからな』

「大変だよなア。おいらじゃ即効潰されてるぜイ」

「・・・本当よね。よく耐えてると思うわ」

「オレ達より年下なのに、大変なんだな」

ライム達は、悲しそうに顔を歪めた。

「・・・煉ちゃんも寝てしまった事ですし、各自、自由行動を取りませんか？」

重苦しい沈黙がルフィア達の間 to 暫くの間流れていたが、ルフィアの陽気な声がそれを破った。

「そうね。それじゃ、私は此処に来る途中、珍しいな薬草見つけたから、それでも摘みにいくわ。ルフィア、レキをふさふさ、の方に戻してくれる？」

「・・・！！」

「分かりました。真の姿から偽りの姿になれ。レキ！」

ティアはわざとふさふさと言うところを強調して言った。そのお陰か、レキは先程の煉の、ふさふさの方が・・・と言言葉の思い出し、また固まってしまった。そんなレキをほっとき、ルフィアはレキの姿を仮の姿にした。

「じゃ、護衛にレキっち連れてくからね」

「はい、気を付けて下さいね」

「だいじょぶだいじょぶ」

ティアは笑いながら言うと、今だ固まっているレキを半ば引きずる様に連れて行った。

「おいらはちょこつと散歩にも行つて来るぜイ」

ザックは呑気にそう言うと、さつさと部屋を出てってしまった。残されたルフィアとライムの間には、気まずそうな沈黙が流れる。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・あ、あのさ、取り敢えず、此处出ないか？」

「そ、そうですね」

ルフィアとライムは、風花鳥達を出したせいで疲れて寝てしまった煉に気を遣い、取り敢えず部屋から出た。

その後、特に行く所も無く、二人は村の広場らしきところに来た。

「・・・・・・・・・・ライム、少し話をしませんか？」

「あ、ああ」

ルフィアのいきなりの言葉に、ライムは少し驚いたがすぐに返事をした。

「私には、もう死んでしまったソシファと言う名の姉が居た事をご存じですよネ？」

「ああ。『紅の花』、だろ？」

ライムが自信ありげにそう言ったので、ルフィアはついつい笑みをこぼした。

「ええ、その通りです。・・・・・・・・・・まだレキには言ってないのですけど、実は、私の記憶が戻る前日、私の記憶にあるソシファ姉様を成長させた様な女性に会ったんです」

ルフィアは微笑み、すれ違った程度ですけどね、と苦笑いをした。
「その時、女性が言ったんです。“復讐は何も生まない。ただ新たな悲しみを生むだけ——”と」

「……復讐は何も生まない。ただ新たな悲しみを生むだけ、か」

「私達が今している事は、復讐です」

ルフィアはどこか遠くの方を見ていた。どことなく、悲しそうにも、切なそうにも見える憂いを帯びた表情だった。

「その事で、ライムはどう思います？」

「オレは……良く分かんねえけど、もしこのままガイルの事ほっとけば、オレ達みたいな奴が、さらにたくさん出てくると思うんだ」

「私達の様な人が……？」

「確かに、その女の人と言ってる事は正しいとは思うぜ？ けど、このままガイルを野放しにしとく方が、悲しむ人が増えるんじゃないか？ 確かに、ガイルが死んでみんながみんな喜ぶわけじゃないかもしれない。それでガイルの為に復讐をする奴が居るかもしれない」

「あ……」

ルフィアはライムに言われて初めて気が付いた。

もしかしたら、ガイルの事を大切に思っている人間は居るかもしれない。ガイルが死んだら、その人達は悲しみ、もしかしたらガイルを殺した人間に復讐を考えるかもしれない。

その人達が復讐を果たしてしまえば、今度は復讐された人を大切に思っている人がまた復讐を考えるかもしれない。

そうして悲しみと憎しみの連鎖が続くかもしれない。きっとあの女性はそれが言いたかったのだろう。

「……やはり、復讐など止めた方が良いでしょうか……」

「ルフィア、でもオレは思うんだ。確かにガイルを倒したとしても、ガイルの為にさらに復讐を考える奴も居るかもしれない。けど、このままガイルをほっといたら、さらに犠牲が出続ける。だったら、オレ達は犠牲を最小限に食い止めるしかないんじゃないかって」

「最小限に食い止める？」

「ああ。今のガイルに、『人を殺すな』って言っても無理だと思わないか？ もうガイルは、たくさんの人を殺した。そう簡単に俺達の言葉を聞き受けてくれるか分からない。けど、復讐を考えている奴に、『復讐を止める』っていえば、少しは分かってくれるんじゃないか？」

ルフィアは黙ってライムの話の聞き続けた。

「もしオレがの両親が、ガイルみたいに最低な事をたくさんしてたとする。でも、オレにとっては大切な存在だ。そんなオレの両親が殺されたら、そりゃ、殺した相手が憎くて憎くて、殺したいくらいになると思う。けど、オレの両親は、殺されてもしかたないくらいに、酷くて、人間としては最低な事をしている。たくさん命を奪っている。もしそのまま両親が生きて、同じ事を繰り返し続ければ、さらに誰かの命を奪う。それを繰り返し続けるんだったら、両親は死んだ方がましだったんじゃないかって思う。酷い話かも知んないけどな。……これはあくまでオレの考えだから、みんながみんなこんな考えをするとは思わないけどな」

ライムは苦笑いしながら言った。

「ま、なるようになる、って方がオレの考えに多いけどな」

ルフィアは、ライムほど深くは考えていなかった。何故、あの女性はあるな事を言ったのだろう？ としか考えず、深い意味を理解しようとはしなかった。

「…………ライム、ありがとうございました！ ライムに相談して良かったです」

ルフィアはライムの右手を取り、両手で包み込んでライムに優しく微笑みかけた。

ライムはルフィアの公道に吃驚して少し後ずさり、顔を赤くした。

「お、オレで良かったらいつでもルフィアの相談に乗るぜ？」

「はいっ！」

「…………あれー？ ルフィアとライムじゃない。どしたの？ こんなところで手を取り合って見つめ合ったりなんかしちゃってさ」

ライムがルフィアの笑顔に照れた様に笑っているところに、ティアの声が響いた。

ルフィアとライムが慌てて手を放し、声のする方へ振り返った。

するとそこにはにつこりと笑っているティアと、ぐったりと山の状態にある薬草らしき物を背負っているレキが居た。

「良い薬草は見つかりましたか？」

「ええ。なかなか良いのが見つかったわ。それもこれも、レキつちのおかげね」

「……………っち、はいらん。っち、は……………」

レキは力なくティアに抗議をすると、ばたりと倒れて薬草の山に潰れてしまった。

ライムが慌ててレキに近付き、薬草の山を持ち上げた。ルフィアは気にせずティアと話を続けていた。

「レキっ！ 大丈夫か？」

「ティ、ティアの奴。俺を犬の代わりにして薬草を探させやがった・
・・・・」

「・・・・・災難だったな」

「あ、ああ・・・・・」

ザックは煉の部屋を出た後、まっすぐにある洞窟の前にきた。

「・・・・・許さない。ガイル、貴様だけは、絶対に許さない・
・・・」

ザックはぎりつと奥歯を噛み締めると、洞窟に背を向け歩きだした。
・・・・・眼帯をした右目を押さえながら。

煉が正式な仲間になってから二日後、ついにルフィア達はついに、ガイルのもとへ行く事に決めた。

「・・・・・準備は良いか？」

レキの静かな問い掛けに、四人はゆっくり頷いた。

「……………約束です。必ず、みんなが無事で帰る事を」

「ああ！ 約束だ！」

「守ってみせるわ」

「必ず、果たそう」

それぞれ、誓いの言葉をのべていたが、ザックだけは右目を押さえたまま何も言わなかった。

普段なら、真っ先にザックが言葉を述べるのでルフィア達は何故か、少し不安な気持ちになっていた。

「……………ザック？」

「！ な、なんだ？」

「……………いいえ、なんでもありません」

「そうか……………」

ザックは素っ気なく言うと、一人で歩きだしてしまった。

「ま、待てよっ！」

その後を、慌ててルフィア達は追い掛けた

心捨てた蠍と紅き華の姫君

ルフィア達は今、真つ暗な洞窟の中に居た。心が凍えてしまいそうな空間に包まれている。

「そろそろライトの魔法を使いますか？」

「ああ、そうした方が良いな」

レキは自分の周りを見た後、ルフィアに向かって頼む、と言った。

「はい。 我が行く道を 明るく照らせ・・・・・・ ライト！」

ルフィアが何も無いところを指差すと、ルフィアの指先から突然光の玉が出現した。

光の玉はあまり大きいとは言えない大きさだったが、それでも十分明るく辺りを照らした。

「・・・・・・結構眩しいわね・・・・・・」

「当たり前だ。先ほどまで暗闇に目が慣れていたのでからな」

ティアは突然の眩しさに、目を細めた。皆が同じ様な仕草をしているのに対し、煉だけは平然と歩き続けていた。

「なんでお前はそんな平気なんだ？」

ライムが不思議そうに尋ねると、煉は得意げに微笑んだ。

「あたしはどんなに周りが変化しても慣れるよう訓練していたんだ。これくらい出来て当然さ」

「流石、『流鳥の民』だな。訓練も相当、辛かっただろう」

レキは関心したように、煉に笑いかける。

「まあ、確かに辛かったさ。けど、今となっては良い思い出さ」

「………煉、あんた一体何歳よ」

「………確か十八だ」

煉は暫く頭を捻って考えていたが、思い出した様にぼん、と手を叩いた。

「十八歳だったんですか!？」

「俺と同じ年!？」

「見えないわ!」

煉の年齢は絶対自分たちより低いと考えていたルフイア達は、かなり驚いた。まさか、年上だったとは、ライムと同じ十八歳だったとはと。

「………悪かったね、童顔でしかもちびで!」

確かに煉の身長は低かった。このメンバーの中で一番低く、ルフイアよりも5cmくらいは低いだろう。

それに煉は幼さが残る顔立ちで、とても十八とは思えなかった。せいぜい見えるとして、十四、五程度だ。

「ご、ごめんなさい! まさか、私より年下だとは………。しかも、私煉ちゃんって呼んでましたし……。言い直したほうがいいですね? ええつと……。煉、さん?」

ルフィアは今まで煉の事をちゃん付けで読んでいた。それも、年下だと思っていたからだった。

「……………別に、今まで通りで良いさ。もう慣れた……………」

煉はぽつりと呟く様に言うと、洞窟の中を進む足を速めた。

「ああっ！ 待って下さい！」

その後を、ルフィア達が慌てて追いかけた。唯一、普通に歩き続けていたのはレキとザックだけだった。

ザックは珍しく、一言も喋らず、ただ黙々と歩き続けていた。ルフィア達はその事に気がついてはいたが、あえて黙秘していた。

「……………ザック、此処まで来ても、まだ話さないつもりか？」
「……………」

レキの言葉に対しての、ザックの返事はない。

「……………ま、言わなくても言ってもそれはどっちでも良い。ただ、あいつ等を悲しませる事だけは止める。お前を信じているんだ。俺だって、お前の事を信じてる」
「……………」

レキはザックの方を見た。やはり、ザックからの返事はない。レキは黙って、ルフィア達の方へ向かった。

「……………レキ、俺は……………分らねえよ……………」

・
」

ザツクの小さな声が、ルフィア達の方に向かったレキに聞こえたかは分らない。

ルフィア達はあれから暫く歩き、洞窟を抜けた場所に出てきた。周りは壁のように岩が盛り上がっていて、その中心に小さな一軒の小屋があった。小屋の周りの地面には、剣で傷つけたような後が無数に残っている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・いよいよ、ですね・・・・・・・・」

ルフィアの声が、自然に震えてくる。

ガイルはルフィアの居た国を滅ぼし、更にはリーネ村の皆も、リーネ村も、焼き払った。それに、大切な姉を目の前で斬られた。幼かったルフィアには、その情景はとても耐えられるものではなかった。故に、あまりのショックに記憶を失った。

記憶を失っても、失わなくても、ガイルに対する恐怖心だけは変わりはしていなかった。いくら倒すと言っても、ガイルの強さをルフィアは身をもって知っている。無論、ライム達も同じだろう。煉だってそうだ。本当は、皆ガイルに恐れを抱いている。しかし、ルフィア達は今その恐怖心を抱いてる相手に戦いを挑むのだ。もしかしたら、勝てないかもしれない。

いくらレキ達のような守護神が仲間にいるからといって、ガイルは守護神をも上回る力の持ち主。本当に誰もどうなるかなんて想像も付かない。

「…………約束、です。みんな、必ずガイルを倒し無事生き残る事。そしたら、村を造りましょう?」

「村、を?」

ルフィアに聞き返してきたのは煉だった。

「ええ。私と、ライム、ティアとで前に約束したんです。ガイルの所為で傷ついた人々を集め、造ろうと。そうしたら、私達の帰る場所が出来るから、と」

「……………帰る、場所……………」

「はい。煉ちゃんも、『流鳥の民』の皆さんも、そこを新しい帰る場所にすれば良いんです」

ルフィアは、にこりと煉に微笑みかけた。

「……………そう、だな。そうしよう」

煉はゆつくりと頷き、微笑んだ。だが、何故か悲しみが裏に隠れているようにルフィアは思った。

「煉ちゃん……………」

「……………! 危ない、みんな下がれっ!」

ルフィアが煉に声をかけようとしたら、いきなりレキの声が響いた。

皆素直にレキの言う通り下がると、いきなり小屋が吹き飛んだ。

「!? だ、誰です!?!」

小屋はすぐに火の気が上がり、燃え上がり始める。その中に、ゆらりと人影が映った。

皆がその事に気がつき、それぞれの武器を構えると、燃え盛る炎の中の人影が、ルフィア達に近づき、その姿を見せた。

「・・・・・・・・ガイル・・・・・・・・！」

「ふん、話は終わったか？ 俺はあ、あんまり気が長い方じゃねえんだ。手間とかも嫌いだ。さっさと終わらせようぜ？ 餓鬼共」

炎の中から現れたのは、今からルフィアが倒すと決意した人物、ガイル・グレイルだった。

筋肉質の長身に、肩に付く程度の黒髪。傲慢さがのぞける、濃い紫の瞳。背中に背った大剣は、一振りでも何かをも圧倒してしまいそうな雰囲気をもっている。一体、どれくらいの血があのかの剣に吸い込まれたのだろう。考えただけでも、ルフィアは鳥肌が立ち、震えが止まらなくなってきた。

「おう・・・・・・・・？ 誰かと思えば、煉じゃねえか。そんなところでなにやってんだ？ 早くこっちに来いよ。おめえの相手は俺じゃねえだろう、煉？」

ガイルはきつと裏切られたと分っているだろうに、煉ににやりと笑いかけ、手招きをする。

煉は一瞬だが、びくりと身体を震わせた。しかし、本当に一瞬。すぐにガイルを睨み付けた。

「あたしの敵は、流鳥の皆が捕まってから今日まで、ずっと変わらず貴様だ、ガイル。それは、この先どんなことがあると変わりはしない」

「ふん、つまらねえな。守護神四体も従えてるおめえは何かしら役

に立つと思つたのによ。ちつとも役にたたねえしな」

「なんだと……！！」

ガイルは睨みつけている煉に向けて、明らかな態度を示した。

煉は思わずガイルに攻撃を仕掛けようと、背中に背負っている巨大な扇子に手をかけたか、ルフィアがガイルの方を見たままそれを制した。

「あまり、私達の仲間を侮辱しないでくれませんか？ ガイル」

「おお、誰かと思つたら……これはこれは、ご機嫌麗しゅう。よく此処まで生きていられたねえ？ ルシファ姫様？」

ガイルはわざとらしくルフィアを敬う風に話し、その場に跪いた。

「私の事を馬鹿にしているのですか？ 貴方は、私が生きている事を知っていたから、煉ちゃんを私の前に現せ、私を殺そうとした。違います？」

ルフィアはあくまで冷静にガイルと会話を進める。その会話には、誰一人として入り込もうとはしない。

「ええ、知っていましたとも。貴方様は、守護神の、火神シーガを従えていらつしやる。少々、邪魔な存在になりかけませんのね。……そういえば、貴方はルフィア、火神シーガは今レキと名乗っていたのでしたかな？」

ガイルは顔だけを上げると、ルフィアの肩に乗っている仮の姿のレキを一瞥し、ルフィアに視線を向けた。

「お前が俺の名を呼ぶな、胸糞悪い」

「それは随分な言い方だな」

「それだけの事を、貴様はした」

レキは吐き捨てるように言うと、ルフィアの肩から飛び降りた。

「・・・・・・ガイル、貴方に尋ねます。何故、貴方は人を殺すんです？」

「そんなの決まってるじゃねえか。人を殺すのが・・・・・・楽しいからだよっ！」

ガイルが突然、腰の剣を抜き、ルフィア達に刃先を向けた。剣の刃は紅く光っており、まるで血の様にも見え、ルフィア達に緊張を与えた。

ガイルの突然の抜刀により、ルフィア達はそれぞれの武器をガイルに向ける。

「おめえ等の仲間ごっこは今日で終わらせてやる。特に煉。俺を裏切った事、後悔するが良いさ」

「裏切るも何も、最初から貴様の味方に付いた覚えはない！・・・・・・あたしはっ、皆を殺した貴様を許さないっ！ 必ず、必ず貴様を殺してやる！」

ルフィアは剣をガイルに向けながら、動揺を抑えるのに必死になった。

煉は先ほど、皆を殺した、とガイルに向かって言った。ルフィア達は流鳥の民の皆はガイルに捕らえられていると、煉から聞いていたのだ。それなのに、煉は殺した、と言った。つまり、本当は流鳥の民はもう、煉を残して一人残らず死んでしまっているという事なのだ。

きつとルフィア以外の全員、新しく聞かされた事実に驚いている

だろう。しかし今は戦いの場。誰もその事を表情に出さなかった。

「覚悟しろ、ガイル！」

煉がガイルに向かって扇子を仰いだのが戦いの始まりになった。煉の風は、風を切りガイルに向かった。ライムはその風に乗るよう弓を放った。ライムの放った弓は見事に煉の風に乗れ、ガイルのもとまで更に加速し進んでゆく。

「ふん、案外つまらない」

ガイルはとてつもなく早くなっている弓を、まるでたわい無いように、それを素手で受け止めて見せた。

「ほんの少しの間、時間を作って下さいっ」

ルフィアは早口で言うと、レキの方を向き、手を翳した。

その行動に気づいたガイルがルフィアに狙いを定め、歩きだした。

「させないわよっ！　聖なる守り、時に、封ずる力となれ！」

ティアが、ルフィアに向かって歩いてゆくガイルに杖の先を向けた。すると、ガイルの周り全体にバリアーが張られ、ガイルの動きを封じ込めた。

「なんだと!？」

「我が身を守る神よ、偽りの姿を捨て、我の前に真の姿を示し給え。火神、シーガ！」

ガイルがティアの張ったバリアーにより、動けぬ間にルフィアは

唱終えた。

紅い光がレキを包み込み、光が大きくなると光ははじけ飛び、レキの真に姿が現れた。

『ティア、その技いつの間に覚えた？　なかなか良いアイディアの様だな』

「そうでしょ。もっと褒めて良いわよ、レキっち。洞窟を歩いている間、ぱっと思いついたの。……でも……長く持たないみたいね……」

ティアの呼吸がだんだん荒くなっていく。そして、ガイルの周りに張られたバリアーもだんだんと薄れていった。

「……ティア、と言ったか？　おめえ、なかなか良い想像力持つてるじゃねえか。技術もきつと伸ばせば良くなる。どうだ、俺の仲間にならねえか？」

『貴様っ……！』

「いーよ、レキっち。落ち着いて」

ガイルはティアを、戦いの場で、しかも敵なのに関わらず仲間にと誘ってきた。あまりの余裕さに、レキがガイルに攻撃をしかけようとするが、ティアがそれを制す。

「褒めてくれてありがとう、と言うべきかしら？　けど残念ね、ガイル。私はあんたなんか大っ嫌い。まして、あんたに両親を殺され、村のみんなも殺され、村を焼き払われた。あんたの所為で、私の帰る場所は無くなったのよ」

「ふん、恨むならその姫様を恨みな。俺はあいつだけを狙っていたが、見つかなかった。村の奴に聞いても誰一人として答えなかったから、殺したまでだ。ま、今考えるとあいつ等は、姫様の本名

知らなかったから答えられなかったのかもなあ。俺はルシファと名を出していたからな」

ガイルは、まるで自分は悪くない。とても言っているようだった。ルフィアは、胸が痛むのを感じた。きつと、あの村にガイルが来た理由はなんとなく、分っていた。けれども、自分の所為で皆が死んでしまったという事を、認めたくなかったのだ。けれども、先ほどのガイルの言葉で確定されてしまった。やはり自分の所為なのだ。ルフィアは、必死で涙と胸の痛みを耐えた。

「ルフィアはなにも悪くないわ。なんで私がルフィアを恨まなきゃいけないのよ？」

ティアの言葉に、少しだけだが、ルフィアは胸の痛みが少し治まった気がした。だが完全に収まるわけではなく、ルフィアはそつと右手を胸の中心に添えた。

「私は、あんたに土下座されたって仲間にはならないわ。死んでもごめんよ。あんたみたいな最低な奴、私にとっては生きてるだけでも許せないの。……。あんたは、人の命の重さも分らないんでしょね。死んでしまう事が、どれだけ辛い悲しいかなんて、あんたには分らないでしょうね」

「ふん、分りたくもねえな、そんなつまらん事。……。俺の仲間になるのは死んでもごめんと言っただけよ？　じゃあ、おめえに生きる価値はねえ。死ね」

ティアのバリアーが完全に消えると、ガイルはティアに刃先を向ける。しかし、ティアは一気に大量の魔力を消費したので、今にも倒れそうな勢いだ。息を荒くし、杖で自分の身体を支えている。

ティアの魔力が回復するまで、すくなくとも少しは時間かかるだ

ろう。それまでは、回復魔法も簡単なものしか使えなそうだ。
そんなティアをガイルから庇う様に、レキがティアの前に立ち、
ガイルから隠す様にした。

『貴様などに、人の価値など分るまい』

レキはガイルに向かって右手を翳した。すると、レキの爪が徐々に伸び始めた。とても人間には出来ない真似だ。守護神という名があるものしか出来なそうな事だ。

「ふん、人の価値なあ？　んなもんあるかよ！」

ガイルはレキに向かい、飛び掛った。

ガイルの剣がレキの顔に当たる前、なんとかレキは爪でその攻撃を凌ぐ。

『一人一人に、価値はある！』

「だからねえつつつてんだろ。……なあ、火神シーガ。なんでおめえはそんな弱い奴等を守るんだ？　そいつ等はおめえがいねえと、即死んじまうくれええ弱いんだぜ？」

ガイルはレキに剣を押し付けたまま話す。

『俺が居なくて即死ぬのだったら、なおさらだ。俺はこいつ等を守る。……貴様の様な奴等からな！』

レキはガイルの剣を弾き、拳を構える。

ガイルは弾かれた剣を上手い具合に持ち直し、再びレキに刃先を向ける。

「俺には分かんねえなあ。んな雑魚、ほつとけばいいじゃねえか。どうだ火神シーガ、俺の仲間になんねえか？ おめえは強いから大歓迎だぜ？」

『ふん、貴様の仲間になるくらいだったら、こいつ等守り抜いて死ぬ方がよっぽどましだ』

レキは感情の籠っていない声で、ガイルに言い放つ。ガイルは気にする風も無く、レキに再び話しかけた。

「確か、守護神は一度死ぬと記憶を失い、それから再び生き返るんだよなあ？ だったらおめえを一度殺して、俺の仲間にさせてやるうか？」

ガイルのにやにやとした笑いは、ルフィアに恐怖心しか与えなかった。

流石、とでも言うべきか。此方には仲間がたくさん居る。しかしガイルは一人だ。なのに、怯えも怯みもしない。むしろガイルは、この不利な状況を楽しんでいる様にも見えた。

「なあ、そうしてやるうか？」

ガイルは何も言わないレキに、再び言った。

「……そんな事は、させません！」

ガイルの言葉を返したのは、レキではなくルフィアだった。身体が小刻みに震えるのを隠すため、ルフィアはガイルに向けて剣を構えた。

「レキの記憶を消すなんて、絶対にさせません！ 記憶が無い事が

どんなに辛いかなんて、貴方に分かるんですか!？」

ルフィアは、記憶が無い事がどんなに辛く悲しい事知っていた。以前、ルフィアも記憶を失っていたからだ。

記憶を失ってしまうと、何もかもが分からなくて怖い。自分が誰なのかも、此処がどこなのかも、周りに居る人すらも分からなくなる。何を信じて良いか分からなくなる。本当に信じて良いか悩んでしまう。優しさが、恐怖にしか感じなくなる。何を考えて良いか分からなくなる。

何もかもが分からなくなる。それは、幼い時に記憶を失ったルフィアにとっては辛い事ではなかった。ルフィアはつい最近、記憶を取り戻したばかりだ。それまでは自分は本当は誰で、どんな風な暮らしをしてきたか、家族は誰か。何もかもわからなかった。

レキは、そんな事を何回味无穷ってきたかなど、ルフィアにも、勿論生き返るたび記憶を失うレキ本人も分からない事だった。でも兎に角ルフィアは、そんな事よりも何よりも、自分達を忘れてほしくなかったのだ。

「はあ？ 記憶が無くて辛いかなんて、俺が分かる訳ねえだろ？俺は記憶喪失になった事はないんでね」

ガイルはひゃっひゃつと下品な笑い声を上げた。

「・・・・・・っ！ ガイル、貴方は、最低です!」

「最低で結構です、姫様。俺は別に他人にどう見られようが関係ありませんからね」

ルフィアを馬鹿にするよう、敬意を払っている風なそぶりを再びガイルは見せた。

その瞬間、ルフィアはガイルに風のような素早さで斬りかかる。し

かし、ガイルはルフィアの考えなど分かっていたように、ひよいとける。

「炎闘っ！——えんとう——」

ガイルの避けた先に、ライムが炎を纏った矢を放った。しかしそれも簡単にガイルに避けられる。

「炎惨爪！——えんざんそう——」

今度はレキがティアを後ろに庇いながら、ガイルに攻撃を仕掛ける。ガイルは身体を仰け反らせ避けたが、少しかすったらしく、服に細いレキの爪痕がついていた。

「女神流すは悲しみの紅き涙……今、我に刃向かう者共に、その苦しみ、天から降らせん！」

ガイルの声が空に響いた瞬間、女性の悲鳴のような泣き叫ぶ声がルフィア達の耳に届いた。

「……………あ……………うつ……………！　み、耳が……………おかしくなるっ！」

女性の声は、だんだんと大きくなり、ルフィア達を苦しめた。しかし、それだけでは終わらなかった。

これ以上無い、と思うほど女性の叫びが高くなった瞬間、空から紅く尖った針が、ザックが居る方向にだけ降り注いだのだ。

「ザックッ！　バリアー！」

針が空から降ってこようというのに、ザックは平然とした表情でそのまま立っていた。ティアが慌てて光の盾をザックの周りに張り、なんとか攻撃を凌ぐ。

針はまだまだ空から降り続けていたが、急にぴたりと止んだ。その事を不審に思ったルフィアがガイルの方を見てみると、ガイルが愕いた様な顔をし、ザックを食い入るようみつめていた。

「……………ザック、だと？」

ガイルが驚いた表情のまま、呟いた。ザックの位置からは、ガイルの呟きなど聞こえるはずが無いのに、ザックはまるで今のガイルの呟きが聞こえていたかのように、口の端を上げるだけの笑みを顔に浮かべた。ルフィアは思わず、その笑みに寒気を感じた。

「やっと気づいたか。今まで気配を消し攻撃しなかった甲斐があったか？」

ルフィアは、先ほどのザックの言葉に耳を失った。そしてそれと同時に、疑問を抱く。

いつもなら、真っ先に攻撃を仕掛けるザックが、今まで何もなかったのだ。ルフィアはガイルに気をとられすぎていて、その事に気が付かなかった。きっと、ルフィア以外の人もそうだろう。誰もザックが動いていないことを気が付かなかった。

「……………そうか、そういう事か。……………ふはは……………ふはははははは！」

ガイルは突然、愉快そうに笑い始めた。ルフィア達は何がなんだか分からず、ただ呆然と立ち尽くす。

「なんだ、ザック。それとも親の仕返しか？ それとも右目の仕返しか？ それは俺がやったんじゃないぞ。魔術研究の奴等だろう？ ま、原因は俺か！ はははは！ まさかお前が生きていたとはな！ 気づかなかったぞ！ ふははははは！」

ガイルは狂ったように笑い始めた。けど、そんなのルフィアにはどうでも良かった。

ガイルは今なんと言った？ 親の仕返し？ ザックの両親は病気で死んだと聞かされたはずだ。では何故、仕返しという言葉で、ガイルに使う？ それに右目の仕返し？ 確かザックは怪我しただけと言っていた。だけどその怪我の理由は、ザックが働いている魔術研究の人の所為？ けれどその原因となったのはザック？

ルフィアはもう、新しく知らされた事があまりにも多すぎて、混乱してきた。

「ザック、どう言う事なんだ！？ ザックの親父さんとお袋さん、それにお前の右目はガイルにかかわってんのか！？」

ライムがザックに聞き返す。しかしザックは口の端を上げたまま、何も言わない。

「その弓使いの餓鬼。俺が変わりに教えてやるよ」

ガイルの語りだした話を簡単にまとめると、こうだ。

ザックの両親は、大都市カルディアの中でも最も強いところに属していた。ガイルもその二人に一目置くほどで、相当な魔術師だった。

ガイルは勿論、二人を仲間に誘った。しかし、二人は断った。だからガイルは、二人を殺してしまった。しかし、流石最も強いところに属する者。ガイルでも苦戦した。しかし、勝った。久々に強い

相手と戦い、喜んでいた。そして、魔術に興味も多少持った。

そこでガイルは、魔術研究所の最高責任者を殺し、自分が最高責任者になった。

そう、語ったのだ。

「そ、んな・・・・・・・・！ おじさんやおばさんまでガイルにつ・・・・・」

ティアはあまりのショックに、唇を強くかみ締めた。あまりにも強くかみ締めたので、血が滲み始めた。

「なかなか、強かったぜ？ それに、魔術とか以外にも研究で出来て楽しいぞ、研究所つつうのはよ。な、ザック」

ガイルがザックに下劣な笑みを浮かべて言った。

「俺にとってあそこは、地獄でしかない」

そして今度は、ザックが語り始めた。

ザックは、ザックの両親が殺された直後に魔術研究所に働きに来た。

事実を知らされたザックは、悲しみと怒りのあまり、ガイルの前に出て、父ちゃんと母ちゃんを返せ、と言った。しかしガイルはその時何故か笑った。ザックはその笑みに恐怖を感じ、その場から逃げようとした。しかし、ガイルにつかまってしまった。

その時から、永遠と思われる地獄がザックを苦しめた。

ガイルが笑った理由、それはガイルの実験台を探し、見つけたからだ。そう、実験台として ガイルに見つかったのは、ザックだったのだ。

ガイルは魔術研究所の奴等に、ザックに色々な事をさせた。兎に

角、死にたくなるような事ばかりだった。

そして、ガイルはある事をザックで試した。それは、魔物を体内に居れ、操る事が出来るか、などと言う、前代未聞の実験だった。ザックの中に、巨大な蠍の魔物を魔法の力で小さくして体内に入れた。

最初ザックは死ぬかと思うほどの痛みに襲われた。その体内に入れた蠍の魔物は、事もあるうか毒を持っていたのだ。しかも、少しでもその毒に触れただけで死んでしまうほどの強力な毒だった。けれど、体内に蠍後と取り込んだからか、気絶もできなければ死ぬ事を出来ない様になったしまった。

蠍を体内にとりこんでから暫く経つと、ザックの右目に異変が起きた。

なんと、右目が取れたのだ。そしてそこから新しく出来たのは、紫色をした瞳の目だった。

そしてザックは、右目が紫の瞳になってから、死にたくなるような痛みが消え、二つの能力を手に入れていた。その能力の一つは、近くに居る魔物がどのくらい居るか、どんな種類か、何に弱いかなどが一瞬にして分かる能力と、もう一つは、右目で相手を殺意をこめて見つめると、その人の体内に、ザックの中に居る蠍の毒が発生し、死ぬという能力だった。

「う、そ・・・・・・・・」

ザックの話を聞き終えたティアは、口元を手で押さえた。

「嘘なんかじゃない。・・・・・・・・証拠だ」

ザックは、右目についている眼帯を、自分で剥ぎ取った。

眼帯の下から見えた瞳の色は、紫だった。ザックの左目は茶色。先ほどの話は、瞳の色により証明されてしまった。

「ガイル、貴様だけは絶対に、許さない……！　我が声に
応えて舞い踊れ、堕ちた天使達の羽よ！」

ザックは突然呪文を発動させると、突風が吹き荒れた。ルフィア
は思わず目を瞑り、両腕を顔の前に出した。

「いつ……！！」

ルフィアは突然の痛みに顔を顰める。突風が吹き荒れる中、何か
がルフィアの腕に細い傷跡を作った。

ルフィアは突風の中、なんとか目を凝らし、自分に傷をつけた物の
正体を見ようとした。風に乗る、ルフィアの身体を傷つけたものは、
紅い色をした羽だった。先ほどザックの放った術のものと、
すぐにルフィアは判断できた。

周りを目を凝らしながら見ると、ライム達にも傷が付いているの
が分かる。レキは自分に傷が付こうが構わずティアを守っていた。

「皆……！！」

「我が声に応えよ。風花鳥、水氷鳥……」

煉は青色の符と緑色の符を空高く掲げた。

符から青い煙と緑の煙が立ち上がり、晴れていくにつれて、大きな
鳥の形が見えてくる。

『鎮まれ、風よ』

風が吹き荒れる中、はつきりと聞こえた。風は、先ほどまでが嘘
の様にぴたりと止む

『水の癒しよ、彼等に安らぎを……………』

優しい声と共に、ルフィア達の傷を、水が包み込んだ。

『ふふ、私が必要みたいね』

完全に晴れた煙から、水氷鳥の、この場に似合わない明るい声が響いた。

「風花鳥、水氷鳥、援護を頼むよ」

『承知』

『任せて頂戴』。ティア、貴方は此方にきて私の手伝いをしてね』

水氷鳥はのんびりした口調で言うと、風花鳥と共に後衛へと下がった。ティアもその後を追ひ、後ろへ下がる。

「回復役が二人。しかも一人は守護神ねえ。厄介じゃねえか。……………そう言う訳でもなさそうだな」

ガイルは笑い、煉を見た。

ガイルは知っているのだろう、煉が守護神を出すと、大量の魔力が煉の事を襲うと。

煉はすでに荒い息をし、苦しそうに顔を歪める。それでも、ガイルの事を睨み付けるのは止めなかった。

「もって、10分つてどこか？ それ以上やると死ぬな」

「っ黙れ！ 貴様などに言われずとも、分かっている！ それまでに蹴りをつけてやる……………！」

ガイルと煉が無言で睨み合っていると、ザツクの苛ついた声が響

く。

「俺も居るんだ。無視されちゃ困るな」

ガイルが再び笑う。

(・・・傷、一つ無い)

ガイルが再び顔に笑みを浮かべたとき、ルフィアは気づいた。さきほど、サックの攻撃を受けたにも拘らず、ガイルは無傷だった。まるで、ルフィア達に攻撃が向いたように、不自然なほど、傷がついていない。レキに付けられた傷まで消えていた。

その事に気がついたのはルフィアだけでもなく、レキもだった。

『・・・！！ ガイル、貴様はもしかして・・・』

「ん？ ああ、気づいたか？ 火神、お前が思ってるように、俺は法術が使えるぜ」

ガイルはその事を気にもかけないのか、軽く言つと自分の剣を眺めた。

「な、何であんたみたいな人間が使えるのよ！ 法術は、他の法術師の洗礼を受けなければ使えない筈よ！？ それに、悪用をしたら即使えなくなる筈なのに！」

ティアの話通り、法術は、他の法術師達の洗礼を受け、始めて簡単なものから出来るようになる。訓練などを重ね、術の効力をあげるのが基本なのだ。

もしも法術をなにか良からぬ事に使おうものならば、術が前触れもなく、突然使えなくなってしまうのだ。何故、使えなくなるかは

未だ調査中の事だが、大半の人は神様の罰、として考えているらしい。それと術が使えなくなる以外に、もう一つの罰が下されるのだ。それは、法術が効かない、薬なども効かなくなる身体になる事だった。

ティアが睨みつけているにもかかわらず、ガイルは普通に話しかけてくる。

「俺は洗礼を母親だった奴から受けたんだよ、それに、悪用なんかしてねえぜ？」

「嘘よっ！ あんたは何かしら、この力を悪用してるわ！」

ティアが問い詰めても、ガイルは何も言わずただ笑っているだけだった。

「ティア、そいつは魔術を研究してるんだ。特殊な魔術を使って、力を失わずに、これまで法術を使ってきたんだろ。……だろっ、ガイル？」

ザックがティアに自分で立てた仮説を説明し、ガイルの方を向いた。

「おう、その通りだぜ、ザック。お前は本当に頭が冴えてる」

「お前に褒められずとも、知っている」

ザックは不敵に笑い、再び右目に眼帯をつけた。

「なんだ？ 能力を使わねえのかよ」

「そんなもの、使わずとも良い」

ザックはガイルを睨みつける。

ルフィア達は何も言えず、ただ黙っている事しか出来ない。

「…………… 水柱よ、敵を巻き込め！」

長い沈黙が続く中、真つ先に動きを表したのはルフィアだった。
得意の水属性魔法を使い、ガイルへと攻撃をしかけた。

ルフィアの呪文により、ガイルの周りには数本の水柱が生じ、ガイルへと向かっていく。

「炎帝、我に力を貸してみよ」

水柱に飲み込まれる前、ガイルが呪文を唱えた。

すると水柱がすつと消えてしまった。ガイルの火属性魔法により、一気に蒸発させられたのだ。

（水柱が一気に蒸発した……………！……………悔しいですけど、半端無い魔力です……………）

「雷よ、敵の自由を奪え！」

今度は雷属性魔法を唱えた。

ガイルに向かって、一筋の稲妻が走る。しかしこれは、ガイルにあつさりと避けられてしまった。

「鉄爪！ ―てっそう―」

ガイルがルフィアの攻撃を避けた隙をつき、レキがガイルの間合いいに入った。

レキの、鋼のように硬くなった爪が、何度もガイルを掠るが当たりにしない。

「レキ、下がれっ！　烈風！　―れつつぷう―」

レキがガイルから離れた瞬間、ガイルの風のように素早い矢がガイルへと向かう。

「・・・・・・・・ぐっ！」

矢は見事に当たり、ガイルの右腕へと深く刺さる。

「はぁあっ！」

ガイルが回復する前に、ルフィアがガイルへと斬りかかった。寸のところでガイルは避けるが、ルフィアは更にガイルを追い、剣が見事に方に突き刺さった。

「ぐあっ・・・・・・・・！」

流石のガイルも、苦しそうに唸る。ルフィアは目を深く瞑り、更に深くへと剣を突き刺した。

ガイルの手から、紅い刀身の剣が滑り落ちた。

ルフィアは、ガイルから剣を抜く。聖剣祈りの奇跡が、ガイルの血よって赤く染まった。

「これでっ、剣は使えません！」

ルフィアは息を荒くしたまま、ガイルに言い放つ。

ルフィアは、これを狙っていたのだ。

ただでさえ、ガイルは魔法、法術が使える。そして、剣も凄腕だ。だからガイルの利き手を潰し、剣を使えなくしたのだ。

けれども、法術で回復するだろっ。だからルフィア達は油断が出

来なかった。

再びルフィアがガイルに剣を構えた。

「全てを呑み込み苦しみを与えよ！」

「!？」

ザックが突然、呪文を唱えた。

ガイルと、ガイルの近くにいたルフィアまでもが、突然出てきた巨大な水の玉の中に入ってしまったのだ。

(……い、息が、出来ないっ……!)

ルフィアは、水に包まれた際、息切れもしていたので、すぐに苦しくなってきた。

「ルフィア！」

ライム達が、ルフィアの名を呼んだ。ライム達は、ルフィアの事を助きたいのに、何故か体が動かなかった。

ザックだけが、笑っている。

(もっっ……!)

ルフィアが諦めかけた瞬間、ルフィアの目に紅い、綺麗な色が映った。

「炎の精霊王イフリート。今その力、守るべき者の為、貸せ！」

——良かるっ。

早口での、呪文が聞こえる。その後に、低い声が聞こえた。

その瞬間、水が一気に消えてしまった。

「ごほっ、ごほごほっ！」

「かはっ！」

ルフィアは水の玉が消えると、地面に落ち、激しく咳き込んだ。ガイルも助かったらしい。

「ルシファ、遅れてごめん」

ルフィアが座り込み荒い息を繰り返していると、頭上から声が出た。

凜と、澄み渡る綺麗な女性の声だ。しかし、その声はティアでも煉でも、水氷鳥のものでもなかった。

ルフィアは顔を上げ、自分の事を昔の呼び方で声の主を見た。驚きで、目を見開く。

「・・・・・・・・貴方、は・・・・・・・・」

真っ先に浮かんだ紅。ルフィアは、瞳から涙が流れたのが分かった。

女性が、優しくルフィアに微笑んだ。

「ただいま、ルシファ。・・・・・・・・今はルフィアだっけね」

「ソシファ、姉様・・・・・・・・！」

紅の髪を持った女性。それは、ルフィアの姉のソシファだった。ルフィアはずっと死んでいたと思っていたのだが、間違いなく、女性ソシファだった。

『ソシファ！ お前、なんで此処に………!』

「レキ、私が此処にいちやおかしいっての？」

『おかしい!』

レキはソシファが生きていた事を知っていたらしく、言い争いを始める。この場に似合わぬ
雰囲気 flowed.

「ルフィアの………姉貴？」

ルフィアと同じく、ライム達も驚いていた。ザックも驚いており、
ガイルはただ口元に笑みを浮かべていた。

「姉様………生きて、いらっしやったのですか………」
「？」

ルフィアは未だ信じられなくて、レキと言い争いをしている女性
に尋ねた。

「生きてたよ、ルフィア。ずっと、貴方に逢いたかった………」

「

ソシファは、ルフィアに静かに微笑む。しかし、それを邪魔する
かの様に、ルフィアとソシファの間に雷が落ちる。

ソシファはルフィアを押しつけ、自分も雷を避けた。

「………姉妹水入らずを邪魔する奴が居るのを忘れてた」

ソシファは、雷を落としてきた人物に目を向ける。

「それは、俺の事か？」

その視線の先には、おかしそうに笑っているガイルが居た。

「……………ルフィア、よく聞きなさい」

ソシファは、ガイルに聞こえない音量でルフィアに囁いてきた。

「今の貴方達では、到底ガイルには勝てない。此処は一旦引きなさい」

「そんな……………！」

ルフィアはソシファが言いたい事は良く分かる。しかし、今此処で諦めてしまえば、今までの努力が無駄になる。

「お願い、理解して。今より強くなってガイルに戦いを挑むの。今の貴方達では、正直言ってガイルのお遊びにもならない」
「……………っ！」

ルフィアは、薄々気づいてはいた。

今はまだレキ達守護神が居る。だから、ガイルとも戦える。しかし、レキ達が居なかったら、到底戦いあえず、あっさりと負けていただろう。

「ルフィア、分かって」

「……………っ、分かり、ました……………」

正直言つと、引きたくなどなかった。しかし、ライムやティア、煉やザックの事も考えると引くしかった。

「それで良いの。貴方は賢い。……私が移動魔法を唱えるまで、時間がかかるの。時間稼ぎをして」
「はいっ！」

ルフィアが返事をするのを確認した後、ソシファは静かに詠唱を始めた。その間に、ルフィアは再びガイルへと向かった。

いつの間にか、ガイルの傷は完全に回復してしまっていた。しかしルフィアはそんな事を気にする事もなく、時間稼ぎに意識を集中させた。

剣と剣がぶつかり合い、金属音が辺りに響いた。

「元気な事で」

すぐに剣を弾かれるが、諦めず再び剣を交える。

「黙りなさい！」

ルフィアは一旦間合いを取ると、レキの方に合図を送る。

レキはルフィアの合図に気が付き、ガイルへと向かって行く。

『はぁあっ！』

レキの拳の周りに、炎が纏わりついた。炎を纏った拳のまま、ガイルへと殴りかかる。

「おおっと！」

ガイルはわざとらしく声をあげると、身体を仰け反らせ、攻撃を避けた。長い髪が微かに炎に掠り、微かに焼ける。

「やっぱやられたら……やりかえさねえとな！　さあ、剣よ。黒に染まれ！　惨淵刃！——ざんえんとう——」

ガイルが剣の刀身をすつとなぞった。すると、紅かった刀身はたちまち黒い闇色に染まっていく。

「虚弓！——こくう——」

黒く染まった刃先を、ルフィアに突きつけた。刃先から、全ての色が黒い矢が出現し、ルフィアへと襲い掛かる。

「っ！」

「光弓！——こうくう——」

矢が後数センチでルフィアに当たる、というところで、ガイルの矢とは正反対の白い矢が黒い矢へと飛んで行った。白い矢は見事に黒い矢に当たり、二本共音を立てて地面へと落ちた。

勿論、白い矢を放ったのはライムだった。矢をガイルへと向け、ぎりぎりまで引いている。

「面白い。だが、甘いんだよ！　惨刀！——ざんとう——」

「バリアー！」

再びガイルはルフィアへと攻撃を仕掛けてた。しかし、ティアの張った防御壁によって攻撃はそしされてしまう。

「……………皆下がちなさい！」

ガイルと睨み合っていると、ソシファがルフィア達に下がるよう

命じた。どうやら準備が出来たらしい。

ルフィア達は素直に指示に従い、後ろへと下がる。

「我、滅びし城へ行く事を望む！」

凜としたソシファの声が辺りに響き渡り、ぐらりと視界が揺れた。立っていられないくらいの衝撃が身体を襲った。

「・・・・・・・・っ！」

ふっと、身体が揺れなくなった。

恐る恐る目を開けると、ルーガが居た。辺りを見回してみて、改めて此処が何処だか分かった。

此処は、ルーシャ国だった。ソシファが言った滅びし城と言うのは、ルーシャ国の事だったらしい。

「皆無事にいる？」

ソシファの声に、ルフィアは辺りを見渡してみた。

レキ、ライム、ティア、煉、風花鳥、水氷鳥。皆揃っている様に思えたが、しかし、ザックだけはいなかった・・・・・・・・。

「！ 姉様、ザックが！」

ルフィアが慌ててソシファに報告をすると、ソシファは顔を少し暗くした。

「あの子は・・・・・・・・ザックと言う子は置いてきた。ガイルと一緒に」

「・・・・・・・・！！ 何故ザックだけ置いてきたのですか!？」

ルフィアは、ソシファの言っている意味が良く理解出来なかった。何故、ザックだけをガイルのもとへ置いてきたか考えられなかった。

「あの子は、貴方を殺そうとしたから」

ルフィアの問いに、ソシファは毅然と答えた。

「ですがっ！」

毅然と言い放つソシファに、ルフィアは納得がいかなかった。確かに、ザックはガイル共々ルフィアを殺そうとした。しかし、それでもルフィアにとってザックは大切な仲間なのだ。今すぐにも、ザックのもとへ向かいたいくらい、ザックが生きているか不安になる。

「あの子が、貴方をガイル共々殺そうとしたのは揺るぎ無い事実。ルフィア、貴方は甘すぎる。そんな心じゃ、人を……。ガイルすら、殺せない。大切な人も、守れない。その甘い心は、捨てなさい」
「・・・・・・・・っ」

ソシファは、ルフィアに現実を突きつけるように、言い放った。ルフィアは、言葉を濁す。

「私だって、こんな事は言いたくない。その優しさは、ルフィアらしさでもあるから。でもね、貴方には死んで欲しくないの。でも、貴方のその甘さが消えなれば、この世界では生き残れない」

ソシファは、ルフィアに納得させるよう言うが、今のルフィアに

は聞き受けられなかった。

つい最近になって、再び会えた親友ともいえる友達だったザック。いくら自分の事を殺そうとしても、やはり大切な存在であった事には変わりなかったのだ。

「でも、ザックは………！」

「………あの子は、貴方が知っているような子じゃなくなってる。蠍を体内に入れてしまった時から、心を、捨ててしまった。貴方達に見せていたのは全てあの子の偽りなの」

ソシファの言葉を聞き、ルフィアは思った。

あの時のザックの笑顔も、偽り。あの時のザックの言葉も、偽り。ルフィアは、そう考えても、どうしても納得できなかった。それに、あの時の全ては偽りではないとルフィアは思っていた。

「………偽りなどでは、ありませんでした！ ザックは全てを偽っていた訳ではありません！ それに、ザックが私の、大切な仲間だった事には、変わりありません………！ もし、ザックが死んでしまったら、私は、私はっ………！ 一生、後悔だけが残ります………！」

必死に、ソシファに訴えた。

今此処で、場所を移動させる力を持つ者は、ソシファだけだからだ。

「………貴方がどんなにあの子を信用しようとして、私は、信用出来ない。再びあそこへ行く事は、させない」

「何故っ！」

ソシファの口調は頑としたもので、決して折れそうになかった。

ルフィアは、僅かな苛立ちを感じた。

何故、助けに行かないのか。

何故、助けに行つてはいけないのか。

．．．．．何故、ザックを信じれないのか。

「言つたでしょう。ルフィア、それにライム君にティアちゃん、煉ちゃん。貴方達は、弱すぎるの。言つたでしょう、今の貴方ではお遊びにもならない、と」

「っ．．．．．!」

ルフィアは、唇を強く噛み締めた。それはライム達も同じで、皆が悔しそうに握り拳を作る。

『姫。ザックを助けたと思うのなら、強くなれ。．．．．．ザックはまだ、生きている。なにか素早い物に乗って移動している．．．．．』

「本当、ですかっ!？」

ルーガの言葉に、ルフィアは漸く落ち着きを取り戻し始めた。ザックは、生きている。

今のルフィアには、それだけでも十分だった。

「．．．．．私達は、どうすれば強くなれるのですか？」

一度深呼吸をして、完全に冷静を取り戻してからソシファに尋ねた。

今のままでは、到底ガイルに勝てない。助けたい、と思う人も救えない。レキ達、守護神の邪魔にしなければならない。

ルフィアは、強くなりたいと願った。

「まず、一つ。ライム君、ティアちゃん。守護神を持ちなさい」
「！」

ライムとティアが、驚きで目を大きく見開いた。ルフィアも、そう言ってくるとは考えていなくて、驚いた。

「守護神は、貴方達に必要な存在。レキは三人守れない。だからと言って、煉ちゃんが何体か守護神を出しているのは危険なの」

煉は、無意識に懷にしまっている、符に手を当てた。

「まず、ライム君。貴方は、風の属性と相性が良い。ルーガを守護神となさい」

「ルーガを？」

ライムはルーガの方を見て見た。

目元が鉢巻で隠されている所為で、その表情が良く分からない。

『姫、しかし私はこの国の番人だ』

ルーガが静かに言った。

ルーガは、もう自由になれば良いのに、とルフィアは思った。

「そう。じゃあ、今から貴方にこの国の姫として命ずる。もう、この国を守らなくて良い。どうせもう、廃虚と化している。こんなところを守ったって、良い事なんて何もない」

『……………承知致しました』

ルーガは静かにソシファに跪いた。

ソシファは困った様に笑い、跪かないで、と言った。

「で、次はティアちゃんんだけど、貴方は回復系の水属性が合ってる。煉の水生を従えなさい」

「水生って事は………水氷鳥を？」

「そう。良い、煉ちゃん？」

ソシファは煉の方を向き、確認を取った。

煉は無言で頷き、ソシファに歩み寄り、水氷鳥の入ってる符をソシファに渡した。

「………これで良いかな」

ソシファはルーガと符を見ると、ふわりと微笑んだ。

「あの………どうやって私の守護神にするんですか？」

ティアが遠慮がちにソシファに聞いた。するとソシファはまたもやふわりと微笑んだ。

「簡単な事だよ」

影の扉と己の奥底

「簡単な事だよ」

ソシファはふわりと微笑んだ。

「けれど、今は先にして欲しい事があるの」

続けて言うと、ルフィア達の返事も聞かず歩き出した。その足取りは、確実に城に向かっていている。

「・・・・・・ソシファ姉様？」

ルフィアは向かう理由が分からず、ソシファの名を呼んだ。
ソシファは振り返らず、大丈夫、とだけ言い、足を止めなかった。

「・・・・・・」

此処には暫く来なくて済むと、ルフィアは思っていた。出来れば、二度と来たくなかったのかもしれない。

たくさんの人が息絶え、両親の最後だったこの場所。居るだけでも、涙が溢れそうになった。自分の事を攻めずには居られなかった。何故、こんなにも私は無力なんだろう。

あれから、何年も経った。しかし、あれから何の進歩もしていない。

記憶を取り戻した日から、ルフィアは毎日のように訓練した。皆

が寝静まった頃起き出し、皆の迷惑にならないようにし続けた。けれど、なんの進歩なく、ルフィアは、自分の無力さを嘆いた。

もっと強ければ、皆助かっていたかもしれない。もっと、私は強ならなければ……！！

もっと強くなりたい、もっと、もっと強くなりたい。もう二度と、誰も失いたくない。失くしたくない。

そっと、祈りの奇跡に触れてみた。

この剣は、たくさんの者の死を見てきただろう。……否、人の死しか見てこなかっただろう。

所詮は剣。戦いの為にしか使えない、武器でしかない。争いが起きる度、この剣は、人が流す紅い血を浴びてきたに違いない。

（なんて、可哀想なんでしょう……）

ルフィアはそこでふと気が付き、指先が、自然に震え始めた。

結局のところ、ルフィアもこの剣を使い、人を殺めようとしているのだ。いくらガイルと言えど、人には変わらない。ルフィアもまた、この剣を紅へと染め様としているのだ。

ルフィアの指先だけではなく、身体全体が震え始めた。

“ルフィア、貴方は甘すぎる。そんな心じゃ、人を……ガイルすら、殺せない。大切な人も、守れない。その甘い心は、捨てなさい。”

ソシファの言った意味が、漸く理解できた気がする。

（私は……人を殺すのが怖い……怖いんです……）

ルフィアは、人を殺す事を恐れていた。ソシファはそれに気づい

ていて、あんな事を言ったのだ。

（本当にこれでは、ガイルすら殺せませんね．．．．大切な人を守る時、もしもの場合で人を斬らなければならなかった時、私には出来ません．．．．．）

ルフィアに、人を殺す覚悟など出来ていなかった。それなのに、ガイルを倒すなどと言い、出来る筈もなかった。最初から、例えルフィアがガイルより強かったとしても、人を殺す事の覚悟が出来ていないルフィアが、人を殺す事に躊躇いを持っていないガイルに、勝てる筈がなかったのだ。

（．．．．．私は、怖くても．．．．．覚悟しなくてはいけない）

ルフィアは、覚悟を決めた。まだ、ザックの事は助けたいと言う気持ちは消えない。しかし、人を殺す、と言う覚悟は決めた。例えそれが、大切な仲間だったとしても、ルフィアは殺そうとも思った。けれども、

（覚悟は．．．．．出来た．．．．．けど、本当に私は出来るでしょうか．．．．．？）

大切な仲間だったとしても、殺す。

ルフィアは、これだけは出来ないかもしれないと思った。やはり、まだ甘さが抜け切れていないが、でもこれだけは一番避けたいと思った。

「行こう、ルフィア。ソシファさん、見えなくなっちゃうよ？」

ティアが優しく声をかけてきてくれた。ルフィアは、はいと言
言つと、歩き出した。

先に歩き出していたティアの後姿を見て、ルフィアは、やっぱり
私には、大切な人までは殺せない。と思った。

ルフィア達はただ黙ってソシファの後について行った。

謁見の間がある二階を通りこし、ルフィアが幼い頃から、決して
行つてはいけないと言われていた三階へとついた。

「姉様。此処は、来てはいけないのでは？」

ルフィアは昔、念に念を押されていた事を思い出し、ソシファに
尋ねてみた。しかしソシファは微笑むだけで、さっきから一言も話
さなかった。

三階の、奥へと向かった。三階は、床が抜けていたりするところ
もなく、ただ埃だけが溜まっていた。

「・・・・・・・・着いた」

ソシファが、不意足を止めた。

ルフィア達は、目の前に広がる物に驚きを隠せなかった。ルフィア
は、こんな物が城に在った事すら知らなかった。

目の前には、兎に角巨大な扉があり、扉全てが硝子の様だった。

「この、扉は・・・・・・・・」

「この扉はね、影の扉と呼ばれているの」

「影の扉？ 硝子の扉の方がよっぽどしっくりくるぜ？」

ライムの言う通り、扉は全面ガラスなのだ。ソシファが言う影は、どうもしっくりこない。

「私もそう思う。けどね、ちゃんとした理由があるの。今から、この扉の中に、一人ずつ入りなさい」

扉を指差し、平然とソシファは言った。

入る入らない以前に、ルフィアは開かないのではないだろうかと思った。

「開くよ」

まるでルフィアの心を読み取ったかのように、ソシファが答えたので、ルフィアは驚いた。

「ま、そんな事は良いとして、まずルフィア。貴方から入りなさい」「私からですか？」

多少の不安を覚え、ルフィアは少し躊躇った。

しかしソシファは、平気平気と言い、ルフィアを扉の近くへと手招いた。

「扉の前に立って頂戴」

ルフィアがソシファの指示通り扉の前に立つと、突然透明な二本の腕がルフィアへと伸び、扉へと引っ張った。

「っ！？」

あまりに突然のことで、ルフィアは強く目を瞑った。
扉にぶつかると思い身構えるが、いつまで経っても衝撃は来なかった。暫くすると、ぴちゃん、と水音がした。

ルフィアが不思議に思い、恐る恐る目を開けると、一瞬にして風景が変わっていた。

「此処は・・・・・・・・・・」

たくさんの結晶状の透明な水晶があり、尖っている先端部からは、水が少量ずつ流れ、水晶を伝って透明な床へと水溜りを作っていく。その光景は全てが、輝いて見えた。

——・・・・・・・・ルフィア、聞こえる？

ルフィアが周りの景色に見惚れていると、頭上からソシファの声が響いた。

「聞こえます。何処にいらっしゃるのですか？ それに、此処は一体・・・・・・・・・・」

——私は扉の前に居るよ。貴方が今居る場所は、貴方の心を表した世界なの。その人の心によって、見える世界は違うの。

「・・・・・・・・心で、変わる・・・・・・・・」

ルフィアは、周りをじっくりと見渡した。

此処は、美しいと素直に感じた。しかし、美しく綺麗な反面、どこか儚く、壊れやすい、弱い感じもする。何か色が混じると、全てがその色に変わってしまいそんな染まりやすさ感じもした。

（これが・・・・・・・・私の心・・・・・・・・）

ルフィアがじっと、辺りを見つめてみると、突然黒い影が現れた。よく目を凝らすと、その影は……剣を構えたルフィアだった。

「!？」

——その影は、今の貴方と互角の力を持っている。その影を、倒しなさい。

ソシファそれを最後に、何も言わなくなってしまった。

(……つまり、今の自分を超えると言う事ですね)

ルフィアは深く息を吐き、前を見据え、祈りの奇跡を構えた。影も、ルフィアに向かって剣を構える。

「……………」

暫くの間、互いに一步も動かず、じっと相手を見つめた。ぴちゃん、と水音が辺りに響き渡った。その瞬間、金属音も響き渡った。

「……………っ！」

一旦離れ、また剣同士を交える。こうしてみると、やはり目の前の黒い人影は、自分自身の影なのだと分かる。全く実力は同じだ。

「……………! 雷よ、敵の自由を奪え！」

ルフィアが魔法を唱えたのとほぼ同時。影も魔法を使い、ルフィ

アへと雷を落とした。それに逸早く気が付いたルフィアは、寸のところで避けた。影も、避けてしまった。

「はあっ！」

体制を整え、素早く影に斬りかかる。影は肩に掠める程度攻撃を喰らい、怯んだが、すぐさまルフィアへと反撃をした。

「くっ！」

影の鋭い突きはルフィアの肩を掠め、紅い線を残した。筋のような線からは、つつつと血が流れる。

(・・・これでは、負けてしまう・・・)

これが本当に自分の実力なのだろうか。ルフィアはそう考えずにはいられなかった。

確かにこの影は自分だ。ルフィアは再び剣を交えながら感じた。しかし、この影には勝てない気がしてならないのだ。

(・・・太刀に、迷いが無い)

ルフィアは、本当は気が付いていた。まだ、恐れているのだ。・・・人を殺すという事を。

覚悟する事など、誰にでも出来る簡単な事だ。しかし、それを本当に覚悟しているかは、その人次第。つまりは、口先だけでならどうとも言えるという事だ。

(迷っては、いけないのに・・・！)

己の影すら、斬る事を躊躇っている。ルフィアは、情け無い気分になってきた。

——．．．．．ルフィア、他の人の戦いを見てみなさい。

ソシファの声がしたと思ったら、一瞬にして、水晶の場から草原へと景色が変わる。

「奏星！——そうせい——」

そこではライムと、ライムの影が戦っていた。
ライムは汗だくになりながらも、必死に攻撃をし続けている。そこには、決して迷いが無かった。

（ライム．．．．．）

ライムは、とつくに覚悟など出来ていたのだ。
ルフィアは、唇を噛み締めた。

ぶわりと強い風が吹き、また風景が変わる。今度は、聖堂の中の様な場所へと変わる。

そこにはティアとティアの影が戦っていた。

「光よ！——」

（魔法．．．．．？）

今までティアの使える筈のなかった魔法を、ティアは使っていた。
ティアは回復などの補助以外に、攻撃する事も出来る様になったのだ。

今度は眩い光が迸り、一瞬にして場を岩山へと変える。
今度は煉と煉の影が、特有の武器の巨大な扇子で戦っていた。

「貴様などに・・・・・・・・自分に負けるか！」

煉は何度も己の影へと攻撃を仕掛け、戦っていた。

（煉ちゃん・・・・・・・・）

——ルフィア、もう良い？

「・・・・・・・・はい」

ソシファの声が、頭上から響く。

ルフィアは短く返事をし、もとの場へと戻るのを待った。

一瞬にして、再び水晶の場へと戻る。目の前には、変わらず影が剣を此方に構えていた。

ルフィアは目を瞑り、大きく深呼吸をした。

（・・・・・・・・もう、迷いはしません。心を・・・・・・・・そう、鬼にする。心を鬼にすればいいんです）

ゆつくりと、閉じている目を開けた。

瞳は、普段優しげな蒼色ではなく、紅い、決意の色に変わっていた。

「もう、迷わない」

今度は口に出して言う。

ゆつくりと、己の影へ剣を向ける。

「心を、鬼にする・・・・・・・・！」

ルフィアは、祈りの奇跡を影へ向けながら、駆け出した。

ソシファは扉に手を付き、瞳の色が変わったルフィアをじっと見ていた。

「…………レキ、ルーガ。あの子がついに決意したみたい。鬼の如くなる決意を」

扉から、手を離しながら話した。

その声音は、決して嬉しそうなものではなく、とても悲しげだった。

「……………」

「馬鹿だね、私。自分からそうなれと言ったのに、いざそうなられると、正直辛い…………。あの子には、人を殺す覚悟なんかに欲しく無かったの。ずっと、優しいあの子のままで居て欲しかった」

「…………何も、ただ決意をしただけで、これからもあいつは変わらないさ」

レキはソシファの事を安心させる為に、なるべく優しく聞こえるように言った。

「分かっているの。分かっているけど…………嫌、なの…………！ 私が無力な所為で、あの子を変えさせなければならなくなってしまう事が嫌なのっ！」

半ば叫びとなったソシファの言葉は、深くレキの胸に突き刺さる。結局、ソシファにも辛い想いをさせてしまっている。

自分を恨まずにはいられなかった。

何故ソシファとルフィアだけが、こんな辛い想いをしなければいけないのか。こんな想いをするのは、自分達だけで良かった。

(・・・俺達、守り神だけで良かったんだ)

神は何故、二人にこんな辛い試練を与えたのだろう。本当にそう聞いてやりたいくらいだった。

「それなら、俺達も同じだ。俺達も、無力だ。たかが人間一人の所為で、俺達が無力な所為で、まだ餓鬼のあいつを・・・」

あいつを人殺しへとさせなければならなくなった。

レキは言葉を飲み込んだ。その言葉を言わずとも、ソシファには十分伝わっていた。

『・・・姫、レキ。己を無力と嘆くな。嘆いたところで、何も変わりはない』

悲しみに暮れたような、珍しく弱気なルーガに、レキ達は口を閉じた。

レキ達も、分かっているのだ。しかし、嘆く事しか出来ない。変わらないと分かっている、嘆いてしまう。己が無力だ、と。

「・・・なあ、あいつ等、どうなって扉の中から帰ってくるかな」

『私は、知らぬ』

ルーガに聞いてみるが、素っ気無く返されるだけだった。それは昔からの事で、もうレキは慣れてしまっているが、こういう時には不安を感じてしまう。

「・・・・・・・・・・」

『ただ、確実に強くなって帰ってくるという事だけは事実だ』

力強い言葉に、レキは微かに笑った。

たった一言で、こつも安心出来る。

そう思つと、自然と笑みが毀れた。

「・・・・・・・・・・ははっ、当たり前だろ」

影の扉は、扉の中に入った時点の自分の力を超えなければ出れない仕組みだ。出てこれたと言う事、つまりは己を超えたという事だ。

「・・・・・・・・・・早く、帰ってきて欲しいね。あの子達に・・・・・・・・・・」

「

ソシファは再び、透明な扉へと手を付き、ルフィア達の事を見つめ始めた。

額に汗がうつすらと滲む。

未だ、ルフィアは己の影を倒す事が出来ずにいた。勿論、そう簡単に己の影を越えられる筈も無いのだが、ルフィアは早く超えたい

と思っていた。

今戦っている相手は、自分の影だ。当然、剣の流派も一緒という事になる。癖も、全く一緒だ。

（……………このままでは、いけない。何か、新しい攻撃方法はないでしょうか……………？）

突然型を変えるのは相当大変だ。今使っている剣術は幼い頃から使っており、戦い方を変えるのであれば、相当馴れたようでは無理だ。自滅するのが落ちだろう。

（……………何か、何かないでしょうか……………）

なるべく、慣れているもので。

考えていると、一つのアイディアが浮かんできた。

しかしこの考えは、無駄な動きが多い上、形を崩されてしまえば逆に此方が危険な状況にされるだろう。

（やってみるしか、ありませんね）

少しでも状況が変わるなら、とルフィアは剣を構えるのを止めた。影が、不思議をそうに此方を見ていた。どうやら、ルフィアの出方を伺っているようだった。

一度深呼吸をすると、ゆっくりと、得意の舞を始めた。

舞いながら、ゆっくりと影へと近づく。影は剣を構えているだけで、まだ攻撃はしてこない。

舞いながら……………否。ルフィアはただ舞い続けた。

ルフィアの剣が、影へと自然に攻撃を仕掛けた。

思ってもみなかったのか、影は少し遅れて防御をする。

今度は右回りで回転しながら、剣を払う。流石にこれは簡単に受

け止められてしまった。でも先ほどの攻撃で分かった。

（勝てる………きつと）

確信はない。ただ、そう感じる。今は、自分を信じるしかない。だんだんと、舞の速さをあげた。それに合わせて、影も速さを上げてついてきた。

動作一つをする度に、辺りには金属音が響き渡る。

やはり、舞だと疲れやすいが、慣れているし、今まで使っていた剣術と一緒に組み合わせ使用と、なかなか良いかもしれない。舞はリズムが取れ、スピードが今まで出せなかった分まで出せるようにもなった。

そんな事を考えていたら、影の動きが鈍くなっているのに気がついた。今のルフィアの速さに、ついてこれてきていない。

ルフィアはさらに舞を速くした。

疲れが出てきているが、でも、動きを止める程ではない。影を見る余裕もある。影を見てみると、もう剣の型は乱れ、ルフィアに止まない攻撃を必死に受け流しているだけだった。

舞を一旦止め、影と距離を取る。

影は荒く肩を上下させている。ルフィアも息を荒げてはいるが、すぐに収まってきた。

「……………これで……………終わりです！」

まだ影の息が調わないうちに、祈りの奇跡を影に向かって掲げ、躊躇わず振り下ろした。

呆気なく、影は縦に切られてしまった。

影が消えた途端、一気に疲れが押し寄せ、ルフィアはその場に倒れるように座った。

「はあ、はあ………」

目を瞑り、深呼吸をする。何度かそれを繰り返すと、荒かった息は落ち着いた。

ゆっくりと、目を開ける。瞳には、もう優しさの伺える瞳の色に戻っていた。

「……勝った、ですね」

改めて安堵感が湧き上がってきた。
立ち上がり、周りを見渡してみた。

「………？」

よく見渡してみると、水晶が敷き詰められる中、奥の方に真っ黒に染まった水晶が一つだけあった。

気になり、そちらへ近づいていく。

近くで見してみると、その黒い水晶が思っていたより大きい事が分かった。

これ以外にも無いかと探してみるが、どうやらこれだけのようだった。

（………こんな、黒い水晶など、初めて見ました………）

何故、この水晶だけが黒いのだろう？

素朴な疑問が浮かんできた。

確か、この場所は、ルフィアの心を表した場だ。つまりは、この黒い水晶もルフィアの心の一部と言う事になる。

(……………復讐心、などでしょうか)

きっとこの黒い水晶は、ルフィアの醜い心を表している。そう、思った。

黒の水晶に触れようとしたその時、一瞬にして場所が変わった。

「……………ルフィア」

名を呼ばれ、振り返ると、ソシファ、レキ、ルーガの三人が居た。どうやら戻ってきたみたいだ。目の前には、硝子の扉が聳え立っていた。

「おかえり、ルフィア」

「……………ただいまっ、です」

ソシファ達の顔を見るなり、安心した。

何故だかソシファも、ルフィアの顔を覗き込んで安心したような表情を顔に浮かべていた。不思議には思ったが、特に気にはならなかった。

周りを見渡してみるが、ライム達の姿は無かった。

「ライム君達はまだ扉の中なの。でも、きっともうすぐ出てくると思うよ」

辺りを見渡すルフィアに気がつき、ソシファが苦笑いしながら教えた。

その言葉に、ゆっくりと胸を撫で下ろした。

「疲れたでしょ？ 影と戦って」

素直に頷くと、やっぱりね、とソシファは言ってから笑った。

「私も入った事があってね。苦労したの」

その時は、今の貴方より時間がかかったよ、と続けた。

話を聞きながら、ルフィアは小さく欠伸をしてしまった。

疲れた所為か、先ほどから眠くて仕方なかった。

「すぐって言っても、ライム達が出てくるまで時間がある。寝とけ」

まだ起きてライム達を待っていたかったが、レキの声を聞いた途端、ふっと意識を失い眠り始めた。

眠りについたルフィアを見詰めながら、三人はずっと黙り込んでいた。

不意に、ルーガが口を開く。

『……運命が、ついに動き出した。姫は、もうすぐ仲間となる』

ルーガの一言は、ソシファ達にほんの僅かの希望と、たくさんの悲しみしか生ませなかった。

後少し。それで、ルフィアは真の仲間となる。

それはソシファにとって嬉しい事であり、辛く悲しい事でもある。戻れるならば昔に戻りたい。両親が元気でいて、守護神と皆遊んでいた頃に。でも、もうそれは遠い昔のような感覚になってしまっている。年々記憶が薄れていくのが、ソシファ自身でも感じ取る事

が出来た。

寝てしまったルフィアの顔を見る。

「……………レキ、ルーガ。運命の神様は残酷だね」

ぼつりと出た言葉に、レキ達は俯いた。

「……………神は、想定外の者に、新たな運命をやらねばならぬ。なるべく、他の者と交わらぬようしなくてはいけない。それに、穴は埋めなくてはならない」

ルーガの言う穴とは、きっとあの事だと、ソシファはすぐに分かった。

「……………恨みなくなるの、たまに。『地』の属性の守護神を」

守護神には『火』『水』『風』『雷』『光』『闇』『無』の属性に分かれてそれぞれ居る。けど、昔は『地』の属性も居たのだ。ルフィアが生まれる前、ソシファが生まれてから三年後まで。

二人居た『地』の守護神は、死んだ。守護神トップの実力を持つ『無』の守護神、ゼノンの手によって。

本来、守護神は不老不死の存在。けれども、本当は不老ではあっても不死ではない。だからと言って、普通の方法では死ねないのだ。守護神が死ぬ方法は、一つだけある。けれども、ソシファは知らない。知っているのは『無』のゼノン、『光』のオネン、『闇』のネオン、『火』のシーガ。つまりはレキ。『風』のルーガ、『水』の水生。つまりは水氷鳥。『雷』の雷生。つまりは電雷鳥。

この六人だけが、守護神が死ぬ方法を知っている。もともと電雷鳥は知らなかったが、自ら考え、方法が分かっただけらしい。

『地』の守護神が死んだのには理由がある。これは、ソシファが

レキから聞いた話だ。

昔、『地』の守護神二人が、己の力を利用し悪用した。――人殺しに。

その事を知ったゼノンが、『地』の二人を制裁した。

詳しい話までは知らない。けど、ソシファにとってそんな事は関係ない。

この二人は、己の優れている力を利用して悪事を働いた。それは許されない事。それに、『地』が殺したのは、まだ生まれたばかりの赤子だったという。

まだ、先にいくつもの未来がある赤子だ。それなのに、『地』の守護神はその赤子未来を奪った。

決して、許してはいけない。例え、理由がなんであろうと。

この『地』の守護神が抜けて、守護神の中で穴が出来た。だから、それを埋めなくてはならない。そしてその為に、新たな悲しみが生まれる。

「……恨みたくなるのは当然だろうが、お前は人を恨む事が嫌いなんだろう？ 復讐は何も生まない」

「ただ新たな悲しみを生むだけ」

レキの言葉に、ソシファが続ける。

この言葉は、ソシファが大都市カルディアでルフィアに対し言った言葉だ。

「まあ、復讐じゃねえけどな。恨みだって一緒だろう？」

「確かに。恨みも復讐も、似たようなもの、だね」

恨みも復讐も、人に憎しみを向けるのには変わらない。

妹の、まだ幼さが残る寝顔を見て、ソシファは心の中で祈った。

（誰にも縛られる事のない自由を。誰かに愛される幸せを、この子に与えてあげて下さい）

叶わぬ願いだとしても、ソシファは祈り続けた。

少しの肌寒さを感じて、ルフィアは目を覚ました。

上半身だけを起こし、周りを見渡す。そこでやっと、まだ城の中に居たのだと思い出した。

「ルフィア！」

不意に名前を呼ばれて、声のする方に振り返る。振り返った瞬間、抱きしめられた。

「ルフィア！ 私魔法使えるようになったのよ！」

抱きしめてきたのはティアだった。飛び跳ねそうな勢いで喜んでいる。

今此処に居るといふ事は、扉から出てこれたという事だ。

「おめでとうございます、ティア」

「うん！ ありがとう」

本当に嬉しそうに笑うティアに、ルフィアも笑った。

二人で笑っていると、今度はライムと煉が近づいてきた。

「ライム、煉ちゃんも。おめでとうございま………」

そこまで言いかけて、止める。

「……やっぱ、気になるか？」

ライムが居心地悪そうに、頭をがしがしと掻いた。

「その頭……どうかしたんですか？」

その頭、とは、ライムの髪型の事だ。

前までは、適当に伸ばされたばさばさの髪だったが、今の髪は後ろ部分が肩につく程度だったり、腰まで伸びていたりとはらばらになつていた、耳の位置より前の方は前と変わっていない。

「影と戦つた時、なつちまつたんだ。避けてたりとかしたら、髪が矢に切られちまつて」

別に気にする様子でもないが、ルフィアには気になって仕方なかった。今すぐにも整えたいという気持ちがある。

「良ければ、整えましょうか？」

申し出れば、ライムが目を丸くして驚いていた。ルフィアがそう言い出すとは思ってもしなかったようだ。

「いつ、良いのか!？」

「はい。別に構いませんよ」

そう言つと、ライムは何故か喜んでいた。

どうしてそんな事で喜ぶのかルフィアには分からなかったが、ティアと煉は分かつてるように笑っていた。

ライムに座ってもらうように頼んだ。すぐに胡坐で座り、頼むぜ、

と言った。

後ろに膝立ちになって、さっきライムから借りたナイフで髪を整えていった。

本当は別のナイフが良かった。このナイフはライムがいつも狩る時、獲物にどめを刺す為に使っているものだ。血はついていないが、何と無く嫌と感じる。

「ライム、良かったわねえ」

「顔がにやけてるぞ」

「う、うっせえ！」

途中、何回かティアと煉がライムを茶化した。その度動くライムに、ルフィアが注意をすると、すぐに大人しくなる。

「終わりましたよ」

最後に、服等についた髪の毛を払い落としてから立ち上がった。ライムもその後続けて立ち上がる。

「ありがとな、ルフィア」

少し照れたような笑顔を見せたライムに、ルフィアは顔を赤くした。胸がどきどきと鳴ってるのが分かる。

昔から、ルフィアはライムの笑顔が好きだ。見る度に、何だか胸が暖かくなる感じがする。

「さっきより、よっぽどましになったじゃない」

「当たり前だろ！」

今、整えた髪は、前の部分だけ長くて、後ろの方は短いという髪

型だった。

前部分も切ろうと思ったが、此方の方がライムには似合うと考えたから、この髪型にした。

「それにしても、こうしてみんなで話していると、戻ってこれたと実感するな」

背伸びをしながら言った煉の言葉に、みんなして賛成だった。

「そういえば言いそびれてしまいましたね。改めて、ライム、煉ちゃん、おめでとうございます」

二人にも祝福の言葉を言うと、二人共からルフィアも、と返ってきた。

四人して笑っていると、ソシファ、レキ、ルーガが近づいてきた。

「喜んでいるところ悪いけど、守護神の主をそろそろ変えないとね」

真面目なソシファの声音に、ごくりと、ライムとティアが息を呑むのが分かった。

「どうやって、守護神を俺達が主とさせるんだ？」

正直、ルフィアもその事が気になっていた。

ルフィアはレキを従えているが、どうやって今の関係にしたのか覚えていなかった。だから非常に気になっていたのだ。

「っと、その前にな。ルフィア」

「はい？」

レキに名前を呼ばれ、一応返事はするものの、何故今呼ばれたか分からず首を傾げた。

「お前はもう一人、雷生を守護神として持て。煉には許可貰ってある」

「雷生……と言うと電雷鳥、ですか？」

「そうだ」

何故レキが居るのに。と思った。それに、そしたら煉の持つ守護神が一人となるのも気がかりだった。

「何故ですか？ 私にはレキが居ますよ？」

「常に、雷生には出ていてほしいんだ。あいつは頭が回るからない。」

それ程までに、雷生は頭が良いのは、ルフィアも覚えていた。頭の回転が速く、作戦など練る時はもってこいの人物かもしれない。

「それなら。分かりました」

「おう。それじゃ、いよいよやるぞ」

無意識に、ルフィアは息を呑んだ。

守護の契約と法術師の見し夢

「守護神の主あるじを変えるのは簡単だ。名前を新たに付けてやれば良い」
「名前、ですか？」

そんな簡単な事で良いのだろうか、と悩んでしまう。

「そう。簡単だけど、その守護神の真名しんみょう知っている事と、その守護神との信頼を持っていなければいけないの」

守護神の真名と言うと、レキの場合シーガとなる。電雷鳥でんらいは電生でんせいだ。

「じゃあ、水氷鳥すいしょうは水生ね」

「ルーガはなんて言うんだ？」

興味津々といった感じでライムがルーガに尋ねた。

そういえば、ライム達は知らなかったのだな、と改めて気がつく。ルフィアは昔から守護神全員の真名前を知っていた為ため困りはしなかったが、ライム達は全く知らないのだ。

「私は、ルーガが真名だ。誰の守護神でもないからな。それにこの国の番人と言えど、私が勝手にしている事だ」

「まあ、取り敢えずあは新しい名前を考えてやりや良いんだよ」

レキに言われ、それぞれ自分のもとにくる守護神の新しい名前を考えて始めた。

（電雷鳥の、新しい名前……）

頭を捻って考えていると、ライムが決めた、と声をあげた。続けてティアが出来たと言った。その後少し遅れて、ルフィアも決まった。

「じゃあまずライム君からやるね」

「どうすれば良いんだ？」

聞くと、ソシファは悩んでいた。忘れてしまっているのかもしれない。そこに、レキが助け舟を出した。

「呪文」

「ああ、そう呪文。私が教える言葉を覚えて、それをルーガに向かって言うだけで良いの」

「ふん。案外楽なのね」

つまらなそうに言うティアに、ソシファが笑った。

「確かに簡単だけどね、もしも少しでも、どちらかに相手に対しての嫌悪感があれば、出来ないの。だから大変だよ」

その言葉を聞いたティアとライムは、急に不安になったようだった。ライムはちらりとルーガの方を見たが、ルーガはいつもと変わらなかった。

「でも、私は大丈夫だと思ってる……じゃ、呪文教えるね」

「お、おう！」

「我、神との守護の契約望む者。汝、なんじ我守る代償に、我は汝に名

を与えん。答えは汝の心。我、汝裏切らぬと誓う。汝、我裏切らぬと誓う。誓うのであれば、我が手を取りてそれを示せ。取り敢えず此処まで。本当に長いんだよね。面倒くさいのに……どう、覚えられる？」

ふう、と一息つき、長いけど案外簡単でしょう？ と続ける。
ちらりとライムを見てみると、ぽかんと口を開けて遠くを見ていた。

「……………書いた方が良さそうだね」
「……………そうして下さい」

先程の文字も合わせ、次に続く言葉もソシファは紙切れに書いていった。

「お、おっし！ やつてみるぜ！」

紙を渡されたライムは、今度こそ平気なようだ。
ルーガと向き合い、真剣な表情に変わる。

「……………我、神との守護を契約望む者。汝、我守る代償に、我は汝に名を与えん。答えは汝の心。我、汝裏切らぬと誓う。汝、我裏切らぬと誓う。誓うのであれば、我が手を取りてそれを示せ」

おほつか
覚束無く、少々頼りなさも感じるが、しっかりと噛まずに言い切れた。それだけでライムもルフィア達も一安心だ。

しかし、まだ終わった訳ではない。後少し残っており、もし途中でライムが噛めばやり直しとなる。そうしないようにもライムは必死だ。

『 貴方を護ると、裏切ぬと、誓いましょう 』

ライムの右手を取り、ルーガは跪いた。

その声音は、ライムとは違い少しの頼りなさも感じず、堂々としたものだ。

「 汝の名は、トウガ 」

風神ルーガ。新たに授かりし名はトウガ。

後はルーガがライムの手に忠誠を誓う為に、額の石をライムの手の甲につけて終わる。

『 主、ライム・グラスセ。私は契約がある限り、貴方のお傍に在り続けるでしょう。主である貴方を護るが為に 』

取っていた右手をゆっくりと己の額に埋まっている緑の宝玉へと導いた。

最後の仕上げの為、トウガの口が動く。

『 我が名、トウガ。今より風の守り神であり、主ライムの守護神なり 』

己の新たな名を言った途端、トウガの身体は薄緑の光に包まれる。光はだんだんと小さくなっていき、やがて最後には消えていった。光が消えた後に残った生物を見て、ルフニア、ティア、煉の少女三人が目を見せた。

きつと、それぞれ同じ事を思ったに違いない。

「かつ、可愛い！」

それを口に出したのはティアだ。ルフィアと煉は何度も頷いた。トウガは光が消えた後、獣の姿のレキと色が違うだけで殆ど同じ容姿になっていた。

レキの身体が白の毛に対し、トウガは薄緑の毛。レキよりも少しだけ長い毛並みだ。赤い鉢巻はちまきは相変わらず眼を隠していた。

「これからよろしくな、トウガ」

「……………ああ、我が主」

我が主、と言われると、ライムはなんともいえないような表情になり照れていた。

きっと、守護神を持った事を改めて確認して照れているのだろう。

「そういえば。守護神従えてる人って、守護神の魔力が流れるんじゃないかったけ？ 確か、本来の姿に戻ってる場合守護神の五分の一の魔力が流れてて、仮の姿の時が十分の一？」

「……………よく覚えているな」

確かに、そのような事があったな。と、ティアに言われて思い出した。

大分前に話した事を覚えていて、レキは続けて、凄い記憶力だ。恐ろしい。と言ったが為にティアに岩陰へと連行された。

もうルフィアは昔からレキの魔力を浴びてる為、気にならない。しかし今初めてトウガの魔力を浴びたライムはどうなのだろうか。そうはいつでも今は十分の一だが。

「そっいゃ、少し身体が重いな」

自分の両手を見て、ぼうつとしていた。特にあまり変化はなかったようだ。

「じゃあ次のティアちゃんやるよ。レキも戻ってきなさい」
「はい」

呼ばれて岩陰からはティアが戻ってくる。しかし連行されたレキは戻ってきていない。

それでもソシファは特に何も言わずに、煉の方を向いた。
ただ唯一、ライムだけが岩陰に向かった。その肩に乗っているトウガも一緒だ。

「煉さん、水氷鳥出してもらえる？」

「分かった」

懐ふところから青い札をだし水氷鳥の名を呼んだ。

札から青い煙が立ち上り、だんだんと大きな鳥の影になってくる。煙が完全に晴れると、そこには水氷鳥の姿があった。

「あら、ソシファ姫様ではないですかあ！ 久しぶりに会えて嬉しいわあ」

「煉さん、貴方には水氷鳥との契約を切ってもらうね」

嬉しそうにソシファに話しかける水氷鳥を無視して、煉に向けたままソシファは言った。

不満げにしていた水氷鳥だが、これから何をするか気がつき表情が変わる。

守護の契約を結んでいた者同士が、向かい合った。
言葉がなくとも、長年の関係から全てが分かっているように。

きつと、この二人は契約を解いたとしても、その仲だけは変わらないだろう。今度は、ちゃんとした友達になるだけだ。

「我が守護神、水氷鳥。真名を水生。永きに亘り我^{わた}の守護の契約を護り、ご苦勞であつた。もう、契約から我は汝を解放そう。――自由になつてくれ」

ふわりと、風が流れた。風は煉の長い髪を微かに揺らす。

少しあつた煉との間合いを詰めた水氷鳥は、目の前まで行くと、その大きな翼を開いた。

『心はいつも貴方の御傍に居続けるでしょう。我、主であつた煉の名を心に刻まん』

そう言い、水氷鳥は煉へと頭を下げた。まるで、跪いてるようにも見えた。

その瞬間、鳥である身体が青白い光に包まれていった。

光は徐々に大きくなり、やがては水氷鳥全て包み込んでしまった。全てを包み終えた光は、青白い色から黄金色へと光を変え輝き、弾け飛ぶ。光はあつという間に消え、水氷鳥は本来の姿である人の形になつていた。

「・・・・・・・・どちら様？」

誰もが思つただらう言葉を、ティアが口にした。もしティアが言つていなければ、ライムあたりが言つていただろう。

既にルフィアは本来の姿の水氷鳥と会つていたので特に驚きはしなかつたが、相変わらず、と同性ながらも見惚れてしまう。

「酷いわね、ティアちゃん」

口では不貞腐れているように言っているのに、表情は非常に楽しげだ。何故ティアがそう言ったのかをしっかりと理解しているのだ。本来の水氷鳥の姿は、水面に映る女神のような美しさを持っていた。

藍の深い髪は膝くらいまで伸びており、手足はすらりと伸びた豊満な体付きをしていた。

いたずらげに光る瞳は暗めの髪色から一変し、明るい空の色だ。透き通るような真珠の肌に良く合っていた。

額に埋め込まれている宝玉は、髪と同じような深い藍だった。この宝玉だけは変わってはいなかった。

先程まで鳥だったのが信じられない程、美しい女性になった。

「やっぱり、人の形をしていた方が楽で良いわあ」

「……あ、やっぱり水氷鳥なのね……」

自分の髪を指先で一房掬って遊んでいる美女に、ティアは羨ましそうな視線を送った。

「前の名前は水氷鳥だけど、今の名前は水生よ。これが本当の名前なのよ」

そう、訂正する水生は、子供っぽく頬を膨らました。

同性から見ても美しいと素直に思えるその美貌には、妬みよりも先に憧れや羨ましさが出てしまう。生まれ持った美しさなのだろうが、やはり女である限り、己と比較せずにはいられない。ルフィアだって、あれくらい美しければ、と思ってしまう。

「はいはい、そのくらいにしてね。ルフィアと電雷鳥の契約もあるんだから」

そう、ソシファに言われてから考えを中断させた。
無言で、ティアと水氷鳥が頷き合い、互いに向かい合うような場所
に立った。

やれと言われる前に、二人は契約を始めた。

「我、神との守護を契約望む者。汝、我守る代償に、我は汝に名
を与えん。答えは汝の心。我、汝裏切らぬと誓う。汝、我裏切らぬ
と誓う。誓うのであれば、我が手を取りてそれを示せ」

流石ティア、と言うべきか。ライムの時とは大分違い、すらすら
と言葉を紡いだ。

堂々とした態度で進めていくティアには、緊張というものがない
ようにも思えるくらいだった。

この様子だと、最後まで順調に進みそうだ。

『貴方を護ると、裏切ぬと、誓いましょう』

ティアの右手を取り、水生は跪いた。

凜と響く声は、ティア同様、きつぱりとしたものだった。

普段顔に浮かべる笑みを消し、真剣にこの行為を実行していた。

「汝の名は、ミルカ」

水神、水生。新たに授かりし名はミルカ。

手を取ったまま、頭を上げ、ティアと視線を交わした。

『主が名は、ティア・ルーベルト。我は契約がある限り、貴方のお傍に在り続けるでしょう。主である貴方を護るが為に』

後は、新たに名を与えられたミルカが、忠誠を誓うという意味を込め、額の石をティアの右手の甲に当てるだけだ。

取っていた右手をゆつくりと己の額に埋まっている水色の宝玉へと導いた。

最後に、ミルカの口が動く。

『我が名、ミルカ。今より水の守り神であり、主ティアの守護神なり』

己の新たな名を言った途端、ミルカの身体は青の光に包まれる。

光はだんだんと小さくなっていき、やがて最後には消えていった。そして、最後に残ったのは獣の姿になったミルカだった。

「これからよろしくねえ、主様」

深く長い藍の毛に覆われた身体はレキ達より一回り程小さく、耳は垂れていた。額の宝玉が何だか大きく見えてしまう。

獣へと姿が変わっても、歌うような話し方は相変わらずだった。

己の手や尻尾を眺めて、ミルカは純粹に喜んでいた。

無事に契約が終わり、皆安心して笑った。しかし、レキだけは笑っていないかった。

「ティア？」

契約が終わった途端、ティアの様子がおかしくなったような気がしたのだ。

きつと姿を変えたミルカに可愛いと言い飛びつくと思っていたの

だが、ただその場に突っ立っているだけで、動きもしなかった。
顔色は一気に青ざめ、心なしか重心が定まっていないうようにぐらぐらと揺れていた。

皆に合合わせて無理して笑っている、といった感じで、ずっと辛そうだ。

レキがティアを呼んでから、ルフィア達もその異変に気が付いた。皆が不安になっている中、ソシファは何かに気が付いたように突然苦笑をしてからティアのもとへ歩み寄った。

「座った方が良いよ？ ティアちゃんはライム君と違って女の子だからね。辛いんでしょ？」

そう、ソシファに言われ、無言のままティアは手を引かれ今居る位置より少し離れた岩に腰を下ろした。

腰を下ろした途端、ティアはふう、と息を吐き、弱弱しく笑みを浮かべた。

「思ってたより、流れてくる魔力が強かったみたい。ちょっと気持ち悪くなっただけ」

それだけを言うと、ティアは黙ってしまった。

ライムの時はあまり気にならなかった守護神の魔力が、ティアにとっては辛いものだったらしい。

本来より身体が強い訳でないティアだ。突然の状況の異変に、すぐには身体が慣れないようだ。故に気分も悪くなってしまったのだろう。

「きつとすぐ慣れますよ。無理はしないで座っていて下さい」

声には出さなかったが、本当ならばすぐにでも横になって休んで

欲しかった。それにこの場からも離れて欲しかった。しかし、場所が場所だ。

近くに町など無いし、寝るとなれば硬い地面に直接寝るしかない。それに辺りは血生臭い臭いがして、余計に気分が悪くなりそうだが、魔物も多く安心して寝ると言える訳もない。座って我慢してもらうしかなかった。

「私は大丈夫よ。それより、ルフィアの儀式早くやりなよ」

ルフィアと電雷鳥の儀式が早く終われば、それだけ早くティアを宿屋に連れていき休める筈だ。となれば、早く済ましてしまおうと考えた。

契約をする前に、まず煉と電雷鳥の契約を切ってもらうのをしてもらわなければいけなく、煉は先程と同じように懷から黄色い符を取り出した。

電雷鳥の名を呼ぼうとしたその時――

「きゃあああつ!?!」

突然ティアの悲鳴が当たりに響き渡った。

慌ててティアの居る筈の岩を見ると、ティアの姿はなかった。ティアの座ってた岩ごと消えていた。

岩があつた筈の場所にはぽっかりと穴が開いている。

「ティアッ!?!」

穴の開いている場所に駆け寄ると、穴は下をずっと真横に進んで掘られていた。

明らかに魔物の仕業だった。

皆動揺に駆られる中、ソシファは冷静でいた。

「ルフィア、レキを本来の姿に戻して！」
「は、はいっ！」

突然親友の姿が消え、動揺して涙目になっていたルフィアは姉に命じられ、レキを本来の姿へと戻した。
姿が戻ったレキは何も言わぬまま、穴の中に入りその中を進んでいってしまった。

「さっきの魔物は光に弱そうだったの。だからレキを向かわせた。だからもう安心して良いよ」

そうソシファに言われても、ルフィアは不安で仕方が無かった。しかし、安心しろと姉が言ったのだから、無理矢理にでも自分を安心させた。それに、レキが助けに向かった。レキを信頼しているからこそ、ルフィアは何も言わなかった。

「ティアちゃんは大丈夫。私達は契約を続けるよ」

誰も、反論はしなかった。皆ルフィアと同じようにレキを信じているからだ。

不安を押し殺し、ルフィアは儀式に集中した。

（レキ、ティアを頼みますよ）

レキは自分に対して怒りをぶつけていた。

何故、離れた場所で休ませてしまったのだろうか。此処等には魔物が多いという事を知っていたというのに。ただでさえティアは弱っていて、誰かが傍で守ってなければいけなかったのに。

自分を責めずにはいられなかった。

儀式の方に集中していたとしても、魔物が近づいていた事に全く気がつけなかった。もつとティアの方を意識していれば、こんな事にはならなかっただろう。

穴の中は暗かったが、守護神である自分には関係がなかった。暗くとも、全てはつきり見えていた。

魔物は大きいらしく、穴もレキが普通に立つても上に余裕がある程度で、走りやすくて良かった。

先程から全力で走っているが、全然魔物の姿が見えなかった。相手も相当速いらしく、まだ離れた先に居る事が音で分かった。

もう暫く走り続けていると、微かに穴を掘っている音が聞こえてきた。進む度にだんだんと音がはつきりになっていく。それと同時に、ティアの匂いも近づいていっていた。

（もうすぐだ………っ！）

走り続け、そして漸くティアの姿を見つけた。

魔物は前を向いている所為で顔は見えなかったが、全身を短い毛で覆われていた。長い尻尾があり、それティアを巻きつき掴んでいた。ティアの様子を見ると、どうやら気絶しているようでそれ以外は無事のようなだった。

しかし、ティアの顔色は酷く青いように見えた。魔物が穴を掘る振動などを感じ、余計に気分が悪くなってしまったのかもしれない。

どちらにせよ、早く助け出さなければいけなかった。

「ギユウ？」

魔物がレキの気配に気が付いたのか、穴を掘るのを止め、振り返る。

でかい図体の割りに目は非常に小さく、鼻と口がやけにでかかった。口からは無様にもぼたぼたと涎よだれを垂らし、ぎらりと鋭い牙が覗いていた。

『ティアを、返せ』

そう言ったものの、言葉が通じるような相手ではなかった。

レキの姿を確認すると、魔物は器用に穴の中で方向転換し、レキと向き合う形となった。

「ギユイイ！」

新しい食料が見つかって喜ぶように魔物は鳴き、さらにだらしくぼたぼたと涎を垂らした。

しかし、喜びの鳴き声は次に悲鳴へと変わった。

『貴様に構っている暇などない！』

翳かざしたレキの手から炎が迸ほとばしり、魔物の足と手だけを焼いた。それから魔物の目の前に、炎を浮かべる。

「ギャルルッ！」

魔物は炎の光から目を逸らすように後ろへ向きを変え、土を被せ

たりして炎を消そうとしていた。しかし、足に付いた炎も、手に付いた炎も消えはしない。それどころか、炎は唸りをあげますます強くなる一方だった。

此方に背を向けているうちに、レキは魔物へと駆け寄った。爪を伸ばし出し、ティアを巻きつけている尻尾を断ち切ってからティアを抱きかかえ魔物と距離をとった。

それから間をおかず、今度は手足だけでなく全体を炎で包んだ。

魔物は狂ったように己の身体を地の壁に押し付け、悶絶する。しかし、炎が消える事はなかった。

目を細めたレキは、意識を集中させより強い炎で魔物を苦しめる。暫くしてから魔物の焼ける臭いが漂ってきたのに気が付き、ティアがそれを吸わないようにと魔物に背を向け歩き出した。

最後の最後まで魔物は暴れていたが、レキが背を向けると急激に大人しくなり、やがては動かなくなってしまった。

本当ならば塵すら残らぬ程炎で焼いてしまいたかったが、それよりもティアを優先すべきだ。

ティアの体調を考えると走りたくはなかったが、先程の魔物の臭いが大分強くなってきたしまった。このままでは、さらに体調を悪くしかねない程だ。

外に出たかったが、その出口まではまだまだ先だ。

どうするべきかと悩んでいると、魔物が穴を掘っていたのを思いだした。

(・・・仕方ないか)

暫く悩んだ末、頭に浮かんだ方法をとる事にした。あまりやりたくはなかったが、背に腹は変えられない。

じっと、少し先の天井を睨みつけた後、自分の手の上に炎の玉を作り出した。最初は手の平くらいの大きさだったが、次第に大きさを増し、最終的には両腕で抱える程の大きさまでになった。

炎が大きくなると、一息もつかずそれを少し離れた天井へと投げつけた。すぐさま後ろを向き、ティアを抱え込んで岩などの落下から守る。

レキの目的は天井に穴を開け、そこから外へようというものだった。

炎は見事に貫通し、その後には穴が残った。そこから少し曇った空が覗いている。

人間離れた跳躍で外の地面に立つと、そのままティアを抱え直して再び歩き出した。

いつの間にか、先程まで自分への怒りも、魔物への怒りも消えていた。ティアが無事だったという事で、心に余裕が持て、いつもの自分に戻っていた。

視線を前にしてみると、大分遠くに城が見えた。随分遠くに来てしまっていたらしい。後ろを見てみると、城よりも近い位置に町が見えた。

一旦歩みを止めた後、今度は逆方向に歩き出した。

今のティアの様子を見る限り、城に戻るよりも何よりも先に休ませるのが最善なものだった。

ティアを宿屋で休ませた後、ルフィア達のもとへ向かえば良いだろう。きっとルフィア達も分かってくれる筈だ。

本来、守護神であるレキが守らなければいけないのはルフィアだ。契約を交わした主であるルフィアを優先して守らなければいけない。しかし今回、その守るべき主を置いてティアを助けにいつてしまった。それに無断で行動している。本来ならばはいけない行為だけれども、どうしてもたまたに、誰と契約を交わしているとか自分の立場など全てを忘れて行動してしまう時がある。守らなければいけないルフィアより、優先してしまう人物がいる。

歩きながら、そつと自分にかかえられているティアを見た。

先程よりは幾分か気分が良くなったのか、顔色が良い。けれど、まだ青いのに変わりなかった。

どうしても、ティアが関わっていると冷静でいられなくなる時がある。勿論ルフィアやライムでも同じなのだが、ティアが一番冷静を保てなくなるのだ。時には、己を忘れる程に。ルフィアでもそこまですぐ事今まで城が襲撃された時くらいだった。

共に行動している中で、ティア一番体力面で弱いという事もある。しかし、それだけではない気もするのだ。

前ガイルと戦った時、守る存在のルフィアを離れティアを守ってしまった時があった。特にルフィア達は気にしていないだろうが、レキは気にしていた。

ルフィアは死んではいけない。守らなければいけないのだ。ルフィアは強いだろう。しかし、まだまだ弱い。だからレキが守護神としてルフィアを守っていた。ルフィアの両親、そして姉であるソシファとも誓い、守ると覚悟した。しかし、そう覚悟したのに別の人物を守ってしまう。

ずっと、口には出さなかったが悩んでいた。

しかし、今度からは守らなくても良いようになる。

新しく、ティアにはミル力という心強い守護神がついた。ミル力は戦闘には向いてはいないが、回復や補助を得意としている。それに長年の知恵や経験を生かし、ティアを危険には晒す事はないだろう。しかし、どこか不安を感じていた。

別にミル力を信用していない訳ではない。むしろ安心して任せられる。しかし、何故か悩んでしまう。大丈夫なのに、考えてしまう。ルフィアに出会ってから、自分は大きく変わった。戦う以外にも、ちゃんとあると幼かったルフィアから教えてもらった。それからティアとライム、ザックと村の皆に会い、さらに変わっただろう。昔の自分からは想像も出来ない程、良い方へと。

もし昔のままだったら、今のよう悩みは出来なかったのかもしれない。
ない。

現在の自分と、過去の自分。どちらの方が良いのだろうか。
悩んでいると、胸の中に納まっているティアが微かに動いた。そ

れから、ゆつくりと^{まぶた}瞼が開いた。

『起きたか。もう少し寝ていた方がよいぞ』

町まではまだ時間がかかりそうだった。それに少しでも寝て、早く回復してもらいたい。

そう思ってたのだが、ティアから出たのは了解の言葉でなく、零れ落ちた涙だった。

『ティア・・・・・・・・！？』

あまりに突然の事で、レキは一旦足を止めた。抱きかかえられたまま、ティアぼろぼろと涙を流していた。レキの胸に顔を押し付け、声を殺して涙を止めようとしていたが、涙が止まる気配はなかった。身体をぶるぶると震わせ、泣き声も震えていた。

「こわ、い、よ・・・・・・・・レキ、怖いっ！」

怖い、怖い。悲しくて、辛くて怖い。

勝手に身体が震え、涙が流れた。どんなに必死になって止めようとしても、一層強くなるばかりだった。

胸を中を占めていたのは、恐怖だけだった。それしか考える事が出来ない。

『ティア、ティア！』

何度もレキに名前を呼ばれるが、返事を返す事が出来ない。返さずとしても、全て泣き声に変わってしまう。

何故、血だらけだったのだろう。

何故、あいつが居なかったのだろう。あの人達が居なかったのだらう。

何故、あの子があんな表情をしていたのだろう。

何故、こんなに苦しいんだらう……。

考えても考えても、答えは分からなかった。泣いている所為で上手く考えられないのかもしれないが、きっと答えは自分だけでは出せないだらう。

「どう、しよっ……ル、ファイア、が……！」
『ルファイアがどうかしたのか？』

話さなければいけない。レキだけでも。自分一人では、この気持ちに押しつぶされそうだ。

おえっ 嗚咽混じりだが、必死にレキに伝えた。先程見た夢の話を。

血に染まった大地に立っていた者は、ただ一人だけだった。

長かった青髪はぱつぱつと切られ、風になびいていた。紛れもなく、その姿はルファイアだった。

顔には返り血を浴びて紅く染まり、その瞳には何も映していなかった。

彼女の足元には、三人の動かない身体が横たわっていた。ライム

とティアとザックの三人だ。息すらしていないかのように、その身体はぴくりとも動かない。

そっと、ルフィアはライムの近くの地に膝を付けた。その動かない手を取り、ぎゅっと両手で握り締める。

瞳には何も映していない。けれど、泣いていた。涙は流れてはいない。でも分かった。

ルフィアの心は泣いている、と。

ただじっと、ルフィアはその場を動かうとはしなかった。ずっとライムの手を握り締め、心の中で涙を流していた。

この場に守護神であるレキ達の姿はなく、ただ四人の人間しか居なかった。

しかし、何故だか分かるような気がした。これは、ガイルとの闘いの後を映像なのではないかと。ガイルの姿はないが、何故かそう感じた。

不意に、動かなかったルフィアが立ち上がった。ライムの手をそっと置き、空を見詰める。

空は晴れ渡っている訳ではなく、どんよりと雲が覆っていた。黙り続けていたルフィアの口が開き、静かに言葉を紡いだ。

全てが、終わってしまった。と――

普通ならば、怖いなんて感じない筈の事だ。それにただの夢と思うだろう。けど、怖くて仕方がなかった。ただの夢と分からなかった。

た。

妙に現実味があり、あの時のルフィアの表情が胸をなんともいえない感情へ包み込まれた。

震えは止まらず、ティアは自分の身体を抱き締めた。

話を聞いたレキは、何も言わずにただ黙っていた。

取り敢えずこの格好のまま居るのもあれで、レキはティアを抱えたままその場に腰を下ろし胡坐あぐらをかいた。しかし、ティアを離しはしなかった。

こんなにも取り乱しているティアを初めて見た。震えも止まりはしない。余程、夢が怖かったのだろう。

法術師の夢は、実は非常に珍しいものだった。

法師は滅多な事がない限り夢を見る事はない。その代わり、見た夢は正夢となるのだ。簡単にいえば、法術師の見た夢は予知夢という事だ。決して外れる事のない、非常に正確なものだ。

その事を知っているのは極僅かな人数だけであり、知っている者はそうそう居ない。ティアもその事は知らないであろう。しかし、この様子だと本心は気がついていいるのかもしれない。

鋭い勘を持つティアだ。それに頭も悪くはない。気付くのはそう遠くない事なのかもしれない。

『……ティア、夢についてルフィア達には決しているな。ただし、守護神達には全てを話す。良いな？』

「分かった、わ……」

返事は酷く弱弱しいものだった。

ただでさえ体力を消耗しているのに泣き、それに加え夢を見てしまった。法術師は夢を滅多に見ない代わりに予知夢を見る。その予知夢は魔力を大量に消費するのだ。

今の時点でティアが目覚めたのは奇跡といっても良いくらいで、それ程辛い筈だ。下手したら、このまま死に繋がってもおかしくな

い筈だった。

『もう、夢の事は忘れて寝ろ。辛いだろう？』

「・・・・・・・・ん」

小さい返事が聞こえたと思ったら、ティアは気を失うように眠りについた。

決して穏やかとはいえない寝顔に、苦虫を噛みつぶしたような気分になる。

（仕方が無い・・・・・・・・）

覚悟をし、ティアの右手を取った。

その右手をそのまま己の口元へ運び、手の甲に唇を落とした。

「・・・・・・・・ん・・・」

先程まで顔色が青かったティアだったが、少しだけ回復したように頬の色が変わる。

それを横目で確認したレキは、手の甲から唇を離し、その手をもとの場所へと戻す。

『つたく、餓鬼のクセに夢なんか見るからこうなるんだ。・・・・・・・・』

・心配させんなよ』

先程レキの行った行為は、守護神達に一つだけ与えられた特殊能力のようなものだ。

レキの場合は右の手の甲に口付けをする事で己の魔力を移す、というものだ。

先程レキの魔力をティアに移した。体力も消耗し、魔力も消耗し

ているティアにとって、どちらかでも回復すれば、身体全体の回復も早まる筈だ。故に魔力を移したのだ。

他の守護神達はレキと全く異なった能力を持つ者も居れば、似たような能力を持つ者も居る。

例えばミル力だったら、左の手の甲に口付けをすれば、己の体力を相手に移すという事が可能だ。トウガだったら、風を自由に操る事が出来る。応用として、風乗って移動出来るから素早い行動が出来る。このように能力はその人によって様々で、似たような能力は持っていても同じ能力を持つ者はいないのだ。

しかし、能力を使うとそれなりの副作用がある。とはいったものの、殆どが魔力の消耗だけであり、それも大したものではない。レキの場合は、移した魔力の倍消耗する、というものだ。

しかし能力が強力であれば、それなりに副作用もつよくなる。

守護神で最強である『無』の守護神。その能力は、全てを無にする事。使い方によっては、生命すら奪え、その存在自体を消してしまふ程恐ろしい能力だ。副作用は、大切な者の命、だそうだ。つまり、その能力を使えば、自分にとって大切と思う存在が無に消えるのだ。何故己の命でないのかは分からないが、その能力は容易く使ってはいけないものだ。

今まで一度も『無』の守護神は能力を使った事はないらしい。命の重さを知っているからこそ、使えないのかもしれない。

本心で、レキは自分の能力が魔力移しで良かったと思っていた。

そのお陰で、今回はティアを少しでも楽に出来た。

『……さて、行くとするか』

再び立ち上がり、まだ少し遠い町を目指した。

レキが再び歩み始めたなか、ルフィアは契約を交わしていた。

目の前に居るのは本来の姿の電雷鳥。真の名を雷生という。

長い金の髪を靡^{なび}かせ、堂々とした態度でルフィアの手を取り跪いていた。瞳は髪と同じく美しい金色で、強い意志が籠もっている。

普段は少し下がっている眼鏡はきっちりと掛けられ、契約に対する真剣さが伝わってきていた。

雷生の真の姿はミルカとまではいえないが、見惚れる程の美しい顔立ちの長身の青年だった。あの背の高さがなければ、女性とも見受けれる綺麗で細い輪郭を写していた。

「 汝の名は、ライカ 」

雷神^{らいしん}、雷生。新たに授かりし名はライカ。

手を取ったまま、頭を上げ、ルフィアと視線を交わす。

昔からあまり接点のなかった二人だが、そこにある信頼は確かなものだった。

『 主が名は、ルシファ・ゲルドン。我は契約がある限り、貴方のお傍に在り続けるでしょう。主である貴方を護るが為に 』

ルフィアの真の名を口にし、深々と頭を下げる。新たに名を与えられたライカは最後の行為へと移った。

取っていた右手をゆっくりと己の額に埋まっている金色の宝玉へと導いた。

最後に、ライカの口が動く。

『我が名、ライカ。今より雷の守り神であり、主ルシファの守護神なり』

己の新たな名を言った途端、ライカの身体は眩い光に包まれる。光はだんだんと小さくなっていき、やがて最後には消えていった。そして、最後に残ったのは金色の毛並みを持つ獣の姿になったライカだった。

「よろしゅうな、姫様」

「何を言ってるのですか。ルフィアですよ、ライカ。様はいりませんからね？」

「せやったな。よろしゅうな、ルフィア」

小さな前足を出し、ルフィアと小さな握手を交わした。満足そうに二人は笑った。

心配していた守護神の魔力については問題はなかった。普段からレキの魔力を浴びているうえ、小さい頃に訓練をしていた成果があった。

「さあて、帰りましょうか」

そう言ったのはソシファだった。

ソシファの話では、レキは既に宿屋へ向かったらしい。それはトウガが調べにいていたようだ。

「多分、帰る頃にはもう夕暮れね」

主の居ないミルカは、その代わりのようにライムの肩に乗ってい

た。ライムの守護神であるトウガはその頭の上でしっかりと座っている。それに加え、ライカまで空いている方の肩に乗った。

後ろから見ても前から見ても、ライムはとても滑稽な姿になってしまっていた。

当の本人は不服そうに膨れている。

「楽ね」

「楽だな」

「楽やなあ」

迷惑な三匹は口々にそう言い、これではまるでライムの怒りを煽っているようなものだった。

その証拠に、ライムは今にでも三匹を振り落とすような勢いで怒りを露にしている。そうになっているにも拘らず、三匹は愉快そうにライムをからかっていた。

その後すぐ、三匹が振り落とされたのは言うまでもないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0960c/>

SORRW and BOND - 運命-とき-の守り神 -

2010年12月30日09時56分発行